

ボランティアの哲学的分析（論文集）

近藤良樹

（目次）

- 第一章 勤労としてのボランティア
- 第二章 無償としてのボランティア
- 第三章 ボランティアと個人の自発性
- 第四章 ボランティアにおける「任意性」の意義
- 第五章 ボランティアの社会的意義
- 第六章 使命－全体に生きる個－
- 第七章 使命の純粹さと誤ったセクト的全体

キーワード：ボランティア 勤労 奉仕 無償 自発性 任意 献身 使命 自由 全体

第一章 勤労としてのボランティア

1. ボランティアとは何か

近年、ボランティア活動が活発になっている。ボランティアということばが使われるようになったのは、意外に最近のようだが、もうすっかり日常用語として定着するまでになっている。このボランティアは、ふつう「無料の奉仕」として解されている。しかし、「無料」の「奉仕」ということだけでもなさそうである。徹底的な無償の奉仕・献身である主婦の家事労働はボランティアとはいわない。あるいは、戦争などに際しての強制的な無料の奉仕活

動も、無理やりなものとしては、ボランティアとは見なさない。では、われわれの了解しているボランティアとは、なになのであろうか。

まず、「無料」(無報酬・無給)であることがひとつの特徴であるのは確かである。公民館から、「ボランティアで講師をお願いします」といわれるとき、依頼者においても、引き受けるものにおいても、このことばは、もっぱら謝金のないことを、「無報酬」であることを意味している。だが、その活動が自分の意志に反して強制されるものであった場合、いくら無報酬であっても、ボランティアとはいわない。ボランティアは、voluntas(自由意志)に基づくものとして、奉仕する者の自発的な自由意志が大切になるもののように思われる。

ボランティアは、無給で、当人の自由意志で自発的に参加したものであるということになる。しかし、その活動が抗議行動・デモへの参加とか、あそび・行楽のたぐいになった場合、これは一般的にはボランティアとはいわないのではないか。ボランティアは、「勤労」の奉仕でなくてはならないのであろう。

ということであれば、ボランティアとは、あたかも家族にするときのように家族外の社会に対して無償の愛をもって接するもので、「個人の自発性に基ついた、無報酬での、勤労をもってする、対社会的な援助活動」ぐらいに定義しておいてよいのであろうか。しかし、これは、ボランティアのひとつの理想型であって、これからかなりずれたものもしばしばボランティアと呼ばれている。個人の自発性は全然なくても、無給の強制的な残業のとき「ボランティアさせられた」という。報酬・謝金が少々は出ていても、余暇にする自発的な勤労は、ボランティアという。とくに海外でのボランティアは、まるまる生活がこれに注がれることになるのだから、生活できるだけの「手当て」がどこかから出されるのがふつうであろう。

ボランティアという言葉は、これの盛んなアメリカの「volunteer」の輸入語になるのだろうが、では、その本国では一義的にはっきりした活動になっているのかということ、そうでもない。「“ボランティア”ということばに付されるその意味のかけはなれた多様さ」¹⁾がやはり問題となっているようである。ボランティア(volunteer)は、義勇兵・志願兵の意味をもつが(いまでもその意味を含んでいるようで、筆者がボランティアの本のつもりで volunteer という書名のものを入手してみたら、義勇兵のことしか書いていないものがあつた)、現代のいわゆるボランティアは、それとはまったく異質であり、一方では「労働」だが、他方では「レジャー活動」のようでもあって「根本的に不確かな社会的位置を占めている」²⁾といわれている。また、別の者は、これを盲人のとらえる「象のようだ」³⁾とも形容している。その牙に触ったものは、なめらかで鋭いと言い、尻尾に触ったものは、ロープのようだと言うように、ボランティアは、各人各様に理解されていると。我が国のあいまいさと似たような事情にあるものと思われる。

ボランティアに近いことばとして、わが国には「奉仕」「勤労奉仕」ということばがある。

ボランティアは、「奉仕活動」であり、こう翻訳してもよさそうだが、そうしない。「奉仕活動」とは異なるものを、われわれは、片仮名の「ボランティア」にこめているということであらう。

たとえば、中学生たちが、無人駅の清掃の「奉仕活動」をしているというのと、その清掃の「ボランティア」をしているという場合の違いである。「奉仕活動」という場合、どちらかというところ、これは中学校とかその生徒会の決定として、駅利用の全生徒に分担して強制される感じがある。これに対して、「ボランティア」の場合、生徒の有志が個人として自発的に参加しているものと感じられる。「奉仕」は、自分たちを支配したり上位に存在するものに、「仕え」「奉（たてまつ）る」ということが、下位のものが上の者に貢ぐという感じが残る。しかも、その支配し上に位置するものは、一般的には、国家など自らの所属する全体であり「公」になり、滅私奉公になる。

だが、ボランティアの場合は、これまでは主として福祉関係の奉仕活動について使われ、その上下の関係は、逆になる。恵まれた者が恵まれない者に「奉仕」するのである。そのかわりは、仕え奉る上への関わりとは逆で、下へのかかわりになる。もちろん、人格的存在としては、現代のボランティアは平等の精神にたつ。寄付行為とちがって、ボランティアは、恵まれない者のところまで降りていって直接手を握ろうというのである。人間愛に発するものとして、対等のかかわりとなることが求められる。しかも、ひとつの全体が全員ではなく、自由意志で自発的に個人が参加するのであり、奉仕する対象も、福祉の場合は、全体・公けのためというよりは、恵まれない各個人に対してである。

奉仕活動といわず、ボランティアという場合、そういう個人主義的なかわりがふまえられているのであり、対等な人間関係と自発性がそこで強調されることになっているといえるであろう。

この個人主義的民主主義的な前提をもち、無償・自発性・勤労等の特徴からなるボランティアについて、まずは、その勤労という特徴からこれを見ていくことにしたい。

2. ボランティアは、勤労での奉仕である

無料だといっても、物品を無料で奉仕する場合は、ボランティアとはいわないであらう。ボランティアでは、参加者の心身をもった活動がささげられるのであり、しかも、その活動は、いわゆる「労働」になるのが基本であらう。同じような無報酬の自発的活動であっても、たとえば、環境問題に取り組む人たちが、炎天下を汗だくになりながらデモをしても、一般的には、「ボランティアに参加した」とはいわない。しかし、役所にお膳立てしてもらってピクニック気分であっても、林業労働に含まれる「植樹」に参加した場合は、「ボランティアをした」という。生産加工の労働であったり、人に対するサービス労働といった「勤

労」がボランティア活動になる。つまりは、賃金労働者の労働になるようなものが、その同じものを無料・無償でするのが、ボランティアの活動になるのであろう。

しかし、ボランティアの活動に、デモのようなものを含ませる者もある。ボランティアという言葉が（米産の）ブランデーとまちがわれたりして、まだ「注」を必要とした早い時期からボランティアの名で活動している、したがってこの言葉におそらく一番なれ親しんでいる「大阪ボランティア協会」編の『ボランティア・ハンドブック』は、「1989年6月、天安門広場に集まった学生は、まさにボランティアとして自由な社会を求める行動に出」⁴⁾たのだと、デモなどもボランティアにいている。「市民運動といえば抵抗的・運動的で、ボランティア活動はサービス中心のものという受けとめ方がありますが、両者は本質的に同じものです」⁵⁾という。「ボランティア活動は、単なる善意や奉仕の活動から脱却し、人権意識の人間連帯思想に根ざした幅広い市民運動化の傾向を見せつつあります」⁶⁾との認識である。

そうはいわれても、革命的な市民運動・デモなどと対立するかたちの、保守的改良主義的運動としてボランティアがみられていた頃の記憶がふっきれないからであろうか、市民運動とボランティアをひとつにすることには、筆者などにはなお抵抗がある。しかし、時代が共産主義革命の（市民）運動を無意味化した現在は、ボランティアと市民運動とをことさらに区別することはないというのが、つまりボランティアは、単なる奉仕的な活動にとどまらず、社会構造そのものにも目を向けて発言していき社会改革・市民運動にまで結びついていく積極的なものというのが、時代の趨勢になってきているのかもしれない。

ところで、恵まれない人に善意の志を贈与する場合、一方には、お金とか物を贈与する「寄付」行為があり、他方には、勤労・労働そのものの奉仕がある。後者がボランティアになるわけだが、前者と区別しにくいこともある。医療ボランティアでは、薬などの物も同時に贈与することになるであろうから、そのボランティア活動には、物の贈与も含まれるのが普通となる。岡本包治は、ボランティアを定義するとき「各人が持っている能力、労力、自由な時間あるいは財産（金銭や品物、その他建造物など）を社会に役立てる活動」⁷⁾という。「労力」のみではなく「金銭や品物」を役立てる行為もボランティアの内容に含めている。たしかに、両者を切り離すことは、不自然で、とくにボランティアの受け手にとっては、ボランティアの医者から薬をもらい、ボランティアの主婦からお弁当をもらうのであって、ボランティアの活動は、物の贈与・寄付と一つになっているのである。あるいは、労働を提供していても、お金がなくなれば、そのボランティア活動はストップする。地域の独居老人に弁当をと、ボランティア活動をはじめても、資金が底をつくとそれで中止となってしまう。ボランティア活動には、金品の提供も同時に含まれているのでなくては、持続したボランティアとしては成立しにくくなる。

だが、寄付行為と勤労の奉仕は、贈与するものの中身が一方は、(労働の結晶したものとはいえ) 価値物であるのに対して、他方は、生きた労働そのものであり、物と人という根本的な相違になる。金品の寄付なくしてボランティアが存続しえないのは確かだが(受け手には一つになっているとしても)、厳密には、やはり区別されるべきであろう。

寄付においては、「恵んでやるのだ」という尊大な気持ち・優越感をいだきながらにすることがあろう。恵まれないものところまで降りてきて、というのではなく、高いところから、お金をなげいれるということがあがる(だが、お金には、そういう傲慢な顔は描かれないので、受け取る方は、そのことをさしあたりは知らないですむ。お金のありがたいところである。その点、古着などの品物の場合は、ときにその提供者のここが見えるようなことになり、受け取るものの心を傷つけることも生じる)。しかし、寄付行為とちがって、ボランティアの勤労奉仕では、奉仕しようというものは、お高くとまっているわけにはいかない。恵まれない者がいるところまで自分自身を降ろしていく必要がある。階級的差別意識の強かった古い時代のボランティアはいざ知らず、今日のボランティアは、対等な人間関係にもとづき、ボランティアの受け手と人間同士のふれあいをもつ。そういうことをはじめとして、勤労としてのボランティアでは、多様な人間関係のなかに組み込まれて、悲喜こもごもとなる。寄付では、「あのお金はどこへいったのだろう」ということになる場合があるが、ボランティアは、当人が直接出向くのためから確実で手応えあるものとなりうる。

勤労・労働は、ふるくなるほど、下賤なものとして見なされていた。今日ボランティアの盛んに行なわれている欧米では、われわれに比べ、労働への蔑視が強かつづいてきた。キリスト教が宗教改革のもとで労働(職業(Beruf)=使命(vocatio)=聖職(vocatio))を神より与えられたもので神聖と解釈していったけれども、最近まで、イギリスでは労働者と有産者たちは席を同じうせずと、酒場にも仕切りがあった。ボランティアは、寄付と異なって、この労働蔑視を打ち砕くのでなくてはならない。有産者が酒場の仕切りをそのままに、恵まれないものにお金をなげわたすことでも可能になる寄付とちがって、勤労としてのボランティアでは、仕切りを自分自身が越えて、恵まれないものところへいき、いわば有閑・有産の者が労働者となって、労働を贈与するのである。勤労としてのボランティアを決意するものは、自分のかかわる労働を贈与にあたいする尊いものとみなしていなくてはならないであろう。

だが、資本制下の労働者自身は、しばしば自分たちの労働を聖職どころか苦役ととらえ、自己疎外されたものとみなしている。労働は、お金を得るための単なる手段であって、できるものなら、疎外された労働などにつかないで暮らせることを望む。下賤なものとは思わないにしても、できれば避けたいと思っていることがある。これに対して、ボランティアは、自らが苦しい労働を無償でわが身に背負うのであって、そのかぎりでは、ボランティアするものの気が知れないという声もでてくる。

3. 具体的労働としてのボランティア

ボランティアは、勤労の奉仕だが、同じ労働・勤労とはいっても、どうも、そこにおいて注目されるもの、目的となるものは、通常の賃金労働とは異なっているようである。賃金労働についてマルクスは、周知のように、これを「抽象的人間的労働 abstrakt menschliche Arbeit」と、「具体的有用労働 konkrete nuetzliche Arbeit」の二面からとらえ、後者は、なにを生産するかというような具体的な有用性（「使用価値」の創造）から見られた労働（work）であるのに対して、前者は、それを捨象したすべての人間労働に共通の単なる心身の生産的な（経済的な「価値」創造の）働き（labour）であって、基本的に時間で計られるもので、賃金労働者は、この抽象的人間的労働を売っているのだと捉えた⁸⁾。この二つの労働のあり方からいうと、ボランティアのばあいは、賃金労働者とちがって、抽象的人間的労働ではなく、各具体的有用労働にもっぱら注目して、この有用労働をささげているのである。

同じ家事労働であっても、家政婦は、その有用労働の内容には無頓着で、labour=抽象的労働を時間で計って売っているのに対して、主婦は、具体的な個々の work=有用労働にもっぱら注目して、これを家族にささげているのである。ボランティアは、この主婦の勤労の姿勢と等しいものがあるのだといえよう。ただし、その具体的労働の贈与が家族であるばあいは、ちょうど賃金労働者が家庭に賃金のほとんどを渡してもそれを「寄付」とか「献金」などとはいわないように、ボランティアとはいわない。その贈与の相手は、あかの他人であるのが、ボランティアのボランティアたるところである。

賃金労働者は、その雇用労働のもとでは、しばしば疎外感をいだく。抽象的労働に対して賃金が支払われるにしても、当然、有用な商品を生み出すのであって具体的有用労働の側面をもっているが、その有用労働は、労働するものが自律的に支配し自由にしているのではなく、雇用主の支配するものになっており、いやな品物の生産やサービスにも従事しなくてはならない。そうすると、せっかく有用な労働をしても、これに主体的に参加することは難しく、疎外感をいだくことになる。それをがまんさせるのは、抽象的労働の賃金である。

ボランティアは、この点でいうと、その労働をだれかに売って、その雇用主の支配下にはいるのではなく、自己自身が直接、その有用な具体的労働を支配しつつ、自由に労働する。賃金などを超越して、自己の創造的能力をみだし、充実した生をそこに展開し、社会的に貢献して満足することができる。

ボランティアは、具体的有用労働を贈与しようというのだが、贈与には、その受け手があり、それを望んでいるのでなくてはならないから、どんな労働でもいいというわけにはいかない。援助を求めるのは、社会的に恵まれていないひとびとということであり、これまでのボランティアは、なんとといってもそういう人々へと向かい、福祉関係の仕事になるのがふつ

うであった。ボランティアの具体的労働とは、福祉活動という具体性・有用性になっていた。

福祉活動、つまり、健やかで安定した社会的生活ができるようにと（そうできていないひとびとを）援助するのが、いまでもおそらくボランティア活動の中心になる。無償での援助活動としてのボランティアは、有償でサービスを買うことのできない貧困で恵まれないひとびとのために注がれてきた。ということで、ボランティアには「自発性・福祉性・無償性、この三つの性格がある」⁹⁾というようなことになり、ボランティアの労働は、単なる勤労・労働ではなく、もっと限定して「福祉」のための勤労奉仕と解されることになっていた。たしかに、かつては、ボランティアといえば福祉の活動であり、いまでも、わが国では、恒常的に営まれているものとしては、多くはそうだといいよい。

しかし、最近では、各種の催し物にはボランティアが付きもので、また、教育の場面でもボランティアが盛んであり、商店街の手伝い・通訳・観光案内のボランティア等もいわれて、福祉には限定されないものとなっている。ひいては福祉に限定すると問題も出て来るようになってきているようで、たとえば、生涯学習のボランティアという方面から岡本包治は、「ボランティアを福祉に限定する見方が、いま生涯学習の発展を邪魔しているといってもよい」¹⁰⁾と発言している。彼は、「福祉性」よりもひろくして「社会の発展に役立つ」こととしての「公益性」¹¹⁾をあげている。ボランティアは、わが国でも、もう福祉活動の枠をこえて大きく広がっているのである。福祉にかぎらず、何であれ援助を求めているものに対して自発的に勤労を贈与・奉仕するものは、一般的に、ボランティアになるといいよいのではないかと筆者も思う。

4. 補完し先駆するボランティア

資本制下の企業は、市民に必要であっても、もうけにならないものにはかかわらない。国とか自治体がそれについては責任をもつことになるが、それでも、なかなかサービスは、予算の問題もあって、行き届きにくい。その「すきま」というか、きめ細かなところは、さしあたりは、縁者が援助したり、ボランティアあたりがうめていく以外ない。あるいは、大きな災害などで緊急で大量の労働が必要となるようなとき、購買能力も低くなり、かつ必要な労働力もその組織も身近には存在しないようなことになっているとき、緊急のまにあわせには、こまわりのきく、意欲をもった個人からなるボランティアがかけつけて有効に働くことができる。

だが、このような補完・穴埋め・急場しのぎのボランティアは、場合によっては、抜本的な対策を遅らせたり、当事者の怠慢をささえてしまうものとなる可能性もある。地域の老人の介護のボランティアに献身している高林澄子は、介護ボランティアに対して「ボランティア活動が安上がり福祉の片棒をかついでいる」¹²⁾と冷ややかに見られることがあるといい、

「看護ボランティアの活動が、政治の矛盾を曖昧にしたり、行政の不備を補うばかりに活用されるものであってはならない」¹³⁾と釘をさしている。独居老人の世話はだれかがしていかななくてはならないが、ボランティアが安易にこれを引き受けてしまうことで、当の自治体がそ知らぬ顔をしてすませることがある。デモもボランティアに含めている「大阪ボランティア協会」のように、「奉仕の活動から脱却し・・・市民運動化」¹⁴⁾していくことをもって抜本的対策にも同時に気を配らなくては、ボランティアの善意は、資本や国家にたんに利用されるだけのものになる可能性がある。ボランティアの盛んなアメリカでも、これはボランティアへの重要な批判的意見になるようで、ハータ・ローザは、「ボランティアが有能であればあるほど・・・社会構造上の基本的な欠陥を温存することになる、という批判」¹⁵⁾があるといい、ボランティア活動は、そうならないようにと「社会変革も志向しなければならない」¹⁶⁾と主張している。

ボランティアは、資本制の矛盾やしわよせの尻ぬぐい、公的機関の不備の穴埋めとしてあるだけではない。むしろ逆に、「はじめにボランティアありき In the beginning there were volunteers」¹⁷⁾だといわれることもある。先立つのが、先駆性が、ボランティアの特徴になるというのである。資本が企業化しえていないもので、しかも、公的機関にもこれができないようなものにとボランティアは取り組む。行政機関がそこまでやる必要がないと考えているものには、公的な資金は出ず、当然そのような公的な活動は存在しえない。そういう、先駆的なものになる可能性をもつ活動は、さしあたりは、有志のボランティアによる以外なくなる。老人の介護は、もうけにならないから、選挙の票にならないし予算がないからと、資本も国も取り組まなかった。家族まかせであった。社会的には、まずボランティアがはじめてこれに取り組んでいったのである。

アメリカの西部劇によくでてくる一こまに、逃げた殺人犯を捕まえるために町民の有志をつのり、この勇敢なボランティアたちが追跡していくというのがある。無法者がときたま出てきて、これを捕まえるのも、年に一二回というのであれば、有志がボランティアで集まればよい。だが、町が大きくなって無法者に恒常的に目をひからさねばならないようになると、常勤で有給の警察官を必要とするようになっていく。まずは、ボランティアが先駆するというわけである。

あるいは、ボランティアは、資本制のもとで成立しているものだが、無報酬の勤労としてこれを超越している面をもつ。あらゆるものをお金に還元していこうというのが資本主義であろうが、そう割り切れないものがある。いくら購買能力があっても、お金で手に入れることのできないものがある。たとえば、ボランティアするものの基本姿勢でもあろう「人の真心」は、売買できるようなものではなく、これを超越したものであろう。やさしい人間の心に飢えた老資産家が、面従腹背の身近な者たちにうんざりして、その介護を、下手で頼りな

いけれども人間愛なくしては成立しえないボランティアに求めるということがありうる。

5. 博愛的なボランティア労働

ボランティアは、いうなら只働きである。賃金労働の場合、その賃金が低くなるほど、労働者は、やる気をなくし、その労働にぞんざいになり、手抜きをしていくことになるろう。だが、ボランティアは、只働きであるにもかかわらず、ぞんざいにもならないし手抜きなどもしない。それは、ひとつには「被雇用者は、お金のために働くが、ボランティアは、愛のために働く」¹⁸⁾からである。

ボランティアは、利他主義・博愛主義である。惻隱の情にあふれているのである。冷淡なひとは、「貧困は、自由社会では、自分たちの責任だ、この世界は弱肉強食なのであって、無償の援助など、依存心を強くし自立をさまたげるだけだ」等とつきはなす。だが、ボランティアしようというような者は、ひとは弱肉強食の動物ではないと考える。自分たちは、たまたま恵まれた状態におかれているが、別の同じ自分たちは運悪く恵まれず非人間的な扱いしか受けられないのであり、この悲運の状況を放置しておくことに耐えられないのである。人間愛にもえるのである。ボランティアは、その恵まれない者のところまで降りていって働くのであり、平等の精神にたつての博愛主義者になる。

サービス労働をしていると、当然、不服をいわれることもあろう。それを耐えさせるのは、賃金労働では、「お金」である。ボランティアは、その愛がこれを耐えさせる。厳しい労働に、やめたくなることもしばしばであろう。それを持続させるのは、賃金労働では、お金である。ボランティアは、ふとそう思いながら、その慈愛のところが、これを持続させていくのである。

ボランティアが「無報酬」であるとは、通常ならば報酬を出すべきだということが前提になっているわけで、本来的にはその勤労・サービスを、お金をだして購入するような、あかの他人との間柄になることがふまえられている。ボランティアがその労働を贈与する相手は、家族とか、親戚のような「うち」の者ではなく（そういうばあいはボランティアとはいえない）、そとのあかの他人やその集合体になる。このあかの他人に、あたかも自分の家族にするように、無償で献身的に愛を注ごうというのがボランティア精神であろう。しかも、この外の人々については、民族とか国家にしばられないのであって、助けをもとめているものならばだれでも、それこそ地の果てにまでかけつけていこうという姿勢をもっている。博愛主義者でありコスモポリタンである。「うち」では自然生的な愛が支配的であるが、外には、この愛はふつう注がれない。この愛をそとに注ぐ利他・愛他に、ボランティアは成立する。

とはいえ、日常的なボランティアは、仕事のあいま・余暇にするものとしては、身近な、自分をとりかこむ共同体・コミュニティーなどに奉仕するものが多くなる。また、アメリカ

のような、ボランティアが多彩で日常生活の一部をなしているところでは、職業訓練のつもりであったりレジャー活動と感じたりして、人間愛だ博愛だというあらたまった意識なくして、それは存在する。理念としてのボランティアは、地の果ての未知の人にまで愛をそそごうというものだろうが、現実のそれは、もっと身近なところに見いだされるのがふつうである。ただし、身近すぎるのではいけない。その限界ははっきりしている。自分の家庭・血縁という「うち」には、つまり、ボランティアの特徴の中心をなす「無給の自発的な勤労」や「贈与」「愛」が本来の関係を構成しているところには、ボランティアは存在しないということである。

6. 余暇の自由で充実した労働

ボランティアは愛が作り出す。だが、それを現実のものとするには、暇がなくてはならない。休みなく賃金労働をして生活を支える必要のあるところでは、他人に労働をさく余裕はなく、ボランティアどころではない。ということは、ボランティア活動には、余裕・暇があり、生活がべつのところに確保されているということが前提になる。余裕がなくては、ふつうには贈与は、できない。寄付は、お金の余裕があればできる。だが、ボランティアは、いくら金持ちであっても、時間の余裕がなくてはできない。ボランティアできるのは、時間的余裕のある者ということで、ボランティアというと主婦であり、最近では定年退職者のボランティアがしばしば話題になる。もちろん、現代の労働者・勤労者には、かつてとちがい、ボランティアの時間的な余裕はある。ときには、ボランティアへの参加を有給のままに認め、これをすすめる組織もでてきており、ボランティアのために余暇・休暇の活用がなされはじめている。

余暇は、自分の自由につかえる気楽な時間であるが、これは、まずふつうには、消費活動につかわれる。遊びであり、娯楽の時間となる。趣味もそこにある。趣味は、自分の楽しみであり、多くは消費的であるが、そのなかには生産的創造的なものもはいる、ときには、ボランティアを自分の趣味とするひともいる。余暇の自由な時間と、うちでは自然生的な無償の愛とが、外の他者にとふりむけられて、ボランティアという利他的な生産的活動を生み出していくのである。

ふつうの労働者においては、その生産物とかサービスのもつ社会的な意義などはあまり問題にされないのに対して、ボランティアでは、これが常に確認される。その個々の勤労が意義深いことを確認して、これを自分のボランティアとして引き受けるのである。ひとの引き受けたがらないような汚い仕事は、賃金労働者の場合、高額の賃金という魅力においてひきうけるのであるが、ボランティアの場合、それをなすことが社会的に十分な意義をもっていることを確認し納得して、引き受ける。ぜいたくな労働ともいえる。やる意味・意義がある

と思うもののみを引き受ける、自己実現としての自由そのものの労働である。

募集されるボランティアの場合、したい仕事と求められている仕事にすしのずれがあるのは仕方がないが、それでも、自分の気に入らないもの、やる必要がないと自分が判断したものは、やってほしいと要求があったとしても、やらない、参加しない。それを強制することなどボランティアである以上、できない。ボランティアは、だれにも縛られず強制されることなく、有益・有用だと自覚できる自分の気に入った労働に自主的に参加するのである。

自主的に参加するものとしては、ときには、自分だけの判断で自分だけでやるから（新しいボランティアの開拓は、ひとりとか少数ではじまるのは確かだが）、その自称のボランティアは、社会的にはかならずしも有益と評価されないこともありうる。老人が自分の判断で地域の道路とか公園を掃除しているのは、社会的に有益であるが、素人判断で公園の木々を剪定するなどになると、めいわく・有害となるばあいもある。

賃金労働であっても、具体的有用労働の面において、その労働が生きがいとなっていることもしばしばである。だが、生きがいなどはなくても、苦痛であっても、疎外感にさいなまれているとしても賃金に見合うことはしなくてはならない。その点、ボランティアの勤労は、本人の納得のいくもので充実感のいだけるものが基本である。しかも、それを贈与するということで、贈与の喜び（贈られる者の喜びを喜ぶのである）が大きな魅力となっている。満足・充実ということでは、ボランティアにおいては、労働内容そのものよりも、それへの参加によって社会的な生きがいの見いだされることがしばしば重要になる。定年退職者は、社会的存在としての自分を喪失しがちとなる。社会的な組織の一員として労働することにおいて、自分の存在の意味を見いだしていたのが、それがなくなってしまうのである。ボランティアに参加して、自分を生かせるなら、それは、無報酬であっても、自分が必要とされているということで充実した生を維持できることになる。

主婦の場合、うちにとじこもっていると、社会的には孤立し孤独となる。社会的、社会的存在である人間は、金銭的にはめぐまれて消費生活は充足していたとしても、空虚さを感じることになる。ボランティアは、これを充足させてくれるものになる。自分の存在の社会的意味を見いだすことが可能となるのである。ただし、社交性・社会性の欲求は、被雇用においても満たされる。最近、アメリカでは、主婦は、有償でフルタイムの勤めに出だして、ボランティアにたのみにくくなっていて、老人をあてにするようになっていくという¹⁹⁾。ボランティアよりは、企業などで働く方が、責任をもち組織を動かし等と生きがいも大きくなる可能性がある。社会性の欲求はかならずしもボランティアで満たされる必要はないのではある。

7. ボランティア労働のマイナス面

賃金労働の場合は、賃金に見合う仕事をしなくてはならないが、その点ボランティアは、無給なのだから気楽ということになる。専門職のひとが、あるいはその退職者などがその専門でボランティア活動するばあいは、しっかりしたものになるが、それでも、有償ということでの責任はないとなれば、ぞんざいになる可能性がなくはない。ましてや、その仕事については素人であるひとがボランティアとしてそれにかかわるばあい、善意と情熱では通常の賃金労働者にまさるとしても、仕事のレベルは、かなり低いものにとどまることになる。あるいは、自由意志で参加しているのであれば、自由にやめていくことも阻止しにくく、無責任で、頼りにならないものとなる危険性もひそんでいる。

雇用労働者の場合、有機的に組織されて、職階制をとったりして、高度な組織的な活動を行うことができる。だが、ボランティアでは、それは簡単ではない。任意に集まり、自由に抜けていき、自発的自主的に参加しているだけであれば、恒常的な有機的組織は形成しにくい。中心になるものが命令するとしても、自分の意志にしたがって参加・不参加を決定するのであれば、その拘束力は弱くなり、組織としての力は発揮しにくいものとなる。つまり、人数のわりには効率がよくないということになる。

このことは、逆にプラスの面となることもある。雇用されたものの組織の場合、その命令・管理の系統が崩れたら動きがとれなくなるし、現場では、組織の決定を待つて等ということでは速効性・速戦性に欠けがちとなる。だが、ボランティアのばあい、命令されてということではあまりなく、個々人が自分の活動について自主的自律的に判断する部分が大きく、動きやすく臨機応変・速戦性に富むといえそうである。

ボランティアは、勤労の奉仕である。寄付行為とともに善意の援助活動を形成している。前者では、自分の存在そのもの・活動自体をささげているものとして、その姿勢の点では、単なる寄付行為よりは、徹底したものとみなすことができる。だが、寄付の方がいつも不徹底だとか意義が小さいとはいえないところがある。

贈与するものの方からいうと、勤労の奉仕としてのボランティアをするには、当然、時間的な余裕がなくてはならない。いくら愛にあふれていても、時間がなくてはボランティアはできない。その人が社会的に多忙で重要な地位にあるばあい、ボランティアは、あまりできない。しかし、そういうひとは、ボランティアに時間をつかうよりは、その時間を仕事についてやして、そのお金を寄付する方が贈与する経済的価値の点では、よほど大きなものになるはずである。現場でボランティアが十分に活動できるには、寄付などの後方の支援がしっかりしていなくてはならない。地道な後方支援に徹する方が困難なことがある。

贈与される側・受け手からいうと、これまた、かならずしもボランティアの方がよいとはいえない。お金でかたがつけられるものの場合、その方がよいときもある。ボランティアしてもらった場合、無料なのだから不平は、あまりいえない。気に入らないひとがボランティア

にくることを、無償で援助される者としてはむげには拒否できない。だが、お金で購入するのなら、気に入らない人はさっさと拒否できる。上手で確実な有償のサービスがあるのであれば、お金をもつ者は、その方を選択するであろう。とくに発展途上国のばあい、労働力は安価なので、医療活動などの特殊技能のボランティアでないのなら、先進国からの援助は寄付の方がありがたいということになる。そういう地域では失業も深刻なことがふつうで、ボランティアでは、失業者をふやしてもへらすことにはならないから、寄付の方が効果的な援助になる可能性がある。

註

- 1) Jone L. Pearce; *Volunteers-The Organizational Behavior Of Unpaid Workers*. 1993. p. 15
- 2) *ibid.* p. 9
- 3) *The Volunteer Management Handbook*. ed. by Tracy Daniel Connors. 1995. p. 5
- 4) M. マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』(原題 *For Love not Money: A Handbook for Volunteers*. by M. McGregor. etc. 1982.) 大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳 誠信書房 1996年 188頁以下
- 5) 同上書 193頁
- 6) 同上書 193頁以下
- 7) 岡本包治編著『これからの指導者・ボランティア』 ぎょうせい 平成5年 10頁
- 8) *Karl Marx・Friedrich Engels Werke*. Diez Verlag. Bd. 23. S. 56ff.
- 9) M. マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳 誠信書房 1996年 189頁
- 10) 岡本包治編著『これからの指導者・ボランティア』 ぎょうせい 平成5年 17頁
- 11) 同上書 10頁
- 12) 高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』 勁草書房 1990年 136頁
- 13) 同上
- 14) M. マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳 誠信書房 1996年 193頁以下
- 15) ハータ・ローザ『女性の職業とボランティア活動』(原題 *Women, Work & Volunteering* by Herta Loeser. 1974) 柴田善守監訳 相川書房 1978年 39頁
- 16) 同上書 40頁
- 17) Ivan H. Scheier; *Building Staff/Volunteer Relations*. 1993. p. 3
- 18) Jone L. Pearce; *Volunteers-The Organizational Behavior Of Unpaid Workers*. 1993. p. 59
- 19) cf. *The Older Volunteer An Annotated Bibliography*. compiled by C.N. Bull and N.D. Levine. p. x iii

(初出論文名 「勤労としてのボランティア」
成9年 12月)

『広島大学文学部紀要』第57巻 平

第二章 無償としてのボランティア

1. なぜ、無給なのか

ボランティアは、「無給」「無償」であることを根本特色の一つとする。ボランティアは労働をもってなり、資本制のもとでは、労働は賃金という報酬があつてのものであるから、無給、無賃金のボランティアは、資本制の常識を否定したものとして目立つ。

かつては、ボランティアは、有閑・有産階級の善意にあふれた人々が行なうものであった。そこでは、お金があり恵まれている人・団体（宗教教団など）が、恵まれない病人や貧困にあえぐ人々を救済するというような、単純化していえば、有産者と極貧の無産者の関係になっていた。ボランティアするものは、自分を労働力商品として売って賃金をえるということの不要な、そういうことに無縁なひとびとであった。ボランティアの無給・無償は、その受け手がお金をだせないということはもちろんだが、ボランティア自身の方で報酬は不要だ、自分たちは賃金労働者ではないということだったのである。

しかし、現代のボランティアは、賃金労働によって生活をささえている一般市民が、その余暇に参加するというのがふつうである。謝礼としてお金がでるのなら、ありがたく受け取ることであろう。だが、ボランティアされる方は、たいがい、お金の余裕がなくてサービス労働を買うことができないような状態にある。つまり、賃金などをだすことができないのである。ボランティアする方は、断っているというよりは、出せない相手ということで、これを放棄しているのであり、「賃金はでない」ということをふまえて、奉仕の活動に参加しているのである。

また、今日のようにボランティアが盛んになってみんなが多方面にわたってやりだすと、出す余裕がないというよりも、出してくれる相手がいなかったりかはっきりしないというようなことも結構でてくる。山道とか海辺の掃除などでは、お金を出してくれるところがないとか、管理者からいうと余計なことで支払い義務はないといったことになる。地域の全体のためにする活動は、その全体（管理者）の方で、やる必要性を認めていて予算的余裕があれば、有償とすることができよう。しかし、それ以上のものは、その全体の責任外のことであり、ボランティアが勝手にやっているのだから、それへの支出は、余裕があっても、しないことになろう。

この自分のすきでやる、たとえば、だれから頼まれもしないのにする山道の掃除のようなボランティアは、ボランティアといえるのかも問題であろう。ボランティアは、本来的に、特定の具体的な労働の求められていることが大前提で、そういう求めの欠けたものは、余計なお世話であり、ためになると勝手に思い込んでいるのみの、いわば贈与の押し売りで

あって、受け手は、謝礼をだすどころかボランティアとすら見なさない可能性がある。しかし、やっている方は、ボランティアのつもりではある。それは、「よけいなボランティア」というべきか、もはや「ボランティアではない」というべきかになるが、主観的には、ボランティアするものは、ボランティアのつもりであるから（近視眼的な人々にはよけいなことでも、未来の者に多大な貢献をしている可能性もあることだし）、場合によっては、尊大な姿勢のボランティアなどとともに、「問題のあるボランティア」の項目にでもいられるとよいのかもしれない。

労働・勤労の提供をしても、ボランティアのかかわるようなところでは、賃金など期待できないということがあるわけだが、単にそういう消極的なことにとどまるだけではない。ボランティアする者は、日頃は労働者として労働力を売って生活しているが、ボランティアにおいては、そういう賃金労働者であることを超越した存在となって、ひたすらに世の中に自らの役立つことを願い、無償の贈与者に自己を高めようとしているのもあろう。この点では、有閑階級のボランティアと同様、報酬・賃金は、ことわっているのである。

さらに、宗教団体のボランティア活動などでは、「人間みな兄弟」という慈悲、慈愛の精神が、これを無給とさせていることもありそうである。つまり、主婦がうちのものには「無給」で献身するように、宗教者は、そとの他人に対して、あたかも自分のうちのもの、「親子」「兄弟」にするかのように奉仕するということである。その勤労を無給・無報酬とすることで、あたかも兄弟関係であるかのような近さになり、おそらく、そのきわみには、無差別一体の境地にと高揚することが可能になるのであろう。

この宗教団体のボランティアの「うち」意識、一体化の意識は、他の一般のボランティアでもありそうである。自分の商店街のイベントのボランティアなど、ひとのためにというのみではなく、自分のためのものでもあり、自分も主催者かその同類のものとなるのである。自分たちの神社のお祭りには、当然ながら、手当てとか日当なくして自主参加するが、今の商店街のイベントは、そういうお祭り意識の延長上にあるのではないか。手当てなどもらうとなると、それこそ「よそ者」という感じになり、無償・無給ゆえに、自分もその共同体の一員であり、「うち」のもの、同じ仲間であると自覚できるのであろう。

スポーツ大会などにボランティアで若者が参加するのも、そういう意識ではないか。自分たち自身が主催者であり、お祭りに参加し支え、これに一体的になっているのだと。さらに、そういうお祭り・イベントの場合、その勤労の奉仕は、労働でありつつも、あそび感覚ともなっていることがある。音楽のバンドがボランティアで祭りに参加する場合など、奉仕意識よりは、自分の音楽を聞いてもらえるチャンスであり、楽しみであって、あそびなのである。

「無給でも出たい、参加したい」というのが祭り・イベントのボランティアになり、その活動は、あそびと無区別になっているのである。

2. 生活の支えは別のところに確保

ボランティアは、余暇の自由な時間を使ってなされるものである。それが可能になる前提には、生活の支えは別のところにあるということがある。無給のボランティアの背後には、同一人における有給の、生活をそれで可能とする本業があり、あるいは確かな保護者・扶養者があつたり、資本とか土地が存在しているのである。それがあからボランティアは、無給でかまわないことになっているのである。

自分の生活そのものは、安全なところに維持しつづけているという点では、ボランティアの精神は、甘い生半可なものにとれなくもない。自分のすべてを賭けて尽くすというようなものではかならずしもない。だが、そうであるからこそ、誰でもが参加できるのである。生活をすててまで献身するとなると、普通の者にはできないであろうが、ボランティアは、そうできなくても、生活をそのままに維持しながらでも、恵まれない人に奉仕し献身できるというのである。

また、ボランティアされる方も、そうであるからこそ、気軽にこれを受けることができるのである。ぜいたくとも思われるようなことを、極貧の奉仕者に求めることは気が引けるであろう。自分の生活などどうなろうと平気だと、極貧の失業者がボランティアするとしても、おそらく民主主義下の現代人の感覚では、これを受ける方が困ることになる。めぐまれた自分が、恵まれないボランティアに恵みをいただくなどということは、普通の神経の持ち主には、できないであろう。だが、裕福なボランティアになれば、それを求めることも可能となる。ぎりぎりの厳格な生活をしている聖僧には、いくら愛他精神にあふれていても、町にぜいたく品の買物にいきたいからと付き添いのボランティアをたのむことはできないが、お金持ちのボランティアになら、それをたのむことができる。

生活の保障がべつのところしっかりとあるから、その余暇の余裕には他者のために無料で奉仕しようというのだとしたら、その生活があやうくなると、ボランティアは、終わりである。生活のために、ボランティアしていた時間もまわさなくてはならない。お金をもとめて、有給の仕事にその時間も費やすことになる。あるいは、失業し有給の仕事がなくなって、生活が困難になる場合、時間的な暇はいくらでもあるとしても、ボランティアの仕事であっても、できるものなら有給化したくなるであろう。

ボランティアではないが、他人のために自分の生活もささげて、極貧をものともせず、社会の改革のためにと精力を注いでいくものに社会運動家・革命家がいた。かれらが自分の生活を無視しても極貧でも、人々は、これを「是」としてその献身を受け入れてきた。それは、その活動・運動が、ふつうは個人の救済を直接でがけるものではなく、社会全体の救済に向けられていたこととともに、それが崇高で英雄的なものとして周囲から評価され、経済的貧困を

背後に退けてしまうようなところがあったからであろう。当人も、前衛・先駆者としての誇りを持ち、それが当の社会なり天から自分に与えられた尊い「使命」なのだと考えていた。貧困を救う者は、その貧困のなかに自らも立脚して、その先頭にたってという英雄意識があった。しいたげられた貧困な人々にとって、リーダーが貧困であることは、自分たちの味方であることのわかりやすい印しですらありえた。

だが、ボランティアは、かならずしも英雄的ではない。ごく日常のこまごまとしたことの手助けをしようというのが普通のボランティアのすることである。革命家は、その活動を労働に向けるものでも、個々の恵まれない人々にこれを贈与しようというのでもない。富の分配の公正さを求め、有産階級全体からその不当に蓄積された富をうばい、これをしいたげられた人々にまわそうというのであり、自身もその分与にあずかるはずの一員であった。これに対してボランティアは、自分の労働力を恵まれないものに直接贈与しようというのである。相手の田畑に出かけてこれを耕し収穫の手助けをしようというのである。そんなボランティアに極貧の者が従事していたら、まずは「自分の土地をたがやすことからはじめなさい」「まずは、自分自身を救いなさい」といわれることであろう。

ボランティアのなかには、革命家と同様、自分の生活そのものをかけて、極貧のものたちのなかに飛び込んで、かれらの手足となり、ともどもに苦しんでいこうという、スラム街の「マリア」といわれるような尊いボランティアとなるものもいる。19世紀イギリスにはじまったセツルメント運動は、貧民街に住み込んで貧民の自立に尽力しようという定住(settlement)のボランティア的運動であった。仏教の「菩薩行」は、ひとが幸せにならないかぎり自分も幸せにはならない、人のためになるなら、命すらもかけていこうという徹底的な愛他の精神にたつが、そういう菩薩行に似たボランティアである。障害者用の施設をつくり生活そのものをそこに掛けていく、それを自らの尊い「使命」とするボランティアもある。だが、そういうボランティアは、現代のボランティアとしては、特殊である。人生そのものをこれにかけ情熱をそそぐ「使命」とはちがって、現代われわれが見聞きするふつうのボランティアは、俗人が「余暇を有効に」ということが基本であろう。だれにでもでき、他人とともに自分も大切にし、自分の恵まれた状態を、恵まれない人々と分かち合いたいと願うものが今日いわれる一般的なボランティアではないか。

3. wage(賃金)はないが、reward(報い)はある

資本制下の労働は、なにより賃金が目的であり、これに引かれ駆り立てられることになるが、ボランティアは、無償・無報酬であるから、そのことからいうと、これに駆り立てるものを欠くことになる。しかし、やはりなんらかの形で、「ボランティアしなくては」「ボランティアしたい」とかりたてていくものがなくては、参加を決意するまでにはなりにくいであ

ろう。ひとの行為は、それに対する報奨(reward)と罰(punishment)によって促進されたり抑圧されることになるが、それは、ボランティアでも同様である。

建て前論としてのボランティアの動機の筆頭には、「利他主義」があげられる。だが、それだけでは、個人主義の圧倒的な世の中のこと、これだけ多くの人々が持続してボランティアすることになっている説明根拠としては不十分であろう。利他・博愛の精神のみでは動機として弱い、なにかボランティアするもの自身にプラスになるものがあるはずだと、その満たされ魅せられる何かが探索されることになる。

ボランティアは、家族にするように外の人に接する。家族への愛は、むくわれなことが多い。それでも、多くの親は、こどもに献身しつづける。その姿勢がボランティアではそとの人に向けられているのである。勤労への賃金での報いが無いのみならず、ときには勤労の贈与者への感謝のことばもかえってこないことがある。追いつめられ生存すらあやうい厳しい状態のなかでの難民などからは、ボランティアには、不平不満がぶつけられはしても、感謝などはされないというようなことが当然でてくる。ボランティアは、無償の贈与なのだから、感謝されるべきものではあるが、贈与される方は、かならずしも、そういう反応はしめさないし、場合によると余計なことをと非難されさえする。

だが、この利他の活動に、利他主義の信念をもつひとのみではなく、そういう信念など無縁のものでも、けっこう引き付けられ魅せられるものがあるようである。なんらかの形の満たされるものが、広い意味での報い・報奨があつて、これがひとをボランティアに引き付けることになっているように思われる。金子郁容は、ボランティアは、「ある種の「報酬」を求めて」いるとさえいう¹⁾。つまり、無償だから、お金は求めていないが、「お金に換算できない」「多様な価値」²⁾をもとめ、それが満たされているのだという。それについてボランティアの報酬は「閉じていて開いているもの」と規定する³⁾。ボランティアして与えられる価値について、「何に価値を見いだすかは、その人が自分で決めるもの」として「閉じて」いるのであり、かつ、それはボランティアの受け手なり、他の関係者から「与えられる」ものとして「開いている」のだと⁴⁾。ボランティアが、そのボランティア活動において、ひとのやさしさに感動したとすると、それが自分の見いだした価値であり、与えられた価値になるということである。

資本制のもとでは多くが経済的価値に還元されていくが、多様な経済外的価値の世界もあるのであつて、ボランティアにおいて、われわれは、そのことを実感することができる。ボランティアにおいては、経済的価値の点をのぞくと、実は「与えるよりも、多くを得た」という感想を聞くことがしばしばとなるのである。

まずは、贈与することにとまなう一般的な快感情（一体感とか、喜び、恵まれた自己への感謝等）がある。さらに、労働であるから、その創造的活動への満足感とか、サービスでは

とくに、ひとの社会性・社交性の充足があり、ひとのやさしさとか意外性の発見への感動・驚嘆がある。なによりの報奨は、生きがいが見いだされることであろう。寄付などでは、その役立ちはかならずしもはっきりしないが、ボランティアは、自身が労働し現場に居合わせていて、自分が社会的に役立っているのだとしっかりと実感できる。あるいは、この冷酷な資本制のただなかにおいてボランティアにおいて出会う人々のあたたかい善意に感動を覚えることも少なくない。

また、宗教人がボランティアをするばあいには、その活動が無私で慈悲心にあふれた、いわゆる「菩薩行」となっていて、ボランティアにおいて自己変革が促進されることがあげられねばならないであろう。この菩薩行は、宗教人のみのことではなく、ボランティアに参加するみんなの感受できることがらであって、「餓鬼」「畜生」のたぐいの日頃の自分たちがそのことで一時にせよ「菩薩」のくらいに高められるのだとしたら、これは、人生の大事件であって、なににもかえがたい報奨となる可能性がある。

4. 有給ボランティアの問題

「有給ボランティア paid volunteer」ということばがある。無給・無償がボランティアの根本特徴のひとつだから、これは、形容矛盾である。しかし、かならずしも、無給にとどまらない場合がボランティアにおいてある。ボランティアの根本特徴には他に勤労や自発性があると思われるが、これらもその希薄なものがあって、「非勤労ボランティア」とか「強制ボランティア」という形容矛盾のボランティアも存在する。つまり、ボランティアは、勤労だが、イベント・お祭りへの参加など、楽しいもので「遊び」とひとつになりうるから「非勤労ボランティア」は可能であり、学校の清掃のボランティアに、「こどもが質にとられているからしかたがない」と、いやいやに参加しているとしたら、非自発的な「強制ボランティア」ということになるだろう。ボランティアは、勤労で自発的で無給だが、それを理想型にして、それがまったくない非勤労・強制・有給を反対の極において、そのあいだに、その理想型の方向に（これらの特徴のいずれかをつよくもってボランティアと言われて）、より理想的典型的なボランティアが存在すると見てよいのではなかろうか。

ボランティアに踏み切ろうとするばあい、少なくともその場ではエゴイズムの克服が必要で、自身の利己的な欲望・エゴをおさえ、強制しているのであるから、その点からは、根本的に、ボランティアには、「強制」の性格があるともいえる。勤労の点にしても、生活のための難行苦行の、しばしば疎外的となる「労働」「勤労」と異なって、ボランティアは、自由で自己実現的であり、もともと非勤労的だともいえる。

「有給」「有償」という点についても、広い意味での報酬・報いは、おそらくどんなボランティアにも存在していて、お金にかえがたい、経済外的な豊かな価値を受け取っているの

である。さらには、実際にお金をもらう、狭義における「有給」のボランティアも存在する。海外に出かけて難民援助、治安の維持、生活改善に献身していくひとたちは、生活全体をそこにかける、身を挺してボランティアに参加しているのであって、ある程度の生活の保障がなくてはやっていけない。有給ということになる。また、「交通費」の名目で少しぐらい出して感謝の気持ちをとすることは、ごくふつうの話であり、薄給ではあるが有給となっているばあいもある。アメリカの学校でのボランティアを紹介している本に、「stipend (俸給)」⁵⁾をすこしだしているというのがあったが、このことばは、われわれでいうと「寸志」「足代」に相当するものであろうか。

さらに、実質的に本人はちゃんと賃金をえているものもある。勤務先(会社とか官公庁)を「有給」のままに休んで、その承認を得ながら、ボランティアに参加する「有給」ボランティアである。「ボランティア休暇」を本来の有給休暇とは別にもうけることが試みられるようになってもいる。この場合、雇用者は、賃金をふつう通りに支払っており、ボランティアする者は、雇用先の仕事ではなく別の仕事を自己の選択においておこなうわけで、出張先がふつうのそれとはちがうだけだともいえる。この場合、ボランティアしているのは、実質的には雇用先の会社になるわけである。

近所の道路のそうじをするようなボランティアとちがって、老人の介護とか大規模な国際的な援助活動になると、これをコーディネートするなどの組織的な展開が必要となる。「赤十字」のような恒常的な活動とその組織が求められる。それを可能とするのは、それに専念する専門家・専従者たちである。これらの人々は、その生活をそれにかけているのであれば、かすみをたべて生きるわけにはいかないから、当然、それなりの生活保障が必要で、つまりは、この専門的なボランティアは有給とならざるをえないことであろう(資金不足がふつうの小ボランティア組織の場合、すずめのなみだ程度の有給でのスタッフということになるが)。なお、ボランティア組織は、大規模になるほど、ふつうの会社に就職するのと同じ意識で、そこに勤務するものをおかえることにもなる。そういうひとは、ボランティア組織に属してはいるけれども、賃金を目的に就職しているのであって、当然ながらボランティアとはいえない。

なかには、お金そのものは出さないけれども、ボランティアしたその労働時間を点数化して、これを将来自分がボランティアしてもらうための貯蓄とするというようなシステムをつくって、ボランティアに勧誘している団体もある⁶⁾。そのボランティアは、将来のサービスを受ける元手になるものであり、無給ではなく、その時間分、将来、労働給付を受けられるというわけで、貯蓄するようなもので、有給になっているのだともいえる。とはいえ、厳密に労働した時間分が貯蓄されて将来支払われるということの保証はないようで、ボランティアに市民をさそい出すための方便になっているのだという方がよいようにも思われる。これ

を金子郁容は、「V切符制度」⁷⁾と称しているが（Vとは volunteer のVからとったもの）、こういうV切符制度をもつわが国のボランティア団体はかなりの数になるようだから⁸⁾、相互に連携していくなら、単にボランティアに誘うための方便にとどまらず、現実的な制度となる可能性をもっているものなのかも知れない。

有給ボランティアでは、利用者に対して有料にする「有料ボランティア」という発想もある。ボランティアは、無給・無料だということで、「ただ」ならばと、いい気になってこれを利用する不埒なものもでてくる。訪問看護のボランティアにながく専念してきた松村静子は、対談のなかで、「日本人というのは甘えと依存の構造が底辺にありますから、馴れてしまうと、今日は日曜日だけど自分はゴルフに行きたいから、看護婦さん来てみていてくれないかなんていう関係になってしまう」と言い、けじめをつけるために、専門職の人がそのサービスを、特別に時間をとってボランティア精神ですするというようなときには、「ある意味ではきちんと有料化」した方がいい、「有料であってもいいわけです」と提言している⁹⁾。

有料化、有償化は、おそらくボランティアの根幹にかかわる問題であり、当然、そんなものボランティアではないという声が聞こえてきそうである。だが、長年のボランティア経験からそう考えるようになったという松村さんの主張は、あるいは、半ボランティアでしかないことになるのかもしれないが、貴重な意見ではないかと思われる。海外の援助活動に出かけるボランティアは、生活できるだけのお金が出されるのが普通であり、ボランティアは絶対に無償・無給でなくてはならないとはいえない。ただし、資本制下のいわゆる賃金労働のように、「お金」「賃金」が目的となるものであってはならないであろう。肝心かなめのところは、自発的に奉仕し無私無欲で献身するボランティア精神からなっていて、それをスムーズに展開するための一手段として「お金」が位置付けられているのであれば、「有料化」したボランティアがあってもいいのではなかろうか。

5. 無給のマイナス面

ボランティアは、無責任で頼りないといわれることがある。ボランティアは、自発的な自由意志によってなされるものとして、勝手にこれを停止したりしても、道徳的責任はまぬがれないとしても自由といえれば自由である。それは、「無給」であることを切り札とする。無給が無責任・頼りなさの免罪符となる。「只働きののに、あれこれ命令されたり文句をいわれたりする筋合いはない、そんなのなら、やめた」ということが可能である。

有償であれば、その賃金・報酬に見合うだけの仕事をしなくてはならない。いやなことであって、最後までやりとおす厳しさが求められる。雇用主がそう求めるだけでなく、賃金をもらって働く労働者自身もそういう自覚をもつのがふつうである。難行苦行の厳しさと引き替えに賃金がもらえるのであり、これを途中でなげだすとしたら、それなりの責任をとるこ

とが必要となる。賃金がカットされたり、ものによっては、それ相当の損害賠償をひきうけねばならない。ボランティアは、その点、無給ゆえに、甘さがでてくる。義勇兵・消防団のように、強い規律・組織的な活動がはじめから前提されていてこれに加わるような場合はべつだが、ふつうには、生活に支障がでてくると、ボランティアはやめて生活を優先させることになる。厳しさに欠け、頼りないものになりがちである。

ボランティアでは、全体的公平さに欠けることもある。自分たちが自発的に自由に選択して、自分の活動を贈与しようというのであり、他人からとやかくいわれる筋合いはない。ひとから見るとひいきしていようと、道徳的に批判されることはあっても、それだけのことであって、当人の労働は当人の自由になるものである。ぜいたくな恋人に贈与しようと、困窮しているあかの他人にであろうと、あるいは贈与を停止しようと、勝手といえば勝手である。自発的な自由な活動としてのボランティアは、贈与の相手も自由に選ぶ。ひとに雇われているのではなく無給であるから、命令されることはないのである。

無給としてのボランティアは、アメリカでは別の方面から問題になってきているようである。「社会的地位の計測としての有給の重要性が増大する」¹⁰⁾ なかでは、ボランティアする「無給」の者は、有給化できるほどの存在ではなく、単なる見習い・研修生でしかないと意識してしまうことがあるというのである。同一のコミュニティーに持続して住むことが少なくなるとともに「社会的地位の計測」は、収入や車や衣服などによって計る傾向が大きくなり、ボランティアの「無給の地位」は「非専門的」で「その労働は無価値」¹¹⁾ と見下されて、ボランティアは無能力の証になりかねないと感じられる傾向が出てきているとのことである。「組織的生活でのお金の象徴的価値が大きくなるとともに、ボランティアの強調は必然的に減少する」¹²⁾ と。お金がすべてとなる世の中では、ボランティアは、なくなる可能性もあるということになる。アメリカの場合、いずれは有給で雇うつもりでも、未熟な訓練生のあいだは、これを無給として、それをボランティアと称していることがあるようで、こういうボランティアは、たしかに「給料のもらえない」未熟者の代名詞となっている面があるのである。

これとかかわることだが、ボランティアは、無給の労働者として、有償のいわゆる賃金労働者の生活をおびやかす可能性をもつ。神戸の震災においては、ボランティアの無償の医療や、無料での必要品の給付が行なわれたが、地域の医療機関が回復するにもなって、医療ボランティアは、ひきあげていった。商店が仮店舗をつくるころには、必要品の給付や炊き出しのボランティアもひきあげていった。かりにそれらのボランティアがずっといつづけるとしたら、有料の病院や商店がなりたないことは火を見るよりもあきらかなことだからである。日常的なボランティアでも、失業率の高いところでは、ばあいによると、無給・無料のボランティアは、雇用を減少させ、労働者を困らせる可能性もでてくる。

本来的には賃金があって有料でやるべきことを、ボランティアが安易に無給でひきうけることは、さらに別の問題も引き起こす。あきびんなどの容器の回収は、消費者なり関係企業が責任をもつべきことであろうが、清掃ボランティアがチョモランマ山にまで出かけたりして代行しているのでは、消費者と企業は無作法・無責任を改める機会がもてないままになってしまう。看護ボランティアの松村さんが、場合によってはボランティアを「有料化」¹³⁾したらいいと言っていたが、あきかん等の回収代をボランティアは関係企業に請求するといひかもしれない（エヴェレスト山の方では、マナーの悪い登山者からは帰る際、清掃費用に相当するものをとることにしているという）。

分野によっては、無給のボランティアは、資本の補修・欠陥の補いをするのではなく、逆に資本制のもとでの企業化自体を妨げる場合もある。あきびん等を始末することにボランティアがいっさい手をださずその放置の山に關係者が音をあげることになれば、法律での規制が話題になるとともに、回収しやすく再利用しやすい容器の製造のための關係の企業が設立されたりして、抜本的な解決が進められることになるろう。そういう新しい企業化への試みを、無給のボランティアは、費用がゼロほどやすいものはないから、さまたげるものとなりうる。

6. ボランティアするものとされるものの間柄

ボランティアは、無給の勤労奉仕だといわれるが、その無給で奉仕する相手が家族・「うち」のものの場合、ボランティアとはいわないのであって、そのその、本来は有給のあいだがら、つまり、経済的には等価交換のなされるべき、あかの他人とのあいだで成立するものである。

そういう本来は有償であるはずの、あかの他人への労働の提供を、ボランティアは、無料・無給です。ここには、そのあかの他人との關係に、無給という特別の事態を介しての特別の關係が成立することになる。こういう他人への援助では、その人とのあいだに、ふつう恩義の關係が形成される。援助するものは「恩を売る」のであり、援助されたものは「済まない」と感じて「恩返し」をしなくてはと思ひ、両者は、恩の貸借關係を形成する。だが、ボランティアのばあいには、「恩」というような意識や關係は、あまり起こらない。

ボランティアでは、贈与するとはいっても、生活の面倒全体を見て、お金も援助していくというような持続的で全面的な深いつながりではなく、一時の一場面での勤労を提供するのみのことである。多くの場合、ごく浅い關係にとどまることにそのひとつの原因がありそうである。

しかし、それ以上に、ボランティアの受け手が、ふつうの貸借的な、つまりは、借りをかえせるような、めぐまれた状態にないこともかかわるように思われる。ボランティアは、しばしば、返報不可能の者にサービスを贈与することになる。老人の介護ボランティアにして

も、老人は、「おかえしを」と思っても、その能力を失った者としては、それはできない。災害の罹災者、難民などもそういうことであろう。難民の場合は、さらに、「自分たちの不幸は、さかのぼれば、ボランティアできるような豊かな先進国の犠牲として生じたもので、その責任は、ボランティアする人たちの方にあり、援助は、感謝すべきものというより、当然のもの」と考えるようなこともある。あるいは、自尊心の強い地域では、外国からのボランティアを、高貴な自分たちの国への「貢ぎ」「朝貢」ととらえるようなこともあるという。

また、ふつうのばあいでも、貸し借りの恩義は、集団のあいだでは、組織や他人まかせとなって、とくに借り手の方の個人の意識のうちには成立しにくいように、ボランティアでも、集団と集団の関係になる大規模なボランティアになればなるほど、借りとも恩とも感じず感謝もしないというようになることもある。個人が個人的に親戚とかお金持ちから学資の援助をしてもらったというばあい、返さなくてもよいといわれても、借り・恩を感じることであろう。だが、公募される奨学金のようなばあいは、あまり恩義の意識はもたないものである。

しかし、ボランティアを受けて、ありがたいことと感謝心をもった人は、自分に余裕ができたなら、おそらくは「お返し」をと思うことであろう。神戸の震災の罹災者のなかには、日本海でのロシアのタンカーの流出油の回収作業に対してボランティアのお返しとの意識で参加したものがいた。お返しといっても、恩になったひとへの恩返しではなかった。つまり、ボランティアしてもらった当の人自身にこれのお返しをするというのではない。ボランティアへのお返しは、別の、支援・援助を必要とする人へと回されるのである。閉じられた関係のいわゆる「恩がえし」ではなく、ひらかれていて、同じように困っている人へとボランティアの輪を広げていくかたちになる。

特定の私的関係のなかで無償の労働を援助されたというのであれば、その相手へ「お返し」がなされる。神戸の震災のような場合でも、特定の個人のところへの個人的な支援・お見舞いに対しては、当然、支援されたひとは、その個人への借りを意識し、ゆとりができるとともに、なんらかのかたちで個人的な「お礼」「お返し」をしたはずである。

だが、ボランティアは、本来、「うち」のものにではなく、そとの無縁の人々へと愛の手をさしのべるもので、不定の匿名の間柄にあっての援助である。しかもしばしば集団的なものであって、援助者を特定することもままならないものになる。「だれかは知らないボランティアの方に援助された」ということであれば、「だれかは知らない方にボランティアでのお返しを」という意識になるのであろう。あるいは、広島市のみなさんからということであれば、広島への「お返し」を語ることになろう。しかし、それでも、広島よりは、岡山の人々が災害で困っているのであれば、博愛的利他主義のボランティア精神への「お返し」は、あ

るいは「ボランティアをもってするお返し」というものは、その困っている方にまわすべきだと考えるのがボランティアではないか。

さらに、ボランティアをして労働を贈与する側からいうと、もともと、余裕・余暇に成立しているものとしては、かえしてもらふことなどはじめから思っていないことがある。一方的に贈与しているのである。無私の菩薩行、隣人愛を実践しているのである。普通には、大なり小なり貸借の意識のもとに贈与が行なわれるのだが、ボランティアの場合、勤労の贈与とはいえ、楽しんでやることが多いものとして、あるいは、そこに生きがいが発見できるようなものとして、しばしば「趣味」「あそび」と無区別になることもある（したがって、受け手もそのことを感じる事ができておれば、「恩にきる」などと堅苦しい意識をもたないですむ）。豊かな経済外的価値を受け取っている享受者と感じる、「与えるよりも多くを得た」というボランティアにおいては、「恩を売る」とか「貸し」というような意識は、本来的にその成立根拠をもっていないのである。

註

- 1) 金子郁容 『ボランティアもうひとつの情報社会』 岩波書店 1992年 150頁
- 2) 同上書 158頁
- 3) 同上書 151頁
- 4) 同上書 151頁以下
- 5) *Volunteers in public schools.* ed. by Bernard Michael. 1990. p.4
- 6) 水島照子『プロの主婦・プロの母親—ボランティア労力銀行の10年—』 ミネルヴァ書房 1983年.
同『豊かさの生活学』 ミネルヴァ書房 1992年 参照
- 7) 金子郁容 『ボランティアもうひとつの情報社会』 岩波書店 1992年 159頁
- 8) 同上書 161頁
- 9) 高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』 勁草書房 1990年 167頁以下
- 10) Jone L. Pearce: *Volunteers The Organizational Behavior Of Unpaid Workers.* 1993. p.168
- 11) *ibid.* p.168
- 12) *ibid.* p.168
- 13) 高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』 勁草書房 1990年 167頁

(初出論文名「無給としてのボランティア」 『ぷらくしす』(西日本応用倫理学研究

会) 1998 年春号 平成 10 年 3 月)

第三章 ボランティアと個人の自発性

1. 個人の自発的意志

ボランティアは、無給の労働、勤労奉仕である。しかし、無給であっても、それが無理やりに強制されたものである場合、強制労働、苦役であって、ボランティアにはならない。ボランティアであるには、自発的にこれに参加するという各個人の自由意志(voluntas)がふまえられているのでなくてはならない。その自発的意志に発することにおいて、その無報酬の勤労の内容も、強制労働などとはまったく異質の、生きがいのある充実したものになってくるのである。

現代のボランティアは、ふつう、生活のためにする雇用された勤労のそとで、自分の余暇・余裕においてなされる。このとき、その労働力は、だれにも売ってはならず、当人が所有している。自分が自由に処分できるその労働力を、ボランティアするものは、自分の自発的な意志において、援助の求められているところに贈与することを決定するのである。

その参加が自由意志によるのではなく、他のものによって命令され強制されるとしたら、(町内会の草とり等がときにそうなるのだが)、これは、「勤労奉仕」などとはいうけれども、ふつうには、「ボランティア」とはいわない。ボランティアには、自らの所有する労働についての、その贈与の自由な意志決定が当人のもとに存在していなくてはならないのであろう。「自発性」である。他による「他発」ではなく、「自」己自身の自由意志において、出「発」するということである。そのボランティアへと自己の労働を贈与していくことを自身において選びとったのである。

ひとは、社会的存在であり、他者や社会からの影響をうけて、その各個人の活動を展開していく。自発的といっても、そういう外からの影響の受容が全然ないよう各自の実際的な活動は存在しない。だが、反自発としての「強制」と単なる「影響」は区別されなくてはならない。影響を受けるというばあいは、当人が自らにこれをもつものと納得して、あるいは、これを好ましいこととみなして受けいれるのであり、そうでないとしても少なくとも自らの意志に反したものではないのが普通で、自発性をさまたげるようなものではないであろう。これに対して、「強制」は、当人には納得のいかない、あるいは、当人が自発的に意志することとは対立するような、そとからの意志のねじまげ、意志の変更になる。この変更は、自らは望んでおらず不本意である。自らはそうしたくないのだが、それをやらないと大きなマイナス(危害や懲罰等)がもたらされるので、やむなく、これに屈して従うというのが、強制を受け入れるということであろう。ボランティアは、反強制に徹した自発性をもつもので、各人が自らの所有する労働を自らの思うところへ贈与していく自由なものであり、

各人のひたすらな自発的な意志がこれを実現していくものである。

自由社会では、各人、自由な存在として、自発的なものを根本にもっていなくてはならない。企業家は、自己の利益のために自発的に活動をはじめ、またそのためには他者を利用し手段化する。同じく自発的といってもボランティアは、その志向するものが逆になる。他者の援助が目的であり、自分はそれのための手段になり、献身していこうと自己犠牲へと自発的に決意するのである。

自発的献身という、親が子供のためにという家族内での自発性が想起される。その無償の献身は、ボランティアとよく似ている。だが、親の献身は、あくまでも自分の子供のためであり、他人のために尽くそうというのではない。かけがえのない・代替不可能な身内に対して、かけがえのない存在として、自分の役割をはたしていこうとするのである。その点からいうと、ボランティアは、家族外の不特定の市民に対して匿名の存在としてかかわるもので、この自分がやらなくては代わりがないというようなものではない。ボランティアは、かならずしも、この自分が引き受けなくてもいい、自由である。やる、やらないについて、家族内でのように、自分がやらなくてはと指定され強制されているのではなく、自由に選択できるのであり、放っておいても、自分にその責任があるわけではない。だが、人間愛・連帯感情にささえられて、これを自分に背負うことを自発的に決意するのである。

家族は、もうひとりの自分として、相互に干渉しあう。ボランティアの場合は、相手を自立した個人である他者として尊重し前提しているから、自発的にとっても、そう踏み込んで干渉がましいことはできない。相手の求めていることを肯定して、その求めの範囲内でこれを援助するのである。しかし、家族の場合は、極端には自分に対するように、その自発性を発揮して、ときには、相手を独立した人格として顧慮せず献身（干渉）していくことになる。

2. 二種の自発性

ボランティアは、自分のためにではなく、他人のために働くのであり、しかも、それに対する報償としての賃金はなく無給だというのであるから、そのかぎりでは、この労働に、自発的に参加しようという気にはなれないはずであろう。だが、自発的に参加するのである。エゴとしての自己から見ると、不可解であるが、ひとには利他主義的な精神が備わっていて、そのエゴをおさえつけ、これを強制して、労働させていくものがあるのである。所属の全体のなかでの個人として、全体なり、その成員に連帯の気持、一体感をもち、これに役立ちたいと意欲するのである。不幸に見舞われている者に対して、これをもう一人の自分、自分たちとみなして、援助することが必要と考え、それを自分が引き受けなくてはならないとの当為の心情を、社会的理性的存在としていただくことがあるのである。

さらには、ボランティアにおいては、自己の社会的存在としての存在意義を見い出したり、感動や喜びをその贈与の活動のなかでいただくことができることもあって、なすべきだというよりは、やりたいとボランティアを欲求することがある。ボランティアの自発性は、「やるべきだ」という当為(Sollen)を主とするものと、「やりたい」という意欲・欲求(Wollen)を主とするものとにわけられる。そういう二種の自発性からなるのだということができそうである。

不幸に見舞われている人々をみて、その救済が必要だと思っても、それを自分(エゴ)は「やりたくない」と思うばあいがある。そこでは、援助・救済は、行政がやるべきだ、縁者がやるべきだとなる。だが、いずれも引き受けようとしないうち、自分をふくむ市民の誰かが援助の手をさしのべるべきだということになる。このとき、ボランティアしようというものは、自分のエゴをおさえて、自分がひきうけねばならないと決意するのである。周囲をながめてみて自分にふさわしいと思ひ、あるいは救済の強い要請を感じ、自分がやるべき(Sollen)だとして、自己を犠牲にする決意をするのである。自己犠牲を感じるものとしては、この当為(Sollen)としての自発性は、自己強制の苦痛がともなっている社会的理性の自発性になる。感性はしぶるが、理性がこれを押さえつけて、引っぱって活動にむかわせるのである。

これに対して、そのことにおいて自分の生きがいが見出だされ充実感をいただくことのできるボランティアの場合、自らにおいて「やりたい(Wollen)」ものとなる。理性のみならず、自分のエゴ・欲求も、そのボランティアに対して積極的なものであり、反対するものがない「やりたい」ものとしては、このボランティアの自発性は、「感性」の自発性ということもできるであろうか。お祭り・イベントのボランティアなど、この感性の自発性にもっぱら負っているものとなろう。これには、各人のうちで反対するものがなく、参加したいのであるから、当為の自発性からなるボランティアのように、先駆する者が勧誘しうながすという苦労がなくすむ。だが、ここでは、エゴが反対しだすと、ボランティアは成立しなくなるから、この自発性のみでは、当てにならないボランティアということになりそうである。

このふたつの自発性は、一つのボランティア活動のなかで多くは混在しているものであろう。「やりたい」と思っはじめても、いざ手をつけてみると困難が待ち受けていて、それを貫徹し活動を持続させることは、はじめの「やりたい」気持ちだけでは無理になることがある。しかし、ボランティアの受け手、つまり援助を求めている者は、待ち続けているのである。ここでは、理性的な当為(Sollen)の自発性がそのあとを担っていかなくてはならない。そして続けていると、また、新たな喜びも出てきて、やりたいという意欲(Wollen)も回復してくるといったことになるのである。

逆に、はじめは、いやいやで義務感から行なっているようなものであっても、なれると、

おもしろくなって、感性の自発性になることもある。両方が交替しながら、ひとつのボランティア活動を成就していくことになるのであろう。自発的であるのは、その出発点にとどまることではなく、その活動の成就にいたるまで求められ、理性と感性、意志と欲求等が手をとりあってこれを遂行していくのである。

3. 個人の自立した社会

自らが決定をなし自らに実行していくような自発性の発揮されるためには、それを可能とするような自己立法的な自由の精神が各個人のもとに確立されていることが望まれる。そういう個が確立していなくては、自身の労働を贈与しようと自発的に自己決定することなどおぼつかない話になるろう。

個人が自立的でない社会では、全体の支配者の命令にしたがったり、全体のおもむくところにしたがって、皆とともに右にならえと、他律的に自分のありかたを決定していく。われわれの場合、いやだけれども皆がするから仕方ないと、半ばは強制されて地域の活動をなしてきた。ボランティア的な勤労奉仕は、我が国では各地域の共同体が地域の維持のために盛んに行なっていた。しかし、それは、勤労奉仕とはいわれても、ボランティアとはいいいくいものがある。参加する個人の自由な自発的な意志が前提されていないからであろう。ボランティアは、こういう他律的な、外的に強制されるものとは相容れない、自律的精神に基づいた活動になる。

近代資本制は、国民一般を自由な存在とした。それは、否定的には、餓死しようとする好きなように、ということになったのだが、自己の全存在は、自己のものとして自由に処分できるものとなった。その自由な処分は、主要には生活のささえとしての、気に入った賃金労働を自由に選択するという形でなされているのだが、その余暇・余裕に百パーセント自由な自分の時間が可能となった。この余裕の自由の部分は、まさしく余裕・余剰となって、自分のためではなく、他者なり社会への贈与にと、つまりボランティアにとむけられ得る時間ともなった。ただし、一般の労働者には、つい最近まで、長い労働時間のため、真に自由にできる時間・余裕はあまりなかった。それが可能になったのは、ほんの最近のことである。

自己の存在を自分で処理できる自由のあるところでは、積極的には、自発的な個人の確立が可能となる。自立した個としての各一者は、独立した自律的な存在として、他からの、全体からの無理やりの強制は拒否して、自身の納得できる活動にのみ参加することになる。ボランティア活動は、この個の確立を大切にした運動の極致をいくものであろう。ボランティアにもとづく慈善事業をはじめるとしたら、まずは、個人的個別的に寄付をつのって資金を集めることになろう。個人的賛同・納得をえて、資金は提供される。そして、これをもとにして、これと平行して運動主体になるひとびとが募集されるが、これも各個人が、呼び掛け

に応じてそれに賛同し納得して自発的にこれに参加するのである。各個人の主体性を尊重した民主主義の手續きにしたがって、ボランティアは、展開されていく。

そのかぎりでは、個別・個人の集合体とその運動のみがあって、「全体」つまり政府とか自治体等は不在となる。全体の役割を高く評価する者からは、全体の視座から全員が一致してなすべきことを善意の有志のみにたのむものとして、もどかしいと思われなくもない。たとえば、戦争に際しては、志願兵(=volunteer)によっているのみでは、国民皆兵で大勢力の敵方に対抗できないし、自分の利益しか考えないエゴイストは、志願しないから、善意の人・良識ある人のみが犠牲になるという愚かしいことになりかねない。

各個人の自覚的参加をまつことにするか否かは、事柄次第、状況次第となろうが、自由な自律的一者からなる民主主義の根本からいうと、何ごとであれ全体からの一方的強制はなるべくさけて、各個人の納得をもって自発的に参加するという体勢がとられるべきであろう。ボランティアは、その典型となる。個人によびかけ、自発性をひきだせるようにと意識変革をはたらきかけるといふ、面倒ではあるが、自律的一者としては当然そうあるべき自発的な状態にそのつどもっていくことになっていて、民主主義の根源的なすがたをそこではとり続けているのである。

政府などの全体と、各自発的な個人の関係は、おそらく両方が有機的にささえあうものになるのが一番であろう。個人とその自発性を尊重するボランティアは、政府とか自治体というような全体の活動とは別の活動として（ときには政府などの全体と対立する個ともなるわけだが）、受動的な存在になりがちな個人に対して、なによりも能動性・自律性・自発性の発揮できる場を提供する。それは、自由で民主的な社会をささえる一者（自律的個人）を再生産・再教育していく活動ともなり、したがってまた、この社会制度を維持・強化していくことに資すること大きいものがあるように思われる。

「老人ボランティア」がいわれているが、これは、全体と個というものを考えるとき、日本でも今後、大いに取り組んでいくべき課題の一つとなりそうである。長寿化で、全体（政府や自治体）の方からいうと、財政的にも人的にも老人問題は深刻になっている。しかし、それは、ことの消極的な側面であり、老人は、ケアされる存在にはとどまらないという積極面からもみていかねばならない。つまり、老人も、社会に有用な働きをなすことをつよく望んでいるのである。「老人ボランティアの役割」が「社会的サービス」にとり「本質的になっている」¹⁾というアメリカの「老人ボランティア older volunteer」の話は、日本の話でもある。まだまだ、仕事ができるのに、それがあたえられないことに老人は不満をいだいている。生活の保障は、けっこうあるから、年中が余暇であり余裕の時間になっているといってもよい。自分の特技をもって社会に役立ち得るならば、自分の存在の意義がなおあることを発見し、充実した生をとりもどすことにつながる。個人として大切にされながらそのもてる

能力を有効に活用し、社会全体へとかかわりをもっていく「老人ボランティア」は、老人の一者的な独立自尊を維持するためにも、意義深い制度になるのではないと思われる。

4. 自己強制

voluntary giving (自由意志に基づく贈与 [寄付行為や奉仕活動]) は、お金のばあい、一瞬の決意ですむし、贈与の意志の表明のみでよい。だが、ボランティアは、行為への決意であって、存在そのものをそこにそそぐのであり、当然それへの意志の持続性も必要となる。意志は、自己をボランティアへと強制していかなくてはならない。他者や全体からの外的強制は拒否し、自分の自発性によるものとして、ボランティアは、自由なものだが、自身において内的には強制がもとめられる。

ボランティアするものは、一面では、この活動を自らが進んでやろうと意欲し(Wollen)ているのだが、他面では、自己のうちにあるエゴの部分、怠惰な部分は、これに抵抗する。これに対しては、意志は、強制し抑圧して、やらねばならない(Muessen)と主張する。あるべき(Seinsollen)すがたを描いて、そうすべき(Tunsollen)だと意志することになる。あるいは、意志のみにとどまることなく、感性も、悲惨な現実を見るなかで惻隱の情にかられ、意志と共に「情熱」をつくりあげて、エゴを自己抑圧し、つまり内的強制を行なって、ボランティアへと自分をささげていく場合もある。

外的な強制の場合、それを強制するものがなくなったとき、活動は停止することになるが、内的に強制している場合、そこからはなんらの強制がなくても、自分自身が常にそれへと自らをかりたてているので、より確実な強制となる。自発的な精神をもってボランティアに参加するものは、内的に強制して、やらなくてはならないと意志しているわけで、その点では、困難に出くわしても、くじけたり、なまけるようなことが、外的強制をもってなる雇用労働などよりは少なくなるといえる。ただし、余裕・余暇にやる気楽なものとして、いやでもやらせようというような外的な強制がないことにおいて、少々、無責任で頼りにならないものとなる可能性もある。

自発性は、内的なつらさをともなう。金子は、ボランティアの「自発性パラドックス」をいう²⁾。「自分がすすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされる」³⁾ということである。「人が自発性に基づいて行動するとき、なにを、どのように、どこまでするか、原則としてすべて自分にかかってくる」のである⁴⁾。自分で決めたことだから、‘無理やり押しつけられたことで、やっぱりやめることにした’などとは言い訳できない。その行為が人から攻撃されることの‘つらさ’をひきうける必要があり、それ以上に自責のつらさがあるというわけである。

自発性をもってはじめられた活動では、自分のその意志を貫徹していく責任が自他に対し

て生じるが、さらに重要なことは、活動の結果への責任というものが生じることである。自由な自発性による活動では、自分にその結果の原因があるのだから、この結果に対しては自分が法的道徳的に責任を負うのでなくてはならない。自由には責任がともない、自己を厳しく内的に強制していく必要が生じることがある。

ボランティアは、自発性に基づくものとして、外的な強制とは相容れないものになるが、それは、理想・理念型としてのことで、現実には、かなり外的な強制のみられるものもある。町内会や学校での奉仕活動の一部にはそういうものがある。あるいは、最近、ボランティアをしたら、学校の単位を出すとか、入学試験の参考にするとかいわれだしている。これらは、単位を得たり合格するための手段としては、自発的ではなくて外的な強制に近いものとなり、ボランティアとしては、そういう周辺部に位置するものになりそうである（しかし、本来的なボランティアに誘うための教育的な配慮という点からは、おそらく有益である）。わが国の場合、個人の自立化が弱くて、各個人が自らにおいて判断してやるべきものも、しばしば「右にならえ」と「みんながやるので自分もやる」ということになる。個人の自発的な参加のボランティアも、そういう傾向がある。地域とか職場などのボランティアの場合、自発的で任意なのではあろうが、みんなの目が強制しているというようなことがある。その外的な評価を気にしながら自身を内的に強制している、伝統の「勤労奉仕」的な色彩の濃厚なボランティアである。

5. 受動性・受容性

自発性(Spontaneitaet)は、受容性(Rezeptivitaet)と対になる。ボランティアは、自発的だが、同時に受容性・受動性の面ももっている。ボランティアを求めている者が、まず第一に存在しているのである。この現実を前提にして、これを受け入れ、その求めに応じて勤労を贈与していこうというのがボランティアの出発点である。この始発の段階については、受動的であるのが原則であろう。ボランティアは、自発的であるが、まったく自分からすべてをというような、もっぱらに内発的なものなのではない。まずは、そこからの触発がある。つまりこの点では自発ではなく「他発」なのであって、これを敏感に受容してという受容性(Rezeptivitaet)をふまえている。

ボランティアするものがその活動内容について、求められてもいないのに、勝手にこれを押しつけるような場合、そういうところまで自発的にやるのでは、される方は、よけいなお世話だということになるかもしれない。老人がひまにまかせてやる近所の公園や道路の草木の手入れぐらいなら、勝手にやっても、めいわくがるものはあまりいないであろうが、頼みもしないのに、防火ボランティアと称して家の中までふみこんで来られるとなると迷惑千万で、「ボランティアお断わり」ということになるろう。

ボランティアでは、まず、震災などで罹災者が援助をもとめているといったような「所与」が大前提としてある。もちろん、自分が「課題」をも設定していくこともあろうが、それでも、本源的には、そこにも所与性があるのではないか。所与のものを自発的に課題として発見するのである。「山がよごれている」「町のカイドがいる」と求められていることを、そういう所与・前提をふまえ、これを顕在化して、それを自らの課題としていくのである。ボランティアでは、自発性が尊ばれる。そうでありつつ、その求めについては、勝手に決めるのではなくひたすら受け入れてこれを大前提としてはじめていくのであり、その点では始元において受動的である。

ボランティアをコーディネートするものは、ボランティアしてもらいたい内容について、受け手の求めるものを活動内容としていくために、ボランティアするもの自身がそれを自発的に意志していけるように、その自発性を最大限尊重しつつ、「うったえ」「よびかけ」「さそう」ののではなくてはならない。その点では、ボランティアするものは、まずは受動的な存在として登場する。能動的な自発的な行為の贈与者となるようにと求められる、受け身の存在である。

ボランティアをコーディネートする人にしても、その援助されるべき求めをふまえるのであり、自分が勝手にするものではない。その現実をありのままに受け入れて、それから始めていくのである。現実が呼び掛けているその求めをだれよりも敏感に受けとめている人になる。ひなどりが口をあけていて、それにおやどりがえさをいれていくのに似ている。口をあけているものの求めに応じるのであって、(フォアグラ製造用のがちょうの飼育のように)口をむりやりこじ開けて、勝手に自発的にえさを詰め込んでいくのではない。求めがあり、さそい、よびかけがあつて、これにこたえていくのである。ボランティアは、社会的援助の活動であり、求め・困苦等に対して自らの手をさしのべるもので、まずはこれを敏感に受けとめていくという受動・受容が根底にある。

6. あやつられる「自発性」

ボランティアは、自発的でなくてはならないが、その根本において、あるいは、はじめに際しては、求めにこたえるものとして基本的に受け身である。援助を求めている者自身から、あるいはボランティア団体などから、陰に陽にさそわれるのであり、よびかけられるのである。ボランティアは、すべてを一人でする完璧な自発性からなるのではなく、出発点では他発的で呼び掛けられたものとして「受け身」である点において、ひとにのせられ、あやつられたものになる可能性をもつことになる。

その援助についての理解をもち、その活動を贈与することに納得して、自発的にはじめていくのだから、盲目的行動とか強制される活動とは違って、自分の行為の有意義なこと、積

極的な社会的役割（つまり悪やいかがわしいことに加担しているのではないこと）を十分に自覚しているのではあるが、そそのかされ扇動されているにすぎないというようなことが出てくる。強制的な場合、それは自身としてはやりたくないということがあるから、強制がなくなるとただちに停止する。しかし、かりに扇動されただけのものであっても、ボランティアは自発的な形式をとるので、内容的に問題のあるようなものでも、強制とちがい喜々としてこれに参加することになる。自発性に基づいているということで、扇動がなくなっても自発的にそれを続行することも生じる。

ボランティアは、各人の自発性によっているものとして、その自発性への「さそい」「うながし」がなされるのだが、それは、ときには、「のせられる」「あやつられる」ものとなる。いかに自発的自律的とはいっても、各人の判断のもとになる情報そのものは、個人的にはかなり限定されたものとならざるをえず、マスコミなどを利用する以外にない。かりに、情報を操作する人たちが、隣国について、否定的で敵愾心をあおるような情報ばかりを流していくとしたら、その範囲内で判断していく国民は、いずれは、「聖戦のボランティア（義勇兵）」をと決断していくことになるであろう。

いつの時代も支配者たちは、国民をあやつって、各人の自発性によびかけ、その自発性に依拠しようとしてきた。各人が支配者の目的とするものによってきて自発的に活動を展開するならば、むちで外的に強制するのとちがって、以後は放っておいても自動的にことがらは成就していく。全体主義の社会というと、全体からの外的強制が想像されるが、必ずしもそういう単純な形をとるものではない。ここでも、その全体の支配者の意図するものを各国民各個人が自分のこととして引き受け、各人が自発的に取り組んでいくというかたちをできるだけとろうとする。自由に自発的に、独裁者を崇拜し、その指導を自発的にわれさきにと求めていくのである。勤労奉仕への自発的参加はもちろんのこと、ときには、独裁維持のための弾圧・粛清にすら、国民は、自発的に参加し、隣人を密告していく。

逆の民主主義下においては、そういう、あやつられた仮象の自発性はないのかというと、やはり、ここにも、作られる自発性は存在する。全体主義とちがって、各人の自由・自発性は可能なかぎり尊重されて、あやつられた、錯覚としての自発性など、一見、ないようにも思えるのだが、しっかりと存在している。ひとは、孤独に弱い存在で、個をつつむ全体的なものによりかかろうとし、E. フロムが指摘したように、えてして自立をこばみ「自由からの逃走」をしがちなのである。マスコミを通じて、政府や自治体等を通じて、繰り返して宣伝がなされると、個人は、全体や権威づけられた声に意外と簡単にのせられる。オリンピックなどのイベントでのボランティアには、そういう感じのするものがある。

註

- 1) *The Older Volunteer* compiled by C.N. Bull and N.D. Levine. Greenwood Press, 1993. p. x iii.
- 2) 金子郁容 『ボランティア』 岩波書店 1992年 103頁以下参照
- 3) 金子『同上書』105頁
- 4) 金子『同上書』106頁

(初出論文名「ボランティアと個人の自発性」)

『HABITUS』(西日本応用倫理学会) 1998年5月号 平成10年5月)

第四章 ボランティアにおける「任意性」の意義

1. 真の自発性

ボランティアとは、「個人の自発性に基づいた、無報酬での、勤労をもってする、対社会的な援助活動」と定義できると思うが、それが無報酬の勤労であっても、自発性を欠いている場合は、無理やりに動員されての勤労奉仕や強制労働とはなっても、ボランティアとはならない。ボランティア(volunteer)には、自発的(voluntary)なことが肝心要めになるということであろう。voluntaryとは、「自発的」であるとともに、「任意」ということでもある。ボランティアは、自らの意志において自発的に、そして任意・随意に、自分の自由にできる時間に好きなように気軽に参加できる万人に可能なものということである。

しかし、自発性・任意性は、心のなかの問題であって、無報酬・勤労の特徴とちがってそこから見えるものではない。実際には、よくよく当人に確かめてみると、いやいやのことで半ばは強制であったり、たくみに操られたもので、あとからふりかえって見ると「のせられていた」というような場合もある。自発的と意識したとしても、真に自発的とはいえないものもあるというべきである。

全体主義的な社会では、個人が自由に好き勝手に社会的行動をすることは難しい。いやいやであっても、みんながしていることに追随し、支配者の命令に従順になることが求められる。そのとき、意に反して大勢に追随しているのみだとしても、個人のその内面が見えなかりきり(それをそとに不満として出すことは、反全体の行動として、糾弾の対象となったりするので、大変な勇気を必要とする場合もあり、ならば「長いものにはまかれろ」となりがちで)、鞭打たれるのでも尻をおされるのでもなく、自分で行動しているかぎり、そとからは、自発的に積極的に参加しているものとみなされることもある。

自発性がまやかしのものではなく、真に個人の自由に発するものであるためには、それは、任意性・随意性でうらうちされていて、「しようしまいと好き勝手にできるのだ」という、端的には「しない自由」をもつのでなくてはならない。独裁的支配者を賛美する自発的集会に対して、これへの参加を拒否する自由がそこにあるのだとしたら、それは自発的とは名ばかりのこととなろう。ボランティアの特徴に「任意性」をあげる人はあまり見かけたことがないが、それは、「自発性」のうちにもそのことも含みこませているからであろう。筆者は、ボランティアなどの自発性が真に各人の自発性となるには、「しない自由」の「任意性」に裏付けられていなくてはならないと考える。

2. 反強制の貫徹

たとえば、秋の刈り入れの農作業に青年たちがボランティアで参加しているのだと想定しておこう。青年Aは、その営農のあり方を見て、それが農場主個人に奉仕するだけのものと知って、そのボランティアをやめたいと思い、そう意志表示したとしよう。このとき、農場主が、これを許さず、「この頃の若者は情けない」といいながら、銃器をちらつかせて、作業をつづけるようにと強制するとしたら、これは、青年Aにとっては、無給の勤労ではあるが自発性がなく、自己の意志に反して強制される「強制労働」でしかなくなるはずである。となりの青年Bは、依然、やる気で自発的に一生懸命作業をしていて自身ボランティアとしての誇らしさを感じているとしても(そしてそれはそれでいいのだが)、いやになったとき、奉仕したくなくなったとき、その作業からはずしてもら自由がないのでは、この青年Aの勤労は単なる強制労働に変容してしまう。

青年AにもBにもその仕事がボランティアでありうるには、Aは、もはや自発的には働きたくないのであれば、その自由を実現してそれから離れ、この労働を拒否する自由をもたねばならない。青年Aへの強制労働の様子を見ていて、ボランティア青年Bは、かりにいやになっても離れられないことが分かったら、自分のそのボランティアに戸惑いをおぼえるに違いない。あるいは、ボランティアと強制労働は、ほんの紙一重のちがいでしかない(いやに思うか否かという、「思い」の違いでしかない)悟りすますか、そんなに簡単に強制労働に転倒するようなものは、もともとからボランティアではなかったのではないかと考えることであろう。

ボランティア団体とか地域の共同体あるいは自治体などの全体がボランティア活動を推進する場合、各個人はそれに賛同して自発的に参加することになるが、このとき、その共同体とか全体のそういう意思に個人が一致しているときは、問題はない。問題は、不一致の状態になったときである。全体主義的な「勤労奉仕」では、その個人の不参加をゆるさず、これになんらかの制裁を加えようとしたり、あるいはその個人の意思に反していても無理やり参加させることになる。逆に、このとき、ボランティアをうたう団体であるのならば、その不参加をはっきりと承認するのではなくてはならないであろう。つまり、ボランティアは、やる自由とともにやらない自由をあわせもった「任意」「随意」の特性をもっているのである。

ボランティアへの参加は、各個人に「呼び掛け」、これを「さそう」のであり、各人の意志を最大限尊重し、これをうながしていくのであって、けっして強制はしない。さきの青年の例でいえば、農場主は、青年A, B, C各々に十分な説明をもってボランティアへと勧誘し、これを了承したもののみに作業をさせ、かつ、いやになったら、説得はするもののその意志を尊重し、それが変わらなければただちに解放するのではなくてはならない。ボランティアは、あくまでも自由な個人のその自由を大切に、その自発性を、したがって、する自由とともに、しない自由、やめる自由をもふくんだ「任意性」を尊ぶものでなくてはならない

のであろう。なにがとも、そこでは、参加者各人の主体性が大切にされ、つねに「納得づく」になっていなくてはならないのである。

なお、「強制」であるが、これも、通常は、「自発性」を含んでいることを理解しておく必要がある。強制されるといって、ひたすらな受苦・受動という印象があるが、強制される側の自発性なくしては、強制は実効性をもたない。いくら強制してむちうっても、奴隷が一切の自発的な意志を放棄した場合、その場にすわりこんでふてくされては、鞭は用をなさなくなる。いくらむちうって強制しても、その鞭うちの腕力のみでは一歩たりともさきに進ませることはできない。奴隷が、歩くという自発的な意志をもってはじめて、歩かせるという強制は実現する。普通にいわれる強制とは、その行動への意志をもたないものが不本意にもこの意志をもつことを強いられることであり、この強いられた意志そのものは、みずからにおいて自発的に働いていく。強制する者からの厳しい懲罰・加害を避けるために、不本意な自発的行為へと強制・脅迫されるのが、強制である。犯罪行為に加担させられるとき、これが問題となる。形式的には、脅迫されている者も自発的に行為をしていて、外からはかならずしも強制・脅迫とは見えない。強制されてする独裁者をたたえる言動も、そこからみると、自発的な賛美に見える。「自発的にやっていることだ」といわれても、本当にそうかどうかは、当人によく確かめねばならない。それは、のせられ扇動されてのものであることも多いし、さらには、内実は強制・脅迫されてのものかも知れないのである。

3. しない自由の意義

勤労奉仕とボランティアをわれわれは、区別する。前者は、かりに個人的にはいやでも奉仕が強制されることがあるのに対して、後者は、あくまでも、個人の voluntary(自発的)な意志があつての奉仕であろう。今日のボランティアという概念に人々が託しているものは、それが近代的な自律的な個人の自由を最大限尊重した、自立的一者のあいだでの自発的活動になるということ、一言でいえば自由なのであろう。

ひとつの運動なり組織の全体のなかで個人が尊重されているのか否かは、その運動の指導者や全体の意向に各人が一致しているかぎりにははっきりしない。さきの青年Aの例のように、個人が全体やリーダーの意向に反することを行なおうとすると、そういう不一致ができてはじめて、そのことは、顕在化してくる。さきの例の場合、おそらく農場主には、青年AやBの個的な意志を尊重するつもりは、はじめからなかったのである。自分の求める方向に向かう自発的意志をもつかぎり、その自発性を尊重するみせかけをして、たくみに利用していただけである。青年たちが農場主の意思に反することをするまでは、そのことは明確にならないわけで、個人の自由が真に尊重されているのかどうかは、その運動団体やその支配者に反することを、それが許されている、「しない自由」「任意性」があることをもって

確認できるのだといわねばならないであろう。つまり、ボランティアは、単なる自発性にとどまるのではなく、その全体等の意思に反する、しない自由をふくむ「任意性」としての自発性を確保したものでなくてはならないのである。

もちろん、しない自由のみではなく、する自由のもとでも、ボランティアは大いに「任意的」である。運動や組織の全体の意向から分離して別のことをすることは、ボランティアでは、しばしばである。むしろ、ボランティアは、国や自治体という全体がしないことを先駆的にはじめていくものであり、全体が放置しているものに目を向けていくのであって、ここでも全体から離れて、個が尊重され、個の自由において活動しているのである。全体の意向に合おうと合うことがなくなろうと自由に活動していくのがボランティアであり、それが許されているのがボランティアだといえよう。

無償で自発的にといいると、家庭における親の働きは、ボランティアの働きと重なる。だが、親の献身は、あくまでも、自分のこどもに対してのみなされる。ボランティアは、逆に、あくまでも、外の他人に対してのみその献身の活動を行なう。その対象のちがいがからであろう、その各々の自発性ともなう「任意性」は、異なったものになる。親の自発性では、しない自由をふくむ「任意性」は希薄になる。「この子とはそりがあいそうにない」と授乳・養育するのがいやになったからといっても、「しない自由」「任意性」は、そこでは許されない。親子は、ふつうには、特定の二者間の代替できない関係であり、親は自分たちの責任においてそのこどもをこの世に存在させているのであるから、自発的にはやりたくなくなったとしても、養育は強制され義務化される。

これに対してボランティアは、しない自由の「任意性」もある自発性をつらぬくのである。やりたくなくなったら、やめる自由をしっかりとつ。事柄によっては、しばらくの間は強制されることもありうるが（車椅子をおすボランティアをしていて、「生意気だから、もうヤメタ！」となってもかまわないのだが、代替の人がいないかぎり、町の中に車椅子を放置して帰宅するようなことは許されないであろう）、基本的には、個人の自由を尊重して、やめる自由を、そういう任意性精神を実現できるものでなくてはならないであろう。

そうできるのは、家庭の親の場合と異なって、今日のボランティアにおける関係が、その基本において、自立した個人、自律的でアトム的な自由な一者同士の関係になっていること、あるいは、そういう関係になるように働きかけを行なっているからであろう。ボランティアの受け手は、その贈与者と対等の同じ自由な個人としての尊厳をもつものと前提されている。贈与するものもされるものも同じ自律的な近代的な個人、自立した一者であり、両者は、独立した他者同士の関係になる。どの個人も同じ匿名的な一者として、任意の関係を結ぶのである。匿名の自分がボランティアの贈与をしなければ、また別の匿名の一者がすればよい。場合によると、自分以外にボランティアになる者がいないとしても、相手は、自分の家族で

はなく、独立した他者である以上、基本的には自律的にやってもらうしかない、これを拒否することも可能になるものであろう（こういうとボランティアは冷たいものに思われようが、任意性の一面のみを強調すれば、そういうことも不可能ではないというだけのことである。ボランティアは、一層根本的には愛他の精神をもってはじめていくものとして、この愛の自己犠牲的な態度は、「冷たいもの」となることは当然避けようとする）。

現代のボランティアにおける人間関係は、かつての時代の人間関係とちがって独立した個人・一者であることを相互に認めあい、対等・平等の関係を結び、各人の自由を最大限に尊重することを求める。そして、この一者の自由の精神を守り、これを保障するものが、ほかならぬ、自発性規定のうちに含まれている「しない自由」「ぬける自由」をもつ「任意性」「随意性」になるのである。

民主制は、各個人の自由意志を可能なかぎり尊重し、各個人が自らの納得のいくもののみしたがって生きていくことを理想とするものであろう。できるだけ全体からの強制は避けて、各個人の自由な意志に呼びかけて、納得しながら自発的に各人が参加することをもとめる。ボランティアの精神と民主制は、同じ精神のもとにあるといえよう。ただし、民主主義においても、全体のかかわる問題では、個人の意思は拒否され、強制されるべきことがらも出てくる。納税とか、徴兵は、そういう問題になる。

それでも、できるだけ各一者が自発的に納税していけるようにと、民主国家は、納税者の納得を求め「説得し」「うながし」て、できれば、強制しなくてもよいようにつとめるのでなくてはならない。徴兵にしてもそうで、可能なだけ強制でなく志願兵・義勇兵として参加していけるようにと、説いていくことが求められる。

説得・納得は無理というとき、どこまでも自由を尊重するボランティアの「任意性」精神は、納税しなくてもよい、徴兵を拒否しても自由とする。だが、民主主義とはいえ、国家は、その全体のことを考えていく必要があるから、個人の自由を可能なかぎり尊重していくけれども、それにはやはり限界がある。誰かがかならず引き受けねばならないが、みんないやだというようなものに直面したりすると、民主的手続きをもって、誰かに強制せざるをえないこともある。しかし、ボランティアは、まさに voluntary(自発的任意的)と特徴づけられた、自由な個人の個人的な活動として、いかなるときにも、しない自由の任意性を自他に貫徹していくのである。

4. ボランティアの受け手から見ると・・・

ボランティアは、有償のサービス労働に比べると、「頼りにならない」といわれることが多い。もともと余暇の余裕にする素人の援助活動として、本職にはかなわないことがある。また、有償の場合、お金を受け取るのであるから、それに見合うだけのことをする責任があ

り、頼りにならないことをしていたのでは、仕事をとりあげられ、あるいは、不履行には損害賠償なども求められ、当然、労働する側も真剣になる。だが、ボランティアは、無償・無給なので、その点での責任は不明確になり、仕事の不備への文句に対しても、「ただ働きなんだから」と無償を切り札とすることができる。

有償なら、いくら時間的余裕や金銭的余裕がなくても、その賃金分は、そこで責任をとってサービスしなくてはならないけれども、ボランティアでは、「ただ」なのだから、余裕がなくなったら、その無給の時間は、当然、有給のアルバイトなどへとまわされることになるし、そのボランティアがいやになったら、「仕事がいそがしくて」と逃げることもできる。

この「頼りにならない」ボランティアに、さらに、「しない自由」「任意性」などということになると、「頼りなさ」にくわえて、さらには、仕事は下手なくせに口数だけが多い「なまいきなもの」「きままで自分勝手なもの」等といわれそうである。自分のしない自由のみを主張する場合、極端には、そのボランティアは、「冷たい」「利己的」といったものになりかねない。

もちろん、ボランティアは、「任意性」のみからなるのではなく、人一倍の「愛」「他人への献身」「利他主義」があって、そのうえでの「任意性」であるから、実際には「利己的」で「冷たい」「自分勝手なもの」となることはない。そういう場面では、しない自由ではなく、愛・献身をとるのがボランティアである。だが、特殊な場面では、「任意性」が前面にでることもあるということである。行政が手をつけないので、町はずれの不法投棄のごみを片付けていたボランティアが、市の幹部職員の不法投棄のすがたを見て、「しない自由」の任意性を前面にだすことは、ごく普通の態度になるといってよいであろう。

では、「任意性」の精神は、ボランティアの受け手自身には、プラスの意味は持たないのであろうか。この精神は、ボランティアの個人の自由を主張するものとしては、直接的には、そうなりそうである。だが、この自由の精神は、相手も自分と同一の独立した個人（一者）とみなし、相互に対等に同じ一者としてかわりあおうとするものである。各ボランティアは、その受け手と対等・平等の関係をそこに求めるのであって、これは、受け手にとって有意義なものとなるのではなからうか。

かつての階級差別の強い時代のボランティアにおいては、その受け手は、有閑階級からの善意を頂戴するというので、上下の関係になっていた。しかし、今日のボランティアは、そうではない。両者は、対等・平等のあいだにあらにあるものと前提される。同じ独立の自由な一者なのであり、たまたま、ボランティアの受け手になるものは、災害など諸般の事情のかさなりあいで援助が必要となっており、贈与するものは、たまたま恵まれ余裕の時間があって贈与の機会が与えられただけで、同じ、独立の一者として、対等にかかわりあうのである。「任意性」は、自由な個人（一者）の尊重の姿勢を貫こうとするものであり、その精神

の貫徹は、受け手の方にも有意義なものとなりうるのではないか。

5. 軽い接触

自分の余暇・余裕の時間に「任意」に参加するボランティアは、匿名の関係になることも少なくなく、そこに成立する関係は、その限りではごく軽い接触にとどまる。家族関係はいうまでもなく、給料を得ることを主目的にしているだけでの会社であっても、関係は濃厚なものになっていく。「強制」「命令」される仕事を、ボランティアのように「しない自由」「任意」などと拒否することはできない。「しない」としたら、それなりのしっかりとした理由を提示し、自身の内面を場合によると告白しなくてはならないかもしれない。いやな上司であっても、そこで給料をもらおうとするかぎり、これと対立し感情的になりながらも、それを切り捨てることができず、すくなくとも濃厚な関係を維持していかなくてはならない。

その点、ボランティアは、不愉快な関係が固定してしまったボランティアということであつたら、会社や家族とちがいで、即、しない自由・任意性において、これから手を引くことができる。軽い接触にとどめることができる。もちろん、ボランティアでは、逆に濃厚な関係になることもしばしばある。人のために尽くそうというような善意の人間の集まりとなるから、初対面からしてかなり親密な関係になることが可能である。しかし、ボランティアは、自分の余裕の時間に任意・随意に一時的に手伝いするものとしては、軽い関係になるのが普通であろう。かりに濃厚なものになったとしても、それがいやな者は、これを拒否して、あくまでも軽い接触にとどめることのできるのがボランティアであろう。

現代社会をになう自律的な自由な個人は、自らが自らを律しようという存在であるから、この自律(自由)を否定する他律(他からの外的な干渉)を嫌う。その点、他からの強制を排除した「しない自由」「任意性」の特性をもつボランティアの人間関係は、この自由な個人に似つかわしいものとなる。だが、こういう個人の自由が尊重されるのは、ごく近代社会でのことになる。かつての農村共同体とか全体主義的な社会では、個は全体の部分でしかなく、個の尊厳はないがしろにされ、自律が尊重される場面は少なかった。ボランティアに類したものも、任意ではなく強制となっていて、「勤労奉仕」とはいつても、ボランティアとはいにくいものがあつた。個人の内面への干渉も当然視された。個人のささいな日常的な事柄にもまわりから口を出し干渉しあう濃厚で多様な交わりからなっていた。

近代の生み出した自立した自由な個人は、そういう外的な干渉から独立した自律的な人間であり、「アトム」と形容されたり、「单子(モナド)」あるいは、「一者」等ととらえられた。「单子」は、ライプニッツでは「無窓」と特徴づけられるが、近代の個人の特徴もまたそういつてよいところがある。自己充実していて完全にそこから独立して、外的関わりを示す「窓」をもたない、隣人がなにをしているのかにも無関心な個人ということである。ヘーゲ

ル（『大論理学』有論）は、そういう個人を「一者 Eins」をもって表しているが、それは、自律の統一体ということであるとともに、どの個人も一律無差別に「一」としてのみ数えられるという、根本的な平等関係を語ろうとするものであった。この一者は、自己充足した「向自有」（＝独立存在）で充実した存在なのだが、しかし、一者は、逆にまた空虚でもあるとヘーゲルは指摘することを忘れていない。

われわれは、自立し独立した個人となるのだが、それは、行きすぎると、社会から途絶した存在になる。孤島の一者は、人間文化の豊かさを喪失せざるをえなくなる。豊かさ・充実の中身は、社会から仕入れていたのであり、ひとの充実した自立は、社会にしっかりと依拠し関わりながら、余計な干渉を排除し自律性を維持していくところに成立するのである。つまり、自由な自立した個人は、他方で、その充実のためには、社会的な関わりをもつ必要がでてくるのであり、社会への交わりの欲求・社交性をもつものなのでもある。

自由な独立存在でありつつ、社会的・社交的存在であることを可能にすること、それが今日の社会において個人の方からもとめている関係になろう。社交性を満たし、社会的に有意義な働きをしていることに充実感をいだき、しかも、個人の自由は、十分に尊重されるということである。ボランティアは、いうまでもなく社会貢献を第一としているが、同時にその自発性（＝任意性）の特性において自由を厳守しているものとして、独立的でかつ社交的という理想を満たす活動のひとつになるということができよう。

現代のわが国には、傷つきやすいひ弱な自我をもった若者が多い。わがままに自己中心的に育って、対社会的な適応の訓練がつかれていないからだとか、もともと繊細な感性をもっていて鈍感な対応に傷つきやすいのだとか、色々その原因が指摘されているが、とにかく、そういう若者は、会社の上司からの、人格を否定するような扱いに耐えることができない。だが、ボランティアには、こういう人も参加できる。しない自由・任意性があるかぎり、自分が傷つきそうになったら引き上げられるからである。現代の若者にけっこうボランティアが受け入れられているのは、そういうことがあってのことかもしれない。いつまでも部外者に、「お客さん」にとどまっておれるという気楽さ・気安さである。

6. ボランティアの義務化の問題点

以上のようなボランティアのしない自由＝任意性の特性からいうと、最近、高校生の大学への入試の点数にボランティア活動の経験を加算するとか、教師になろうとするものには、全員ボランティアの経験をさせるように義務化して等と、ボランティアの名のもとに強制的な色彩の濃い試みがされようとしているのは、少し問題があるというべきであろう。つまり、自発性・任意性を根本精神にもつボランティアなのに、義務的強制ボランティアとなりかねない点があるからである。はじめの例の青年Aのように、いやなのにやらされるというボラ

ンティアは、たんなる強制労働でしかない。せつかくの自由なボランティアなのに、「ボランティアは強制的でいやなもの」といった印象を残すことになったりしたら、ボランティアにとっては、大きなマイナスであろう。

とくに、高校生・大学生は、身体的精神的に生活能力が一人前になり、自由をもとめ、自立心が旺盛なときである。そこへ、強制的なボランティアをというのでは、これを指導しボランティアへと導入していく関係者は、大変である。本章にあげた農場での青年Bのように従順で疑問をもたないものであればよいが、青年Aのように疑問をいだき嫌になった場合、最後は「義務だ」「強制だ」という以外ないから、ボランティア即強制労働との悪いイメージを残すことも出てきそうである。「ボランティアとは、強制労働を自発的に行なおうとすることだ」とか、「無償の労働をいやいやにやらされるのが強制労働で、これをよろこんでやるのがボランティアだ」と皮肉をいうものも出てこよう。しかし、ボランティアは、そんなものではない。それは、しない自由のある任意性にささえられた自発性からなり、どこまでも自由なものでなくてはならないであろう。

ボランティアへと「強制する」としたら、それは、まだ一人前になっていない、依存しなくては生きられない小学生を対象にする方がよい。「町のお手伝いの時間」とか、「奉仕の時間」、あるいは「ボランティアの時間」を授業とか土日の宿題に組み込むことを義務化したらいいのではないか。小学生は、大学生と異なってまだ「無給」についてもアルバイトなどしないから抵抗はないであろう。労働と遊びも未分的で一つになる可能性も大きい。自発性・任意性は、かれらの場合、大人とちがって、つね日頃から、かならずしも、尊重はされておらず、教育的強制には抵抗がすくない年令である。個の確立のなっていない者においては、全体からのリードしだいで、そのボランティアへの強制を強制とせず、真に自分たちから率先してやっていく自発的なものにと変えていきやすいこともある。

わが国のこどもたちは、現在、働くことはもちろん、「お手伝い」もしないものが多い。わが国に大きな勢力をなしてきているホモ・ルーデンス（遊び人）側からの誘いをうける前に、勤労し奉仕する精神が開発されなくてはならない。ボランティアは、勤労を教え、愛の献身を教え、いずれは、（自発性・任意性において自由の精神を貫徹して）個人の自由を反省させる、大切な人間的教育をすることができる。すでに多くの児童が町の清掃や老人ホームでの活動等のボランティアに積極的に参加している。これを拡大して、高校生や大学生になってではなく、従順な児童の段階で、全員に義務化していけば、当の児童にとっても、将来の日本にとっても、教育的に意義深いものになるのではないだろうか。

（初出論文名 「ボランティアにおける「任意性」規定の意義」

『HABITUS』（西日本応用倫理学研究会）1998年7月号 平成10年7月）

第五章 ボランティアの社会的意味

1. 人間愛

ボランティアは、余裕のある人が自発的に無報酬で勤労奉仕しようというものだが、余裕があれば、ただちにボランティアに向かうわけではない。いくらゆとりがあっても、エゴイストは、ひとのために役立つとは思わない。人間の欲望には際限がなく、余裕ができたとしても、自分のことしか考えないような者は、自分のためにしかこれを使おうとは思わない。ボランティアで他人のために何かをとという姿勢は、エゴイストであることを停止して、かまえを180度転換した利他主義的なかまえをもつことが出てきてはじめて可能となる。ボランティアにおいては、利他主義(altruism)・人間愛(philanthropy)がいわれ、慈悲心・菩薩の心がいわれる。

ボランティアは、救済・手助けを求めている人々への奉仕活動になるが、そこにある愛は、同じ人間に対しての慈しみである。例えば、救済の対象が貧困だとすると、その大きな格差を前に、その格差を埋めたいと、理想的には、おそらくは自分たちと同一になることを望んで自らの労働を贈与していく。エゴイストはもちろん、そうではないひとでも、ときには、そういった貧困を前にして、それは各人の責任であり弱肉強食の世の中なのだから、慈悲だ慈善だなどと甘いことを言ってもはじまらないと冷たい反応を示すことがある。ボランティアしようというようなひとは、こういう格差を目の前にして、貧困を宿命・自己責任・必然とつきはなすのではなく、同じ人間であるものが非人間的な生存しかできていない事実悲しみのころをいただき、自分たちのみが恵まれていることにいたたまれず、同じ人として同じレベルに立ちたいと、その行動にでていくのである。人が同じように肯定され尊ばれるべきことを身をもって示していくのであり、人間愛に生きようというのである。

ボランティアは、貧困にせよ、災害の罹災者にせよ、困苦・困窮に陥った人々を前提にしてなりたつことがしばしばで、ここには、よい意味での「同情」がある。同情は、同情する者が恵まれた上位にあって、される者が下位にあるという位置関係を取り、ときに同情される方は、見くだされて人としての尊厳を傷つけられ、同情に不愉快なものを感じることもある。ボランティアでも、当人は恵まれた位置にいるのであるから、そのことはときにはあろう。だが、ボランティアする者の同情は、単に寄付や献金する場合とちがって、その存在そのものを恵まれない同情される者自身のところまで降ろしているので、同じ存在になって同じ苦悩の感情をいやくという、よい意味での文字どおりの「同情」になることができ、優越感を背景にもった不愉快な同情にはなりにくいといえる。尊厳を有する人間の、救済を求める切ないころを、その同じ場に立ってしっかりと受けとめるのが、人間愛

からするボランティアの「同情」になる。

2. 現代版の「滅私奉公」

現代の我が国のボランティアは、単に恵まれない人や災害の罹災者に献身しようというだけのもではなく、広範なものになっていて、地域社会・公的な世界において日常的に無報酬で役立ちたいと、公的な機関の手がまわりきらないようなところにその手助けをしていくものともなっている。自分のためではなく、地域とか国とか、あるいは世界のために、全体のために奉仕しようと、広く利他的に活動していくものとなっている。

これに対しては、全体とか公的なものに関しては、国とか自治体というような公的機関が責任をもって対処していくべきで、私的なボランティアなどが出ることはない、そういうことをやると、公的機関の怠慢を増長させることにもなりかねず、抜本的な解決を遅らせるだけだと批判されることもある。

だが、国や自治体は万能ではなく、予算も限りのあることで、国民は、自分たちでやれることは、公的機関を待つまでもなく、自分たちではじめていくべきではないかと、自発的に地域社会に勤労奉仕していくのがボランティアである。どちらかという、全体が始元にあるのではなく、まずは個が確固としてあるのだというものの見方・立場であろう。極端には、全体は、個の集合であるのみで、それとして別にあるものではないと考える立場であり、そういう立場からは、できるだけことは、自分たちのボランティアでしなくてはならないということになる。アメリカは、ボランティアの盛んな国だが、かつてのアメリカ西部開拓のように、ばらばらの個人と家族のみがあって、ほかには何もないところからはじめる場合、身近には存在しない全体や共同体になど依存のしようがない。存在しているのは自立した個人のみということであれば、地域で問題が起こった場合、各人が、緊急の必要に応じて自発的に、自らの武器等をもって集まり一時的な自警組織をつくったり、消防でかけつけることになる。警察官も消防隊員もいないのであれば、ボランティアでいく以外ないのである。個人の自発性をもって、自らの生活する地域にとって必要と思われる全体・組織をつくり、このなかに各人が参加していくわけである。いまでも、アメリカのボランティアというと、地域の自分のコミュニティーに対してのものが中心である。

自分たちのボランティアの力で、地域社会がなりたち、国がなりたっていくとすれば、ボランティアの意義は大きい。本来的に社会的存在としての人間は、そういう社会的な役立ちが目に見えれば、一体感情・連帯感情をもって社会的に充実感をいだけ、自らのかけがえのない存在価値を見出し、生きがいを感じることができる。

これは、個としてのエゴのためではないが、それをすこし拡大した、「自分」のうち、「自分」の町、「自分」の国に対しての奉仕としては、エゴが拡大されているのみだということ

もできる。だが、ボランティアは、その利他主義の「他」は、端的な他者にまで広がったものであって、「自分たち」のもとにとどまるものではない。商品の等価交換は、敵対的な関係のもとでも可能だが、ボランティアが無報酬であるとは、本来的には等価交換される端的な他者の間で、つまり労働にはそれに見合う報酬があるあいだがりにおいて、これを一方的に贈与するということである。あかの他人に対して、「赤十字」がそうであるように、場合によると敵対的な関係にあるものにすらも、広く奉仕する態度をもつのである。

ひとは、「うち」をもつ。自分のうちをはじめとして、自分の国までがあり、これは、もうひとつの、あるいは拡大された自己として、ときにはエゴイストも献身的になることができる。このとき、ボランティアのいう利他主義は、そのような自分・エゴ・うちではなく、他者、他の国のことを思い、敵対する者・敵国にも、必要ならこれに尽くそうというのである。ボランティアは、「うち」のものではなく、そとの他者に、あかの他人に対して奉仕しようというのであり、その利他主義の精神は、この地上の全人類にひろがったものになる。ボランティアは、コスモポリタンである。アメリカのコミュニティーでのように、自分たちの地域社会のためにと始まるボランティアは、おそらく我が国の「勤労奉仕」と同じく、自分の村・自分の町という地域性をもったものになるのであろうが、ボランティアが人間愛・利他主義の精神にもとづくものである限りは、自分の地域社会にしばられたり、これを広がり限界とするものではないであろう。

ところで、ボランティアは、余裕の時間のほんの一時的なものだから、ふつうにはその全存在を利他・愛他にとふりむけて自己犠牲を徹底するようなものではないが、寄付行為などに比しては、より自覚的な利他的人間愛の行為になる。寄付・献金の場合なら、余裕のお金の贈与は、もともと自分のものかどうかということもあるし、自分の行為・存在には、ふれないままである。酒を飲んで繁華街を上機嫌でふらつきながら、「お願いしまーす」という声に、ふと献金しようという気になって、さいふをはたくというような軽いものでありうる。だが、ボランティアは、そういう気まぐれなものではありえない。酔いをちゃんとさまして、その生身を労働する現場にもっていき、おのれの労働そのものを贈与するのである。

自己そのものをささげるといって少々おおげさだが、そういうことである。ふつうには、一時的に余暇をそれにさく程度のものになるが、それでも、自己の存在そのものを、いつとき、それに注ぐのであり、それ相当の自覚がなくてはできないことである。自発的に参加するものとして、しっかりとその意義を承知し、自らの行為とその結果の責任をとるものでなくてはならない。

ただし、受け手の方からいうと、客観的な経済的な価値の点からは、ボランティアという勤労よりは、寄付の方がありがたいという場合がないわけではない。アフリカの旱魃地帯への援助を考えるとしたら、日本から若者が大勢でかけていっても、農業技術者などをのぞく

と、おそらく、あまり有効な仕事はできない。それよりは、かれらが日本で半月働いたお金を現地に送って援助する方がよほど大きな力になる。あるいは、高い率の失業者をかかえるようなところへの援助にしても、そういうことがいえる。ボランティアは、失業者をふやすことになるが、お金での援助ならば、失業も減らせて一石二鳥となる。

とはいえ、贈与するものの姿勢そのものからいうと、やはり、ボランティアは、最高の慈善の一行為であることにはかわりない。経済的効果からは、寄付・献金の方がよい場合でも、ボランティアは、その存在そのものを受け手のところまで運んで、その苦難の状態に付き合おうというのであり、その心意気は、その人間愛は、何ものにもかえがたい価値をもつことであろう。

3. 菩薩行

仏教では、ひとを救うために自分をなげだし、ひとが救われない限り、自分ひとりが悟って仏になるようなことはしないとの願をかけることがある。菩薩は、そういう愛他・利他に徹底した姿勢をもつ存在といわれる。ボランティアは、その姿勢において、この菩薩と等しいものがあるといえる。キリスト教の場合、もっと徹底して組織的に人間愛(隣人愛)にもとづいて病気の人を救済し貧困の人を援助する活動をしてきた。

では、どうして、宗教は、菩薩行をし、ボランティアしようとするのであろうか。他者へのほどこし、布施・喜捨・敵への愛といったものが根本義になっているわけだが、なぜ、そういうことが多くの宗教の根本義となるのであろうか。おそらく、それは、宗教的に求められる境地としての自己の安心安楽がエゴの滅却によって可能になるということとかかわる。ひとの苦の根源は「身のひいき」「己を思う一念」にあるといわれる。「自己の苦しみ」は、「自己」がなくなれば、成立しなくなる。「自分」「うち」のためにというエゴイストであることが苦悩をつくりだす。したがって、苦からの解放は、宗教の求める安楽の境地は、エゴをすてるならば、いともたやすく達成できるのである(困難はこの「すてる」ことにある)。ボランティアは、自分の勤労を他者に贈与し、自己の存在そのものを他者の手段にするものとして、その限りにおいて自分のエゴを滅却しており、愛他の精神をもって行為するということで、宗教的な行に通じるものとなっているのであろう。

ボランティアは、その主要目的は、他者の援助・救済である。エゴの滅却や宗教的な安らぎの境地をめざしたものではない。だが、この他者の救済という目的そのものにも、実は、宗教の方から積極的意味が見いだされるように見受けられる。ボランティアは、自己を滅却しているといったが、あるいは逆のこともいえるのかもしれない。つまり、自己・自我を拡張、拡大していくということである。その愛他の行為において、愛され贈与される他者たちは、もう一人の自分となり、同朋ととらえられていく。愛は、その愛されるものと一体にな

ろうとする運動になり、相手をもう一人の自分とし、その全体を「うち」とする。

仏教では、理想の境地として「無我」とともに、「大我」ということをいう。自分がボランティアし贈与しようという世界は、この自我が大きく開花していった、もうひとつの、むしろ真実の自我、大我となる世界であろう。ボランティアが利他主義において他者に献身しようとするとき、他者は敵どころかもう一人の自分となり自他一如が見い出されることになるのであり、自我は、この他者的世界そのものへと拡大しつつ変様していき、大我的なものをそのとき実現しているのではないか。ボランティアの利他の他者は、無限のかなたへとひろがるコスモスのもとにあった。そういう際限のない大きな自我へとこの小さな自我は、一時的な行為のボランティアにおいてではあるが、拡大することが可能となっているのではないか。他者とひとつになったこの大我は、おそらくは、小我からいうと、小我の滅却された無我・没我そのものでもあろう。

つまりは、ボランティアは、小我というエゴを、滅私の利他行で滅却するのであり、大我という大きな自己を実現していくのである。ボランティアは、こういう姿勢・心構えを強くするに依じて、宗教的な安楽の境地に似たものとなっていくのであろう。

4. 余暇にするささやかな補修

ボランティアは、ふつう余暇の余裕になされる一時的なものである。自分の本来の生活は、別のところにあって、別のところに収入があるから、ボランティアでは無給でやっていけるのである。ということは、ボランティアするものにおいては、本来的な自分は、別のところにあるということである。自分のその生活は、しっかりと別の本業において維持していて、その余裕において、恵まれない人のところへ出掛けているにすぎない。だが、仏教のいう菩薩行は、そういう甘いものではない。おのれの身体(命)を含めすべてを他の者にささげようという姿勢をもった、徹底的に愛他・利他の精神を貫く存在であろう。その点からは、ふつうのボランティア行は、甘いのである。だが、であるからこそ、多くの一般の市民・凡夫が参加できるのもある。真の菩薩行は、仏教者においても、理想・理念であって、現実にもみられるそれは、それには程遠いものになる。そのことは、ボランティアに限ったことではない。ボランティアは、凡人・凡夫にもできる菩薩行である。

エゴの生活そのものは、さしあたりは、そのままであり、資本制的存在のままであるから、週日には、ときには詐欺まがいの仕事をやりながら、休日になると菩薩行としてのボランティアに精を出すというようなことになるのかもしれない。休日にものみ、同僚のエゴイストがゴルフに時間つぶしをしているとき、別行動をとって、ボランティアは、恵まれない人とつきあう姿勢をもつのである。それはそれで、まずはよしとしなくてはならないのであろう。この菩薩行は、その姿勢が持続されていくなれば、しだいに、生活をささえている本業の方

もまきこんで、次第にこれを浄化していく可能性をもつ。

さらに、自分の一応は恵まれた生活をそれとして保護しつづけていくことは、そこへと恵まれないものを高めようとするることになり、ボランティアの受け手を自分と同じエゴをもった存在として承認してかかわるから、それはそれで大切なことになるかもしれない。自己をなげだし赤貧に甘んじながら禁欲的に厳しい生活をしているものは、ボランティアして贈与しようとするとき、おそらくは、受け手にも、そのような生活を求める可能性がでてくる。はては、「ぜいたくな奴らだ」とボランティアをやめてしまうかもしれない。とすれば、恵まれた生活を維持しているものの方が「ぜいたく」なボランティアを維持しやすく、ボランティアしてもらう方も、気兼ねなくこれをしてもらえることもありそうである。

ところで、ボランティアは、地域や困っている人のために尽力し奉仕していこうという自発的な姿勢をもった存在であるが、こういう姿勢をもって活動する人々に、ボランティアとは対立する考えをもっているものがあつた。革命家である。革命への参加は、身を挺してのもので、かれらは、しばしば無報酬で生命までをかける気概をもっていたが、これは、我が国ではボランティアとはいわない。足元のささやかな改良をもつてはじめようというボランティアと、国家などの全体の変革を第一とする革命家は、後者が健在だったころの我が国では、肌があわないように見えた。革命家は、ボランティアを批判して、国家全体を改革して根本的なところから建てなおして貧者等の救済をはからねばならないのに、ボランティアは、貧困を生み出す元凶としての資本主義体制をそのままにしておいて、この体制のほころびのみをとりつくろおうという、保守主義、体制擁護派でしかないと突き放していた(昨今は、革命派がなくなり、あるいはボランティア化してきて、ボランティアが、一部では政治的となりつつある)。

ボランティア派からいうと、いつになるか分からない夢の理想国家をまっていたのでは、いまの困窮者は、すこしも救われぬし、ときには餓死をまつのみとなりかねないのである。革命派は「それこそは現支配者の非人道性を示すもので、責任は国家権力にある」というが、いま困っている困窮者を救済しようというのなら、いま救済することに力を注ぐべきではないかとボランティア派は考える。それに理想国家というものがどれだけ理想的なことを実現できるものかあてにならないのであって、そんな幻想につきあつてなどおれぬ、ここで今ただちに現実的な救済に尽力すべきだとボランティアをすすめた(革命派も、「援農」の勤労奉仕をしたり、貧困地域での「セトルメント」でボランティア的な活動をするこゝろはあつた)。

全体を背負うとはいえ国家の役割は限られていて、中世のひとびとが神に期待したような万能のちからを国家にいただくのは幻想でしかないともいえる。自立した個人は、国家等全体からの干渉をきらい、可能なかぎり個として自律的に生きていこうとする。各人にできることは各人がはじめていく必要があるという個別主義・非全体主義の立場をとるものは、個別

的なところからはじめていくボランティア的な道をとることになる。国家などの全体にすべての解決策を見い出していくような全体主義は、個別・個人をないがしろにし、これを抑圧・強制する非人間的なものに墮す危険性があるとボランティア派・民主派は考える。

もちろん、ボランティア派も、国家などの全体がしっかりとして福祉政策を充実していくことを求めることであろう。なにも全体を無視したり、この役割を軽視するものではない。ただ、それにすべてを負わせるのではなく、全体にはなかなかできないことで、各人において可能なことは、各人においてははじめようというものである。

ボランティアは、あてにならない革命をまつのではなく、確かな一歩を求めるのであるが、その救済の確実さということでは、寄付などと比べてもすぐれたものになっている。直接に受け手に働きかけるものとして、贈与は確実である。寄付・献金は、ときに、「どこに行ったのやら」と、集められたお金が行方不明になることもあるが、ボランティアは、その点、贈与するもの自身が直接に相手のところへ出向くのであるから、確かさがある。

ところで、家族の「うち」での無償の献身を「そと」でもということ、宗教にあり、ボランティアにあり、共産主義にある。共産主義は、「うち」に一般的な原理(私的所有の廃棄・全体への無私の献身・無償の贈与・無条件的な生活保障)を「そと」の社会にまで広げてこれを全体化しようとした。宗教もしばしばそうしようとする。だが、その試みは前者のばあい、近代社会においては、ことごとく失敗し、宗教のばあい、持続できたとしても、ごく狭い疑似家族的な信仰者のなかでのことにとどまってきた。これに対して、ボランティアは、そとはそととして資本制を保持しながら、資本制的な関係ではうまく対応できないところに限って、「うち」的な無償の献身を行なう。福祉とか公共的な諸問題について、公的機関の手のとどかないところを中心にして、これをボランティアでやろうというのである。ボランティアは、そとの社会で、火急の手助けの必要なひとびとに目を向けて、本来的にはうちに注がれている愛を、このそとのあかの他人に対してそそぐ。共産主義や一部の宗教の試みとちがって、これのみが現代社会では生き延び拡大していくものとなっている。

5. ボランティアの資本制への対立と補完

ボランティアは、自立した個人とその集団を前提にし、自分にとってももとは無縁のあかの他人になされる勤労の贈与である。それは、資本制の基礎としての商品関係、つまり、無縁の疎遠な人々が商品を等価交換し、自己の所有する労働力を賃金と交換する関係と同じ、近代的な自立した個人同士の社会関係のもとに立っているのだといえる。その本来的には、等価交換されるべき間柄であり、自分の労働には賃金が支払われる関係になるところにおいて、それを前提におきつつ、ボランティアは、これを無料とし、贈与するのである。資本制をふまえながらも、これをささえる等価交換・私的所有のエゴイズムとは、その活動形態に

においては、まるで反対となる。等価交換原理を無視して、利他的に自己の労働力を贈与するのである。無料でサービスするのである。商売は、そこではなりたない。利益を生み出すマネーゲームが資本制の大原理だろうが、利益をうむどころか、等価交換すらもしないで、いうなら商品を無料でくばるのであって、その形式は、資本制の原理的な運動に対立する。資本家は、同じ生産品に関しては、とうてい太刀打ちできず、そのボランティアを目のかたきにすることであろう。

資本制の労働は、賃金の支払いを大前提にする。有給であるから、働くのである。だが、ボランティアは、本来的に「無給」で、「無給ボランティア unpaid volunteer」がボランティアである。「有給ボランティア paid volunteer」は、本来的には、矛盾概念である。かりにボランティアが当の社会に全般化したとすると、有給の労働者は、無給のボランティアにとってかわられ、大量の失業者をボランティアは生み出し、賃金労働者を駆逐することになるだろう。

ボランティアは、しかしながら資本制をつぶそうという運動ではない。資本制的私的所有を拒否して、ボランティア的勤労の贈与によって理想社会をつくろうというような運動はある。共産主義は、「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という社会をめざすのであれば、その労働に応じてという等価交換の社会ではない。自分にできる自由な労働を全体にささげる社会である。共産主義の理想は、等価交換の打算的な商品社会を廃棄したボランティア的贈与の精神の生きる社会であろう。それは、夢のまた夢でしかないが、現にこれをこころみているものが宗教的集団には存在する。いな、社会の基本単位をなす小集団としての「家族」「うち」では、それは、むかしから実行されてきたことであつた。親は、うちのために、全ての勤労とその成果を贈与しつづけているのである(家庭での報われない家事労働を「シャドウ ワーク」ということがあるが、給料を入れることも同じで、評価されることのあまりない「シャドウ ドウネーション」(陰の献金)である)。むくわれることの少ないこの「ボランティア」的強制労働に精魂つかいはたしているのが我が国の家庭(親)の一般的なすがたである。

だが、そういう全般化したボランティア的贈与は、もはや、ボランティアとはいわない。うちのためにいくら贈与しても、それは、ボランティアや寄付・献金の範疇にはいれられない。ボランティアは、あくまでも、そとの、あかの他人に対してなされ、かつ、共産主義的に全般化しているのではだめで、その生活のかては別のところに確保していて、そのほんの余暇に一時的になされる無償労働にとどまるのが原則である。つまり、資本制の等価交換なり、有給の勤労というものに生活の基礎はしっかりもっていて、これを大前提にして、そのあとに生じる私的な余裕・余暇にのみ、この資本制的な営みをはなれて、(うちでは原則である)贈与的な行為にしようというのがボランティアである。資本制そのものを侵すような

ところにまでボランティア的贈与の運動はふみこまないのであって、そこまでふみこんだものは、特殊な「うち」に閉鎖した宗教集団とか共産主義になり、もはや、それは一般的な意味でのボランティアであることをやめることになる。「過ぎたるは、及ばざるがごとし」である。

生活のささえ・糧をマネーゲームの資本制によってえているのがボランティアであれば、ボランティアは、貧困階層や貧困な国々を収奪する富裕な階級・国家に属する者の一活動になる場合もあるわけである。エゴイズムの原理にしたがって、資本には「倫理」など無用とばかりに、私的所有の拡大にいそしむ日々をおくりながら、その生活の余暇に、これとはまったく別の愛他・利他の原理にもとづく運動としてのボランティアに参加するということがある。ボランティアは、極論すれば、ときには、つみほろぼしであり、非人間的な日常からのひとときの解放になるのでもあろう。

ボランティアは、資本制的な商売のそとにある慈善、無給の勤労奉仕であるが、資本制自体を否定するものではない。ボランティアする者は資本制において恵まれている存在で、余裕があり、だから贈与も可能となっているのである。資本主義体制そのものについては、これを打倒しなくてはならないなどは考えないのがふつうである。これまでのボランティアは、そうだった。それは、体制そのものを根源的なところから改革していくものではなく、現状の資本制のほころびをつくろうだけである。資本主義体制を否定しようとする革命派からは、ボランティアは、資本制の擁護者であり反革命的なものにとらえられ、その主観的な慈善は客観的には偽善だ、資本主義的収奪をかげで支えるものだと批判的に見下されることがあった。

現状のほころびの単なる補修にのみ自分たちの行為を限定したものであったとしたら、たしかにボランティアは、保守的なものにとどまる。矛盾・ほころびの根源を追求し、これを根底からあらためていくことにもかかわっていく必要がある。だが、ボランティアが矛盾の糊塗、生じたほころびの補修としてあるというとらえ方は、おそらく一面的であろう。逆に、「はじめにボランティアありき」といわれることがある。資本制があって、それから生じた否定的な部分の補修をボランティアがするのではなく、反対に、資本制がなお取り組みえない創造的なものに、まずボランティアが先駆的にとりくむということである。消防など、緊急のことがらにまずはボランティアで行なわれはじめ、専門化していったというわけである。そういうボランティアは、たしかに資本制の「しりぬぐい」ではなかったのである。ただし、それもまた、資本制を批判も否定もするものではなかった。

資本制の「しりぬぐい」になるにせよ、これに創造的に先駆したものとなるにせよ、ボランティアが請け負うものは、現在の資本制において、儲けになる仕事として「企業化」することが困難なものになる。その緊急不可欠なものは、たとえば他国の侵略を排撃することと

か、身寄りのない老人の世話とかは、国や自治体が背負う仕組みになっているが、そうでないものの一部は、予算も人員も制限されているのだから、どうしても公的機関の手は回り切らないことになる。そこでは、地縁血縁の援助の希薄化していつている現代においては、ボランティアあたりがいちばん期待される存在となってくるのである。

6. 勤労尊重の精神

恵まれている階級・階層の者は、労働者・勤労市民を蔑視することがある。恵まれないものへの援助が寄付・献金である場合、贈与者自身の存在は、「下賤な」労働者・農民とは区別して高貴なままであることができる。だが、ボランティアは、そういう姿勢を拒否する。余裕のある者たちが、その存在そのものを「下賤なところ」までおろして、自らが、労働をしようと意欲をもやすのである。当然、労働に対する蔑視はなくなっており、贈与する価値あるものとして自身の労働をささげていくのである。

労働に対する蔑視は、労働力を「売る」ということ、賃金を獲得するということにひとつはあるが、それ以上に、労働という肉体的な活動そのものへ向けられていた。ボランティアでは、「売る」という「下賤な」ことは、「無給」だから当然ないのだが、労働という活動そのものを自らが引き受けるのであり、しかも、しばしば単純な肉体労働にかかわることが多く、自分の存在をそれに投入していく価値があるとみなしているのであって、労働への蔑視は払拭されているということができる。

では、ボランティアは、常に労働者・勤労者の歓迎するところとなるのかということ、そうでもない。その労働尊重の姿勢はいいのだが、場合によると、ボランティア労働は、労働者にとってのとんでもない競争相手となるからである。労働者の方は、賃金を要求するが、ボランティアは、これをしないのである。それは、労働者にはかぎらない。個別的には資本の側にとっても、問題となりうることである。大震災で町の機能が停止したとき、地元の商店が開店するまでは、ボランティアとそれによる救援物資の供給は必要だが、これらが開店できるようになると、援助をひかえなくては商店をおびやかす存在になってしまう。いくら商店が値引きしても、ボランティアの方は無料なのだから、こちらにお客さんは集まる。

ところで、賃金労働者は、その具体的な労働の内容が気に入ったものであることを問題にしなくはないが、主たる関心は、当然、賃金の高さにある。いくら気に入った仕事内容であっても、賃金が極端に低いものは、選ばれない。逆に、人気のない仕事であっても、賃金を上げれば、ひとは、あつまる。これに対してボランティアの場合は、その仕事内容つまり具体的有用労働そのものに主要な関心があり、自分にそれが出来そうで、その意義が大きいと自覚できれば、これに参加していくことになる。

賃金は、時間単位ではかられる抽象的な労働の面から出されるのだが、ボランティアは、

無給の奉仕であって、賃金は問題外だから、そういう抽象的な労働、つまり人間に可能な活動ならなんでもよい、仕事内容を問わないという労働一般には、あまり関心が向かないことになろう。もちろん、ボランティアは、余裕の時間に一時的に参加するものとして、何時間何日間参加するというかたちで、抽象的労働の計測と同じ計測によることに、ふつうにはなる。それが不要のときは、特定の具体的な労働内容の贈与として、その特定の生産物なりサービスの成果そのものによって測られるはずである。「何時間」ではなく、「何の」「どういふ」（具体的有用労働）ボランティアへの参加かが問題となる。労働への充実感は、なんといっても具体的な有用な労働のもとに成立するものであり、ボランティアは、それをしばしば求めてこれに参加している。自由な労働が人類の永遠の楽しみとなり充実となるのは、そして、その労働をもって社会的参加を果たして充実を感じることができるのは、その有用具体的労働の形態のもとでのことである。ボランティアは、この永遠の具体的労働を求めて、それを贈与するのである。

ボランティアは、無給ということで、資本制の商品の等価交換原理、賃金と労働力の交換から離れているわけだが、その点では資本制的原理のそとに立っていて、これをそとから批判的に見ることが可能な立場にあるのだともいえる。ボランティアは、利他主義であって、資本制における無慈悲なエゴイズムに批判的な眼をもつことが可能なのだが、さらに、その等価交換原理や賃金労働の原理に対しても、距離をとっているのである。これは、何といっても基本的には資本への批判であるが、場合によっては、労働する側への、いな人間そのものへの批判ともなる。災害復旧で土木業の労働者がいやいや仕事をしているとき、まずは、無報酬のボランティアは不可解で物好きとうつつだろうが、やがては、自分たちへのいましめともなっていくことであろう。あるいは、どんなボランティアであれ、ボランティアが無報酬で働こうとしているのを見るならば、人間にとっての労働の意味・意義を再確認させられ、人間はホモ・ルーデンス(遊び人)であるよりは、ホモ・ファーベル(仕事人)であるべきことを反省させられるかもしれない。

ものごとの批判は、きびしい真の批判となるには、外的批判となる必要がある。もちろん内的批判も自らに死刑の判決をいいわたす(つまり自決・自殺)ような厳しいものに時にはなるが、ふつうには、自己批判は、甘くなり弁解がましくなってしまう。資本制の批判も、資本制の担い手自身からの批判では、甘くなって、これを根底から廃止すべきだというようなラディカルなものにはならない。そとから、その原理に浸っていない立場から批判するときには、遠慮はいらないから、真の徹底した批判となりうる。ボランティアは、そういう意味では、資本制のラディカルな批判ができるのである。しかし、生活は、資本制をよりどころとして、その恵みをうけ余裕をもらっていて、恵まれていない者にその余裕部分を贈与するということでは、ラディカルさには、少しかげりが出てくることになるかもしれない。

7. 自由なボランティアは、強制する資本制にはかなわない

ボランティアは、無私の愛からする尊い行為である。だが、その広がり、なかなか社会全体、全員をまきこむところまではいかない。慈愛からなる任意のものとして、エゴイストは、それへの参加を当然拒否する。祖国防衛がボランティア的なものに、義勇兵(volunteer)まかせになったとしたら、他人を利用して自己を守ることにたけているエゴイストは、参加しないであろう。犠牲になるのは、善人のみとなる。生き残る悪人のために善人が命をかけるのである。こういう場合、やはり、国家などの全体は、悪人も参加できるように、防衛の義務を課し、強制する必要がある。

商品の等価交換にもとづく資本制は、その点では、ボランティアとちがい、幅広い参加を実現する。悪人と善人を一切差別することなく、参加させる。ボランティアのばあい、悪人・エゴイストは、その慈善の活動には、参加しない。だが、その贈与のわけまえには、むしろ、他者を押しつけてもこれにあずかろうとすることであろう。ボランティアするものは、そういう悪人には不快感をいだき、できれば差別してやりたいと思うこともでてこよう。資本制は、その点、等価の交換なのだから、相手が悪人であろうと、損したという気にはならなくてよい。物(商品)を介して悪魔とでもつきあえるのが資本制商品社会である。第一、この制度は、ボランティア精神からは決して働かないであろう悪人やエゴイストを労働にかりたてさせる。各人好きなようにという自由社会であるから、生きていくには、悪人も自分で生活の手段を考えねばならない。ひとのもっている物・商品を自分のものにするには、交換に参加する必要がある、そのためには、他人のほしがる商品をいやでもつくらねばならない。あるいは、欲望(商品・サービスの購入)を満たすために、高賃金をもとめて、みんなのいやがる仕事ですら、エゴイストは引き受けることであろう。ボランティアでは考えられないことである。

社会主義社会は、国民全員がボランティア的な精神にあふれていたのだとしたら、失敗しなかったかもしれない。だが、現実には、働かなくても分け前だけは同じようにもらえるとすることでは、なまけ者・エゴイスト・悪人を優遇する制度となって、ボランティア精神にあふれてみんなのためにと真剣に働く者はしだいに馬鹿らしくなったのであった。悪人のはいりこまない自分の家庭とか、特殊な宗教的団体のみが、慈愛にみちたボランティア的な贈与のもとにその営みを続けることが可能なのである。

「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という共産主義的なユートピアは、これまでの「家庭」では、割合うまくいっている。しかし、他人同士の寄り合いである社会においては、社会主義の理想に燃え、宗教的な共同社会をという理想にもえて、その組織を共産的、共同消費的な形にした場合、とんでもないものになっていくのが常のようである。みんなが

天使であるあいだはいいのだが、悪魔がはいりこむと、小さな宗教集団であっても破廉恥になってしまい、その持続は困難になるように見受けられる。エゴイスト・悪人の少なくない現代社会のもとで、社会主義的な国家をつくろうなどということは、夢のまた夢になるのであろう。

これに対して、資本制は、天使であろうと悪魔であろうと参加可能で、悪魔すらも一生懸命に働かせる包容力の大きい制度ではある。というより、この制度は、もともとエゴイストを前提にしてたてられているのである。エゴイストたちが、「自分は決して損なことはしないぞ」と思いつつ、他人の私有物を入手することをみたす形式として、等価交換の商品社会をつくり出しているのである。等価交換とは、両方とも損をしないで(同じ労働量の交換)、かつ、必要とするものは入手できて(異なった使用価値の交換・獲得)、両方とも得をすることができるといふ制度である。ということで、私的所有・等価交換からなる資本制には、どんなエゴイストでも参加できるのであり、むしろ、かれらを、その私的所有と欲望充足のために、一途な活動にかりたてて、しばしば、他人のために人一倍役立つという彼等自身の思いもしないことを結果する。本来、人間愛にあふれた、それこそ天使のような者でないと長くは付き合いきれない病人の世話であっても、「医者には金になる」というだけで、「ずる賢いエゴイスト」と評される若者をして、すすんでこの仕事に従事させ、やがて、天使とまではいかないとしても、聖人と崇められるような存在にまで変身させさせる。

ボランティア的な精神、自発性とか贈与は、人類の進歩や社会の充実ということでも、「強制」や「私的所有」に比して、かりたてるところが小さいようである。義務・強制とちがって、自分で自発的にということだけになると、どうしても、自分を甘えさせてしまう。もちろん、自発性があると、やる気があると、そのひとつの通常力は十分に発揮される。だが、それにとどまる。障害・妨害が出てくると自発性は消えがちとなる。義務・強制にでもらわなくてはならない。ひとには、余裕があってもっと出せる能力がそなわっているのであるが、それも自発性だけでは引き出しにくい。そこから強制され、あるいは、はげまされると、陸上や水泳の大会で競争させられる時がそうであるが、ひとは、一人のときとちがって、その有する能力をかなりのばせる。外的な強制は、人類社会の全体的な充実や進歩のためには大切になりそうである。

さらに、私的所有も、ひとを、それも自発的に社会貢献にと駆り立てる。「贈与します」では、仕事への厳格さは求めにくくなるが、「どうか高価に売れますように」という商品生産では、社会の求めに真剣にならざるをえず、社会貢献するつもりはなくても、そう自らを強制してしまう。また、「働けば、お金になる」という、私的所有の「お金」の報奨ほど、ひとを魅するものはない。汚泥処理にボランティアを募っても、ひとは集まりにくいだが、これに高額賃金をもってするならば、いくらでもひとは集まる。名誉の勲章は、万能のお金の

前ではかぶとをぬがざるをえないのである。

(初出論文名 「ボランティアの社会的意味論—現代の菩薩行の功罪—」
『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 通巻 8 号 平成 12 年 8 月)

第六章 使命—全体に生きる個—

1. 使命の再認識

現代社会は、ひとつをつみこむさまざまな社会的組織をもち、多彩な生産・創造の活動にみちあふれている。だが、この豊かな創造性と社会性のなかにながら、むしろ個人は、それらのことから疎外されていく傾向にある。近年わが国でも盛んになっているボランティアは、この社会性を求め、働くことの喜びをもとめた個人の自発的な活動になるが、創造性や社会性をしっかりとらえたわれわれの活動ということでは、その自覚の一形態として、「使命」というものがある。

ボランティアは、つい最近のことばになるが、「使命」は、それに比べると相当の歴史がある。昨今、「使命に生きる」といったことばを耳にすることは少なくなったが、それでも、個人の社会的な活動について、「困難だが、これは、自分に与えられた使命なのだから」と決意表明をして、ファイトを燃やすひとを見ることができる。本来、ひとは、自分の属する社会に根づいた生き方をし、創造的な活動に生きたいという願いをもっており、その創造性や社会性を満たす「使命」のようなものをもう少し意識し、大切にしていける必要があるではないか。

最近のわが国の若者は、労働意欲が低くなり、フリーターをしながら、気ままに生きていくものがふえている。しかし、はたして、かれらは、本当にそれでよいと思っているのであろうか。自分の存在・いのちをかけるようなものが見出せないから、そうしているにすぎないのではないか。現在進行中の情報革命は、これまでのような古典的な労働・仕事というものを不要にしつつあり、さしあたり、このままの体制では、フリーターぐらいしかないという大失業時代になりかねない勢いだが、長い目で見れば、難行苦行の労働からまもなく解放されようとしているということであろう。それは、人類のもっている多彩な能力の開放となり、創造性に富んださまざまな活動の展開が可能になることである。単に労働から解放されたというのみでは、消極的には、趣味に、遊びに生きるホモ・ルーデンスになるだけであろうが、ひとの生きがいは、もっと創造的で社会的な意義の見出されるようなものでないと、十分には満たされないのではないか。古典的な労働をふくみつつ、それらより広範な活動についていわれる「使命」は、この社会の今後を考えていくためにも、再認識されておく必要がある。以下に、すこしこの「使命」を分析してみたいと思う。

さて、「使命」とは、なにになるのか、簡単に定義することからはじめよう。「教師の使命」とか「消防団の使命」というが、それらは、かれらの所属する社会から与えられ求められている「教育」や「防災」の任であり、そのことばからは、身のひきしまるような尊い務め、

責務というようなものが感じられることであろう。あるいは、使命といえば、ルターの、世俗の職業を「使命」ととらえたことが想起されるが、この使命は、神がこの世のひとびとに命じ求めている、各人の尊い務めであった。ということであれば、使命は、さしあたり、「帰属する全体やその命令者から求められている尊い務め」ぐらいに定義しておいてよいであろうか。

この使命は、一方では、至高の存在者とか社会全体から、それに帰属している者に命令され与えられるものとして所与的であり、あるいは、命令する者にとっての手段となるものであり、所与・手段等の特徴において捉えられる。われわれの漢字の「使・命」も、使いとして命じられるということで、使命の根本的な所与性・手段性をしめしている。

しかし、他方では、使命は、これを担うもの自身からいうと、生きがいそのものであり、ひとは、この崇高な務めに生きることができれば本望であろう。これには、いのちをかけることもいとわないほどに情熱をかたむけ、能動的自発的となる。プロテスタントが世俗の職業を「使命」ととらえたことの、西洋の資本制にとっての意味を問題にしたウェーバー（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）は、使命を「自己目的 Selbstzweck」と特徴づけているが¹⁾、使命は、たんなる手段にとどまるものではなくて、これそのものが生きがいであり、ひとをひきつける目的となるものでもある。

この受動的手段的側面と能動的目的的側面の二面からなる使命について、まずは、その受動面、課題の所与性あたりから、使命の諸様相を見ていくこととしたい。

2. 課題の所与性

ところで、Mission（使命）は、「使節」「伝道」という意味でもある。伝道も使節も特定の課題・目的がしっかりと与えられてはじめて、そういうものになりうる。それは、自分が勝手に作り出すものではなく、自らの属する全体とか組織の命令者から与えられるものである。

ルターは、世俗の職業を「使命」ととらえたが、それは、教会の聖職者と同じく、神から与えられた務めということであった。それまでは、神の使い、神からの使命(vocatio=Beruf)は、聖職者を特徴づけるものであったが、ルターは、万人が神のもとでは同じだと捉え、聖職者を特別視することをやめた。そのために、世俗の職業も、神からのものに、神からの「使命 Beruf」と捉え直されることになった。ウェーバーによると、Beruf ということばを世俗の仕事そのものの意味に使ったのは、このルターが最初だという²⁾。教会の聖職が使命であるのは、神の使いであり、神の思し召しにしたがっての所与の務めであったからだが、使命のこのありかたは、ルターでも同じであって、世俗の職業としての使命においても、それが、神から与えられたものという根本性格をもっていたことはいままでもない。ルターの職業＝

使命はもちろん、一般的にいつて、使命は、与えられるもので、使いであり、命じられ求められているのだという所与性・受動性が根本に存在しているといえよう。

では、かりに、はじめから自発的にすべてをとりしきるばあいは、つまり、課題が所与ではなく、自分のたてるもののばあい、それは、使命にはならないのであろうか。好きな仕事、たとえば「花屋」に生きがいを感じ、「これこそ、わが天職・使命だ」と、自分が勝手に使命と思ひ込むようなことがあろう。自分で課題・務めを見だし、自分で自分に命令してこれを担わせているのである。それでも、花屋であることが自分に「うってつけの仕事」「適職」だというのみではなく、これを「使命」と感じるには、「これこそ、天の与えたもの」と、神とか花の精の女王あたりからの自分に託された命令・求められた務めととらえるところがなくてはならないのではないか。

日本語の「使・命」には、「使い」「命令」が含まれていて、われわれは、なんらかの形で、使われ命令されているという被授与というか所与・受動性を、このことばには感じているのではないか。使命の意味を含んでいるドイツ語には、Sendung, Mission, Beruf, Aufgabe, Bestimmung 等があるようだが、Mission はいうまでもなく Sendung も、「派遣」という意味でもあり、使われ送られるのだとの被授与性・受動性がそのもとにはありそうである。ルターの例の Beruf は、いまでは主として「職業」の意味でつかわれるようで、ウェーバーの『Wissenschaft als Beruf (職業としての学問)』にしても『Politik als Beruf (職業としての政治)』にしても、その話の内容から見て、その「Beruf」は、とうてい「使命」ではなく、純然とした「職業」の意味に使われているように思われるが、もともとは、そのことばを見ると、Ruf は「呼び声」「呼び出し」であり、呼びかけられ命じられてというような授与・所与性格をもつ。

そのことは、Bestimmung にしても同じで、Stimme は、「声」で、命令に「合わせる stimmen」というような意味があったのだろう。Aufgabe も、geben(与える)によるものとして授与・所与性をうかがわせる。しかし、フィヒテ(『全知識学の基礎』)は、その自我の哲学を論じる際、Aufgabe をいうが、所与性をしめす外からの触発としての「Anstoss (障碍)」に対置して、自己自身によって定立されるものを「Aufgabe (課題)」と表現している³⁾。外からの所与の否定として Aufgabe(課題)をとらえている。また、ヘーゲル(『大論理学』)は、Bestimmung(規定=使命)を論じるが、これを、他から規定された受動的否定的な「規定性 Bestimmtheit」に対置して能動的「肯定的」なものとし、さらに、他の影響下にある「向他有」と対立した、自己自身に即しての「即自有」とも規定して⁴⁾ ものの自立的本性ととらえ、この規定=使命の一層具体化した能動的な範疇として「当為 Sollen」をあげて、むしろ授与・所与性、受動性とは反対の意味をもたせている。さかのぼって、カント(『人間歴史の憶測的起源』『人間学』)は、人間は動物として「神の声 Stimme」「自然の声 Ruf」⁵⁾ にしたがっての「自然的な

使命 Bestimmung」⁶⁾ に生きていたが、「理性」にめざめるとともに、これからはなれ自立し、「人間の使命 Bestimmung」は、自らの「理性によって使命づけ bestimmen られて」立てられることになったという⁷⁾。この人間の理性的使命のもとでは、Bestimmung は、神の声 (Stimme) によるのではなく、自己自身が自らの理性の声によって自己立法し自己に命令するものになった (初期フィヒテも、同じように、「理性的存在」の「自己との完全な一致」⁸⁾ を理想とし、それへと努力していくことを人間の使命としている)。カントやヘーゲルにみられる Bestimmung (使命) のもとでは、使命は、自己が自己自身に課題を設定し自己に命令する形になり、外から与えられるものとしての所与性をしりぞけるものとなっている。

われわれ日本人は、自立した個として自己立法的であるよりは、周囲に依存し、他から命令されて動くことを好むようなところがある。花屋さんが勝手に自分の「使命」をいうときにも、使命というからには、やはり、なにもものかに「そう求められ命令されている」と花屋さん自身が捉えているのではないかと (筆者などには) 想像されるが、それは、根深いわれわれの依存的心性が、もともとの「使・命」の受動性・授与性を消し去ることを拒んでいるからなのであろうか。その点 Bestimmung として使命をヘーゲルらがいうばあい、始源的には授与・所与だったとしても、現今においては、もともとのところから離れ自立していて、自己の Bestimmung (使命) は、自己の本性 (Bestimmung) そのもので、すべて自分で、はじめからとりしきるものになり、自立者の使命は、その課題・命令も外からではなく、自己自身において、自己立法的に立てるものになりうるのだと誇っているように見える。とすれば、使命は、授与性・所与性のない端的な自発性にもとづく場合も、つまり、もっぱら自分で自分にそう命じている場合にも、使命として成立することになる。しかし、どうも、筆者には、使命の根源には、他から求められ命じられてという (被) 授与性がなくてはならないように感じられてならない。

フィヒテは、「使命 Bestimmung」というテーマを追い続けていて、『学者の使命』とか『人間の使命』などの論著をもつが、初期のばあいは、カントと同じく、ひとの理性的な自己立法・自律に使命の中心をおいていた。だが、後には、超越的なものからの使命に重点をおくようになる。理性の自己同一・自由をいいつつも、その背後に無限理性としての超越的な父なる神がいわれることになり、この父に、ひとの崇高な使命は「委託されている anvertraut ist」⁹⁾ と言うようになっていく。使命には、本来、命じられ委託されてというような契機があるからなのかもしれない。もっとも、フィヒテの場合は、後になるほど宗教的になっていく、これが使命についての理解を変えているのであって、使命そのものが本来そうだからだというのは牽強附会にならうか。

日本語の「使命」とドイツ語の「Bestimmung」には、かなりのちがいがあ。われわれの「使命」は、われわれ日本人の生き方の特性が凝縮されているのだし、ヘーゲルらの

「Bestimmung」には、かれらの独立心にとんだ生き方がおのずから反映されているのであろう。自然科学の方では、どの国のことばによろうとも、その対象はおおむね同一で議論は容易になりつつ。しかし、人間にかかわるものが対象のばあい、その生き方は多様であり、各国語各様の切り取り方で言語化されるから、「使命」をそのまま「Bestimmung」として論じると、あやまりになる可能性が大きい。「使命」は「使命」であって、これを「Bestimmung」として論じるのは、日本人の頭髪を問題にしているとき、ドイツ人の口ひげをもって論じるようなもので、注意が必要であろう。Bestimmungに無前提・自立性の特徴があるからといって、われわれの「使命」もそうだと安易にいつてはならないのである。なお、ヘーゲルは、Bestimmungということばをよく使うが、それを「使命」と翻訳して適訳となる個所は、おそらく一割にもみたくないのではないかと思う（ほとんどは「規定」という意味での使用になる）。

3. 役割の分担とその重み

使命は、一般的には、一人してはじまるものではない。典型的には、全体をつかさどる命令者があって、これが各人の分担を見定め、その分担を適任者に求め命令するところに成立する。使命をになうものは、その与えられた特定の課題を分担し、全体的な営みの中でのひとつの歯車になるのである。使命では、使い手の一部分になり、大目的をもつ全体の単なる手段になりきることが求められている。自身で、勝手に使命を感じるというばあいでも、花屋であることに使命を見いだしているものは、当の社会なり天や神から、全体のなかでの有機的な小部分の役割を分担するようにと、その仕事に選ばれて指名されていると、自らにおいて、役割分担の想定をしているのではないか。

しかし、その者の帰属する組織の命令者からの任務分担の命令があったからといって、ただちにそれで使命になるわけではない。見当違いの、納得できない命令は、「使い」「職務」としてこれに従うとしても、それを「使命」と捉えることはできないであろう。使命感をもつものは、これを生きがいとし、尽力するにあたいするものとして主体的にとりくむのであるから、使命では、そうなれるような適切な、誇らしい課題の与えられることが前提になる。その課題・務めは、全体にとって重要で不可欠なものであって、だれかが担う必要があるということとともに、それを担うものが適切に選びだされ、当人がその持ち前の能力を十分に生かすようなものになっていなくてはならない。

ところで、「使命」ということばのひびきのうちには、たんなるこどもの使いではない重みがある。厳粛な重みを感じるのは、ひとつには、その分担する部分は、命令者、あるいは全体にとって、重大な務めで、それにことの命運がかかっていたりするからであろう。もうひとつの理由は、しばしば、使命を担うもの自身にとり、全力をつくさなくては達成されないような、高度な課題が与えられることにある。Aufgabe(使命)は、「課題」「宿題」であ

るが、宿題として与えられるのは、ひとりのできる能力ぎりぎりの高度なものになる。

ヘーゲルは、Bestimmung(規定=使命)に対応したその外面を「限界 Grenze」としている¹⁰⁾。ぎりぎりの背伸びした限界において、そのものの高い固有の本性(規定=使命)は成立する。

「地域での大学の使命」は、地域のひとから求められ、期待されているものだが、しかし、その地域の商店などがつよく期待しているであろう「人集め」は、その地域のひとも大学の「効用」とか「効果」等とはいっても、「使命」とはいわない。それは、人集めがたんに本来の仕事・務めでないということによるだけではなく、「使命」は本来的に尊いもの崇高なものとの思いがあるからでもあろう。大学の使命のもとには、それ固有の、他にかえがたい崇高な能力の発揮が、つまりは知的文化的貢献が、そこに期待され求められているということであろう。

4. 使命の犠牲的性格

使命には、悲壮な気分のまといつくことがある。神の使命をになう者は、その使いとして身をつつしみ神の道具・奴隷になることを引き受けているのである。あるいは、異国・異教のもとへと伝道の旅に出るものは、神の武器となってよろこんでその犠牲になろうと決意しているのである。使命を担うものは、これを命じるものの忠実な使いであり、その大目的のための一手段になりきるのである。

ウェーバーが使命を「自己目的」と規定するように、使命は、たしかに生きがいであり、それ自体が目的となる面をもつが、本源的には、使いであり、手段であろう。ルターのいう世俗の職業=使命にしても自己目的ではありえなかった。各人の使命は、あくまでも神の手段にとどまる。神の大目的そのものは、当人たちには、かならずしもさだかではないとしても、その職業は、使命としては、神の全体的な配慮のもとにその神聖な手段になっているのだと自覚されていたことであろう。プロテスタントの敬虔な信者たちは、その世俗の苦しい仕事が、神の栄光をしめす一つのあかしとなり、はかないにしても一本のろうそくとして神の役にたつことに、その犠牲に喜びを見い出していたことであろう。

自分の共同体のために、自分の祖国の防衛のために、英雄たちは使命感に燃えて雄々しくそのいのちをささげていった。だが、そこにある冷厳な事実の一面は、そういう全体のための犠牲・手段として虫けらのように死んでいったということである。使命の犠牲的側面は、ここにきわまる。

使命では、自己犠牲が求められるのだが、それはいやいやながらというよりも、むしろ、喜んで引き受けるものになる。全体をつかさどり、高所から自己を評価し見守ってくれる命令者からの、自己に与えられた尊い命令として、しばしば、ありがたくいただくものになる。崇高な任にふさわしい者として選びだされているのである。帰属する全体から重要な個と位

置づけられ、大きな期待がよせられているのである。自分の能力一杯の仕事としては、困難のともなう苦しいものになることが予想されるが、それもやりがいとして、勇んでひきうけることになる。

喜んで自己犠牲を受け入れる使命、これは、ボランティアの場合も同じことであろう。他者のために無報酬で献身しようというボランティアは、端的に愛他の自己犠牲精神からなりたっている。ボランティアという英語には、志願兵という意味もある。祖国防衛のボランティアは、それを使命ともすることでであろう。ただ、どこまでも自発性を尊ぶボランティアと違って、使命では、所属の全体とかその支配者から命令されているという意識がどこかにある。

5. 命令するものへの一体化

世界よりも重い自分のいのちすらも、ばあいによっては捨てようという気概が使命感をもつもののもとにはある。使命を命じる全体なり存在は、自分自身よりも、一層大切なものになっているのであろう。共同体などの自己の属する全体が、尊厳を有するかけがえのないものと思っているから、かれは、自己をそのための捨て石にできるのである。自己の生を犠牲にしてまでつくすに値するものであるかどうかは、ほかから見ると問題だったとしても、当人の価値判断においては、いのちがけで守るべき至高の価値があると信じきっているのであり、その命令にも全幅の信をおいているのである。また、使命をあたえた方も、その担い手にふさわしいと選びあげているのであるから、これを大いに信頼しているのであって、相互のあいだにはつよい信頼関係が成立している。

使命では、忠実さも目立つ。根本的に受動的であって、自分のあり方を自分で決定するのではなく、端的には、使命をあたえる命令者にゆだね、あくまでも従順な使いとして使命をもつ。命令者の意のとおり、しかもその意をくみとって主体的に動こうというのであり、有能な「忠犬」に徹するものだといえよう。

使命感をもつ者は、使命を与える存在なり全体への強い帰属意識、深い一体感情をもっている。全体の悲しみは、自己自身の悲しみである。全体は、大いなる自己そのものであり、小さなこの自己が、そのためにつくすことは、大いなる全体において自己自身が生きることにはかならない。ひとは、個としての自己を保存・維持することに懸命で、ときに利己的であるが、使命に関しては、これはあてはまらない。反対に自己を犠牲にしても全体を保存しようとする献身的である。個が自己自身を全体の手段にしようと意志するのであり、ひとが、類的全体的存在であることを端的に示すことになる。しかも、使命においては、代償や報償は求めることがない。無私であり、献身的である。全体につくすことに生きがいを見出ししているのである。

ひとは、ここでは、本性的に社会的存在であることをしめす。自由は、ひとに固有の規定であり、かれは、他から自由に独立独歩であろうとするが、他面では、非自立的で、つよく社会・全体との結びつきをもとうとするのであって、ありやはちのように、全体のなかで束縛されて自分の生きがいを見い出していこうとする。使命は、全体と個（あるいはより下位の小集団）のきずなになり、ひとの社会性・非自立の心性を十分に満足させてくれる。それは、誰でもよいがというボランティアへの参加の比ではない。全体が、その個に使命を与えることで、個（あるいは小集団）は、自分が、たよりにされている、十分に存在理由をもったかけがえのない存在であることを確信できることになる。個は、その使命をはたし、これに尽力することで、その全体への結びつきを自らに強化しこれを確証していくことができる。使命に専心することは、これを求め命じた全体なり、至高の存在の意にしたがって、その意のなかに生きることになり、これに一体化し、そのなかにつつまれることになって、ひとは、深く安らぐことが可能となる。

6. 自発性

使節、伝道者は、使命を受けたら、いよいよ異国へと旅立ち、一人立ちしなくてはならない。命を受けるということで根本的には受動的で依存的なのだが、いったん受けてからは自立して自発的にこれを遂行していく。伝道＝使命は、孤独な異国において自発的になされることにおいて真に伝道＝使命となる。

自分で能動的自発的に遂行していくのではなくては、使命は発動せず、無と化してしまう。たんに与えられたのみの命令は、使命にはならない。やろうとの意欲のわからないもの、納得できないものは、これを「使い走り」などとして引きうけたとしても、「使命」としてはひきうけないであろう。その命令なり求めを、自分の能力の発揮の場所とし、情熱をかたむけていくにあたいするものとみなし、自主的主体的に遂行していこうということがなくてはならない。使命の能動性・自発性は、その被授与の所与性・受動性と対等の重みをもった不可欠の契機だというべきであろう。

なかには、まったく自発的で、命令等の授与のないように見える使命もある。道徳的な当為は、ふつう自己が自己に命令する形になるが、使命にも、こういう形のものがある。「ひとの務めは、本来こうあるべきだ」というような形で、理想を自己自身で自覚して、これを自らに命令することで成立する使命がある。これを、Bestimmung（使命＝規定＝本性）の使命というとしたら、これは、そとの存在から命令されたり期待されたりすることで成立する使命（これを Beruf の使命といっておこう）とは区別されるべきかもしれない。Beruf の使命は、根本的に、まずは他から発せられてという受動性・被授与の所与性がなくてはならない。しかし、Bestimmung の使命では、そういうものがなく、命令するのは、自分自身である。

自己立法的になっているのであり、さしあたり、他からという所与性は、ここには存在していないように見える。

もっとも、自己立法的に、あるべき務めを自覚するだけのところには、自らへの義務感あたりはあっても、「使命感」は生じてこないようにも思われる。一つの理想を達成しなくてはと心にちかうとき、同時にそこで使命感をもつことが可能になるためには、やはり、これを求め命じる声がどこから聞こえてきて、授与・受動を感じとることがなくてはならないのではないか。自分の属する民族的な精神とか、一体感をもった全体が想定されて、これから命令されたり期待されているといった、受動・授与の意識をもつ必要があるのではないか。とすれば、Bestimmung の使命にも、Beruf の使命と同様に授与の受動性の契機が見いだされるといわなくてはならないであろう。

なお、自発性というと、自由意志(voluntas)に基づくものとしてのボランティアも、その根本規定に自発性をもつ。しかし、その自発性のあり方は、ここ使命においていわれるものとは相当に異なる。ボランティアでの自発性は、なんとといっても、その仕事を引き受けるかどうかの選択の自由が中心規定となる。強制されるのではなく、自らの意志で選択するものだという自由・自発性である。その仕事は無報酬であり、強制されるものではなく、余裕がなくなったら自由にやめられる任意的なものであった。だが、使命の場合はそうはいかない。しばしば、引き受けることについては、強制的なものになる。報酬がでておれば、当然そうだし、自分が引き受けなければ重大な結果になるというような大切な仕事であれば、ボランティアのように、すきなようにとはいかない。そこから命令のある Beruf の使命では、当然それが強い。自らが自らに命じる Bestimmung の使命は、それよりは自由だろうが、それでも、自己の存在の証しとなる尊い務めとしてその社会のなかでの責務を自覚するのが通常で、全力をもってこれにかけ、自身の命を燃やしていくべきものとして、これを引き受けることについては強制の度合いが強いものとなる。

使命の自発性は、ボランティア的な、引き受けるかどうかの随意性・自由にあるのではなく、その任務を遂行していく場面での、その実行の自主的主体的な姿勢にある。ひとにいわれないでも、どんどん仕事を自主的にしていくという自発性である。自らに発する創意工夫をもって能動的に取り組んでいく、任務遂行への主体的な姿勢である。使節・伝道者としてひとりになって、自らが独自に一生懸命になってその任務に取り組んでいくという意欲の自発性である。この自発性は、ボランティアにもなくはない。しかし、ボランティアは、余暇の余裕にやるもので、また誰でもができるような手助けが一般的であって、これに命をかけるようなものではないから、使命に比べると、そういう、自己をきびしく駆り立てていく実行意志や創意工夫の自発性は、弱いものにならざるをえないであろう。

7. 分限の自覚

使命は、自発的な働きにおいて成り立つが、それは、分限をわきまえてのものである。全体のなかの一つの務め・役割であり、一つの歯車であることを自覚している。しかも、その限定された務めとしての使命は、自己の能力のもてる限界になることが多い。Bestimmung(規定=使命)を、ヘーゲルは、限定的な「一定 bestimmt」の存在「定有」の領域に位置づけ¹¹⁾、固有の「限界」をもって存立しているものとみた¹²⁾。使命では、自己の能力にふさわしい特定の務めをになうのである。使命を感じるものは、そういう一定の、限界づけられたおのれの分限を自覚し、これに挑戦し、精一杯をつくそうと自発的につとめるものであろう。

使命においては、自己の固有性への目覚めがある。全体等に自己をつくして、これに一体化しているのだが、他方では、自己自身がなにのものであるのかということ自覚していく面をもつ。使命が与えられるのは、その個の能力が評価されてその集団のうちで選ばれているのであろうから、そのことで、当人はその固有の能力にめざめることになる。しかも、自らのぎりぎりまでが試されるような高い課題に向かうのであれば、その限界の自覚も必要で、自分にできることとできないことの両方を示すおのれの「分限」に目覚めることになる。

使命は、全体の単なる部分・手段だが、全体から疎外されてはいない。使命のもとでは、全体はその個人のそとにあり、その点では、使命を担う個人は、機械の一歯車に、部分人間になっているともいえる。しかし、能力をおさえつけられ、これを剥奪されての部分化とは逆であり、自己の持ち分がそこに生かされて、自身生きがいを感じているのである。その限りにおいては、全体から疎外されたり、自己を喪失しているものではなからう。

使命は、全体の部分を担うものとしては、「分業」になる。分業は、マルクス(『ドイチェ・イデオロギー』『経済学・哲学草稿』)などからは、部分人間をつくるものとみなされて、そういう「一面的な使命 Beruf」の否定、「分業によってこれまで実践的につくられた使命 Berufの否定」¹³⁾がいわれ、その反対が、つまり、朝は大工仕事をし、昼からは釣りをしてというような、「分業を廃棄する」¹⁴⁾ことで可能になる「全体的個人 totale Individuen」¹⁵⁾「全体的人間 totaler Mensch」¹⁶⁾の理想が対置された。たしかに、近代資本制下の分業は、全体から疎外された部分人間をつくった。ルターが世俗の職業を神からの「使命」としたのは、聖職者のみが神の思し召しにかなった特別のものではなく、世俗の職業もおなじく尊いとみなした点において意義深いものがあつたのだろうが、その誇らしい Beruf(使命=職業)の名のもとにすすんでいったものは、極端な分業化であり、部分人間化、人間の自己喪失化であつたといつてよい。そういう分業は、たしかに否定されるべきものであろう。

だが、ひとには、各人各様の能力が、得手不得手があり、そのひとの人生は、そのすぐれている一定の能力を生かすことにおいて開花するものであろう。ひとが全面的に発達することは、そのもてる能力の多様な可能性の開発として、また、各人が、その社会の主人公とし

て、あらゆる方面のことがらに有効に関与できるために大切なことであろう。しかし、基礎的な全体的能力の開発とともに各人の個性もおのずからはっきりしてくるのであって、そのなかでとくにすぐれている点を一層のばし、その個性的な働きにおいて、全体のなかで固有の存在意義を見いだして社会的に貢献していけるなら、それは、本望ということになるのではないか。使命では、そういう分限の自覚をもって、全体のなかで、部分に徹して自己を生かしていくのである。

8. できる (Koennen) という自信

使命は、「できる」ものに与えられる。かれは、全体の立場から見て、その能力において適任だとみなされ、選ばれ指名されているのである。使命感をいただくものは、使命への自信をもっているのがふつうであろう。「この崇高な使命は、自分にふさわしいもので、これへの代替者はいない」と誇らしく情熱をかたむけていく。これは、選良意識として、周囲が惰眠をむさぼり享楽にふけていても、これにそまることなく使命に邁進していく誇らしい心がまえとなる。noblesse oblige(高貴なものの義務)の気概である。しかし、ときにはこれは、マイナスに作用し、「できない」ものたちの常識的なこえを聞こうとしない独善独断におちいることもある。

能力をもつ、使命をになうべき者は、また、その務めが真に重大だと分かる数少ない存在なのでもある。新しくはじめていくボランティアでも、そういうことはしばしばあるが、その境遇、立場、能力からいって、その使命は、かれにしか分からないことであったり、かれ以外には、その期待や要望の声なき声を聞きとり、理解することができないこともある。これを引き受けないとしたら、その重要な務めは、担い手のいないままに重大な結果をもたらすことになる。能力があり自覚があるからこそ、自己自身をそれにささげざるをえないのだというような使命感である。

与えられた命令が高すぎても低すぎても、ひとは、これを使命とは受け取らない。ひとを小馬鹿にしたような低い、こどもの使いのようなものを使命としないことはいうまでもない。「できる」といっても、だれにでも「できる」ものは、使命とはならない。当人ぐらいにしかできないような高い、いわばぎりぎりの「できる」ものが、使命にはいちばん適している。そのひとの能力を十分生かすものが使命となる。しかし、あまりに高すぎるものも、それは自分には分不相応で、分限を越えていて、使命としてはふさわしくないと受け取ることになる。ほかにあきらかに能力の高いものがあるとしたら、その人にくらべると自分は「できない」ものになり、自分にはふさわしくないものとなろう。ただし、そこでは自分が一番その点での能力があり、被害が最小で済むのだとしたら、客観的には無理なことで「できない」だろうと分かっている、ましな結果と少ない被害を考えて、これをひきうけ使命とするこ

とであろう。

ひとは、その能力があっても、ひとりのままでは十分にはこれを発揮せず、そこから刺激されて、その芽をのばしていくようなところがある。認められれば、その能力は、一層その存在を誇示しようと張りきる。使命は、当人を選ばれた存在であるといい、その能力をかつているのであり、ましてや、全体の命運のかかる危機的な課題があたえられたりすると、不可能なことも可能にするぐらいに、かれを発奮させずにはおかない。使命を与えられて、「できる」能力があると選ばれたものは、その能力を、さらに高めて「一層できる」ものへと自身を高めていくし、さらには、「できない」だろうといわれていたものも、使命のつよい命令・期待のもとでは奇蹟をおこし、「できる」ものとなっていくことすらある。

9. はたすべき(Sollen)義務・責務

使命では、高い課題が与えられることが多く、強い意志を必要とする。課題へと自己を強制して、使命は、当為的な務めになる。それは、はたされるべき重要な課題・務めである。当人にとってそれは生きがいと目的となるものであるが、あそびではない。真剣さの求められる崇高な務めであって、ときには、自身を厳しく強制して、その実行につとめなくてはならないこととなる。

花屋を自らの使命とし生きがいとするものは、こういう強制的な当為は持っていないのではないかといわれるかもしれない。ふつうの状態ではそうであろう。こういうものに限らず、使命は、いつも意識されているわけではない。使命にかかわって決断等をなすべき事態が生じたときに、使命を意識し、それにそった決断なり行為をなすものになるのである。花屋さんも、なにかの困難に出会い、商売としては店じまいした方がいいような状態におちいったとき、それまでは心の底にひかえたままであった「使命感」をあらためて浮上させて、困難にたちむかっていくのである。

利己的な自己の部分は、ばあいによると使命をいやがることであろうが、使命をひきうける全体的理性的な自己は、これを強制して、だまらせ、ひっぱっていく。あるいは、使命を忘れがちな日常のなかで、ふとこれを意識するとき、怠惰をむちうち自己強制していく。使命をはたすことは、そう簡単ではない。ときには躊躇することにもなる。理性意志は、これをふりきりはげまして、「できる koennen」のであれば、当然これを「なすべし sollen」と、自らの当為(Sollen)を自覚することになる。

使命は、自己強制的で義務的な側面を有する。ただし、使命の義務は、すこし特殊なところがある。義務は、低く基礎的なもののばあい、だれでもできることなので、それをしないこと、それへの違反は、許されず、厳格にこれを守ることが求められる。だが、ふつうのひとにはなかなか実行できるようなものではない高い義務は、「できない」でもともとであれ

ば、これに違反しても大目に見られる。ところが、使命の義務のばあい、ふつうのひとには出来ないもので、それは、高い義務になるのだが、低い義務と同じく、「しないことは許されない」厳格なものになる。使命は、崇高な義務であるけれども、当人には、能力があつて「できる」ことであるから、やって当り前の面があることと、その分担部分は、重要な任務であるから、これを欠いたばあい、重大な影響がでてしまうわけで、その点からも、しなくても許されるものとはなりにくいのであろう。

さらに、一般的な義務とちがって、使命では「いやいやながら」ということも、少ないか、存在しない。誇り・やりがい大きいので、エゴは、しぶしぶというところがあつても、その自尊心をくすぐられることもあつて、簡単に押さえられ、その不快感は、使命の遂行の喜びのまえに影をうしなう。ときに、怠惰な日常生活のなかでは、つい使命も忘れがちになり、とどこおりがちとなるが、それでも、「使命」を思い出したときには、いやいやながらということはなく、これに勇気をふるい起こし発奮するものであろう。

10. 自己実現

使命には、重い責任を感じなくてはならないとしても、それは、かならずしも重苦しい圧迫となるものではないし、使命を感じる時、これ自体から逃げだしたいと思うことは、あまりないのではないか。責任をもたねばならないということは、使命では、責任をもたせてもらえ、重責を担えるのだという誇りともなり、自己の存在の尊さの自覚となるのもある。

使命の遂行のうちには、誇りがあり、喜びがある。ひとは、みんなからその存在を認められることを求めている。社会的存在としてその存在に固有の意義が見いだされることを望んでいる。使命は、それを与える。しかも、尊い任務のひいでた遂行者という誇らしい意義を与えるのである。厳粛な任務として、使命には、忍耐・精進・克己が求められるが、使命感をもつものは、これを苦とすることが少ない。その努力は、しがいのある喜ばしい苦勞である。

使命には情熱がそそがれる。情熱は、悪いこと（少なくとも当人がそう思っていること）にはそそがれない。情熱は、感情的ささえをもった強い意志の働きであり、ことをなしとげる力は大い。使命では、その情熱がこれを担うもののうちに存在し、さらに、そこから、崇高な命令、高い評価、大きな期待が引き立て、押し立ててくれるのであつて、まさに鬼に金棒である。

ヘーゲルは、その使命（＝規定）論において、使命の「充実 Erfuellung」をいう¹⁷⁾。使命をになう者は、その目的にむけて立ち上がり、諸種の妨害をはねのけながらこれを貫徹し、これを達成（erfüllen）していく。その一步一步において、使命は「充実」度を増していく。主観的に、使命には充実感をもつ。情熱をかたむけ、命すらをすててよいところが見つ

かったのである。自己の最大限をつくす生きがいに満たされているのである。使命において、全体のなかで求められている自己の能力の発揮、その固有性の発揮がなり、自己がそこに実現されることになる。自分がなにのものであるのかという自己のアイデンティティーを使命は確かなものにしてくれる。

この点で、ヘーゲルが使命＝規定を「即自有 *Ansichsein*」としていることに注目してよいであろう。ヘーゲルは、*an sich*（自己に即して）と *an ihm*（自己のもとに）を区別し¹⁸⁾、後者は、自分のもとにあって所有している (*haben*) もの、したがって手離すこともできるようなものとの意味でつかい、前者は、自己に即しているものとして、自己そのものをなす (*sein*) ものととらえる。使命は、*an sich* なもの、自己の存在そのもの、自己の本性そのものだというわけである。使命は、神や全体から与えられ命じられたものであろうけれども、それは、これを自らの生きがいとし、これに生きることに於いてそのひと自身をあらわすものになる。使命は、即自有として自己そのものをつくっていくのである。

1 1. 「全体的個人」の使命

使命は、ひとに生きがいを感じさせることができる。新興宗教に生きる者が、まるでひとが違ったようになって使命感に生き生きとしているのを見ることがある。しかし、ときに、その行動は反社会的なものとなる。使命には危険な側面もありそうである。使命において、ひとは一途になり、みごとに成果をあげることができるが、その前提となる出発点の使命の命令そのものへの批判的な眼はないのが普通である。それが、ときに使命にそそぐ情熱をだいなしにしてしまうのである。

使命をいなくものは、それを命じる存在に一体化しているので、かりに、犯罪的行為を命じられたとしても、それが世間的には悪とわかっていても、命令者の大目的のやむをえない必要悪的な一手段として納得して、これを受け入れることになりやすい。使命感は、ここでは、悪のために尽力するという、おぞましいものになっていく。だが、使命という活動形式そのものが悪いのではないであろう（勇気や節制の徳と同様、その実行者しだいで、悪のもとでは悪に奉仕することになる）。使命は、創造性や社会性といったひとの本性を満たす活動の一つの形態であり、それを見出し、それをあたえていくことは大切なことであろう。使命は、持つなといっても、積極的に生きようとするものは、おそらくどこかにこれを見出すことであろう。世のリーダーたちは、自身とその組織を成員の信頼に足るものにしながら、各員の能力を見定めて、これを生かし、適切な使命を与えていくことが必要となる。

しかし、使命自体、悪につけこまれる弱い面をもっており、悪にのらない手立てをもつことも必要のように思われる。使命が悪の先兵になるのは、うけいれた命令そのものの善悪を判断しないことに大きな原因がある。とすれば、これをさげ、命令そのものを批判的に見ら

れるようにすることが重要なわけで、それには、何といても自分自身を命令者と対等の立場におくことであろう。カント（『道徳形而上学原論』）は、理想とする「目的の国」では、その成員は、同時にその「元首 *Oberhaupt*」になっていなくてはならないといった¹⁹⁾。各人が同時に立法者となって自己立法し、自分が自分に命令するものになる必要があるのだと。

「元首になれ！」とは、使命でいえば、自分で自分に命じる形の (*Bestimmung* の) 使命にせよ、ということである。そういう元首になるためには、自己がしっかりと自立していかなくてはならない。自分の行動を自分だけではなかなか決められず、まわりをうかがい、できれば誰かに決めてもらおうというような依存的態度に終始するわれわれには、これは、そう簡単なことではなさそうである。

同じようなことだが、マルクスの描いた、部分人間ではなく「全体的人間」²⁰⁾「全体的個人」²¹⁾ になれという主張にも傾聴すべきものがありそうである。使命は特定の課題の分担にとどまり、そこにのみ焦点をあわせがちである。そのすぐれた能力が生かされているということの反面には、ほかのこととか全体については、まったくお留守になっているということがあり、これが全体をにぎる命令者に、ときに悪用されるのである。全体への視座をもち、他のことがらへの多様な視座を同時にもっている全体的人間になるなら、そういう悪用にも自身において歯止めがかけられようというものである。

カント的な「元首」なり、マルクスの「全体的人間」になって、命令の正当性を判断し、これを自身の使命としてからも、問題がでてきたばあいには、それからの撤退も決断できるような、そういう姿勢があれば（やさしいものではなかろうけれども）、使命は、悪用から身をまもることができるのではなかろうか。

註

1) Max Weber; *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. Bd. 1. S. 46f.

2) Vgl. Weber; *ibid.* S. 66

3) *Fichtes Werke*. hrsg. von I. H. Fichte. Bd. 1. S. 210

4) *G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden*. Suhrkamp Verlag. Bd. 5. S. 132

5) *Immanuel Kants Werke*. hrsg. von E. Cassirer. Bd. 4. S. 329

6) Kant; *ibid.* Bd. 8. S. 219

7) Kant; *ibid.* Bd. 8. S. 219

8) Fichte; *ibid.* Bd. 4. S. 297

9) Fichte; *ibid.* Bd. 2. S. 309

10) Hegel; *ibid.* Bd. 5. S. 136f.

11) Hegel; *ibid.* Bd. 5. S. 117

- 12) Vgl. Hegel; *ibid.* Bd. 5. S. 136f.
- 13) Marx Engels Werke. Dietz Verlag. Bd. 3. S. 273
- 14) Marx; *ibid.* Bd. 3. S. 74
- 15) Marx; *ibid.* Bd. 3. S. 68
- 16) Marx; *ibid.* Bd. 40. S. 539
- 17) Hegel; *ibid.* Bd. 5. S. 132f.
- 18) Hegel; *ibid.* Bd. 5. S. 132.
- 19) Kant; *ibid.* Bd. 4. S. 292
- 20) Marx; *ibid.* Bd. 40. S. 539
- 21) Marx; *ibid.* Bd. 3. S. 68

(初出論文名 「使命論の試みー全体に生きる個の一形式」 『倫理学研究』(広島大学倫理学研究会) 第9号 平成8年6月)

第七章 使命の純粹さと誤ったセクト的全体

1. 人の本源的社會性

神戸の大震災では、ボランティアの活動が目をつけた。利己主義のはびこるこの世の中に、無償で、人の役に立ちたいと、全国から有志が集まった。ひとが、愛他精神にあふれ、社会的な生きがいを探している存在であることをあらためて示したと言える。ボランティアは、社会的存在としての人の本性を満足させるが、かならずしも各人の個性的な能力を生かすものにはならないし、また、生活の糧は別のところに求めなくてはならない。その点、自らの活動を「使命」と自覚できる場合には、これは、社会から求められた尊い務めで、しばしば生涯をかけられるものということになるから、そのやりがい・生きがいはボランティアの比ではない。ひとの社会的本性をみだし、個人の存在理由をしっかりと与えるものとして、「使命」は、見直されてよいものになるであろう。

大震災の直後、例のオーム真理教の一連の犯罪が発覚したが、それはまたそれで、社会的存在としてのひとのあり方を猛省させるものであった。教組の指示のもと、信者たちは、人を殺し毒ガスをまくといった狂気のさたを、おそらく「使命感」をもってやったのではないかと思われた。その特殊な全体のなかで自分の能力を生かして献身的に「使命」を果たそうとつとめていたように見受けられた。だが、それは、みごとに悪用された。使命の弱点として、所属する全体（支配者）への「盲従」があげられるが、それがオーム教の犯罪にも端的に現われていた。

個人主義をいくらすすめても、それだけではみだされぬものが人には残る。人は、社会的全体のもとで他者と共に生きていくことを切望する存在なのである。おろかしい全体に引き込まれて安易なやすらぎを得ながら、それから与えられる使命を担って悪行を率先して行なうようなことにならないためにも、使命と社会的な全体についてしっかり考えていくことが必要のように思う。全体といえば、国家とか民族が想起されるが、「お国のために」「民族のために」という戦士の使命感も、その自己犠牲の純粹さとはうらはらに、しばしばむなしい結果をもたらしてきた。使命における全体と個人の関係がどうなっており、いかようにあるべきかが問われる必要がある。ここでは、とくに使命にとっての「全体」というものを考えておきたいと思う。

2. フロムのいう「自由からの逃走」

E. フロム『自由からの逃走 Escape from freedom』（1941年）は、ファシズム台頭をゆるした現代人の精神的基盤を問題にして、自由を与えられた近代の人々が自己と自由を放棄

して、「自由からの逃走」をしてしまったと批判しているが、かれのこの見方は、使命を考えていくうえで、急所をつく指摘になるように思われる。「自由からの逃走」は、使命のアキレス腱である。オーム真理教のばあいも、使命感をもっていたであろうエリート信者たちは、その全体を担う邪悪な教組のもとに自分たちをなげだし盲従してしまい、各人の自主的な自由な判断は停止して、凶悪な犯罪にとのめり込んでいった。フロムのいう「自由からの逃走」、全体（その指導者・支配者）への逃避・盲従は、使命の最大の弱点になる。

さて、フロムは、「人類の歴史は、増大する個性化の歴史であり、さらにまた、増大する自由の歴史でもある」¹⁾という。ひとは（個人の成長もそれをくりかえすのだが）、まずは、自然的な「第一次のきずな primary ties (bonds)」²⁾のもとにあつて、安定した「全体 whole」³⁾のなかに、悠久のときを過ごす。たとえば「中世の秩序」がそうで、そこでは、「個人は固定した秩序のもとで、確固とした場をもっていた」⁴⁾のであり、しっかりとした帰属感・安定感をもっていた。やがて、そのきずなから解放され分離して、個の自立の方向へとむかう。この分離・独立は、自由になるということだが、フロムによると、それだけでは、ひとは、単に解放されるだけの消極的な自由にとどまり、はじめの自然的なきずなのもとの安心でいる帰属感や安定感を失い、「孤独と孤立」の感情をいだき、「不安」⁵⁾な状態に陥ってしまうのだという。

問題は、ここからで、自然的なきずなから解放された、この（消極的）自由の孤立・不安な状況からの歩みが、二通りに分かれることになるのだとフロムは主張する。一方は、これに耐えながら個人の真の自立・独立を勝ちとっていく「積極的な自由 positive freedom」⁶⁾の道であり、力と自信をもって所属の社会に生きていくもので「愛と仕事」「すべての人間との連帯 solidarity」の道⁷⁾である。もうひとつは、これがファシズムへの道でもあり、使命を考えるうえで欠かすことのできない「他山の石」であるが、せつかく自由が得られたのに、「孤独に耐えられないので、自我を失う方を選び」⁸⁾、自己を放棄する「自由からの逃走 escape from freedom」の道である。

この逃避の道は、自立できないで「第二の」「新しいきずな」⁹⁾を求める道であり、それは、第一のきずなのもとにあつたような「服従 submission と支配 domination」¹⁰⁾への退行の道である。それは、神経症的退行とか宗教にも見い出されるわけだが、フロムは、この逃避の当時の社会的大道としては、ファシズムにおける「指導者への服従」と、民主主義のもとでの「強制的な画一化 compulsive conforming」¹¹⁾をあげている。ここでは、使命論に引き付けるために、これらを「全体への逃避」にとまとめておきたい。自由からの逃走は、原初的全体からの分離に耐えて自立する方向にと向かうことができず、消極的な退行的解決をもとめたものであり、孤立をさけて第二の「きずな」へ、「全体」へと退行するものである。

3. フロムのルター批判

「使命 Beruf」論というルターが想い起されるが、フロムは、直接的には ルターの使命論を主題とするわけではないが、そのことをふくむルターの主張を「自由からの逃走」という視点からみて批判していく。

ルターのプロテスタントは、カトリック教会から権威を奪い去り、まずは、中世的束縛から解き放ち、個人に独立を与え（消極的）自由をえさせることをした。カトリックは、個人を「集団の不可欠の部分」¹²⁾とし、教会という権威のもとにしばりつけていたが、同時に、それは、安定したものとして、孤独とか不安からひとを守るようになっていた。ルターやカルヴァンは、そういう中世的な教会・集団の束縛から、個人を解放したわけだが、それは、同時に、ひとを孤独にし、無力を感じさせ、不安に陥れることになった。これからのがれるために、教会の抑圧から解放するとともに、同時に、神のもとへの「完全な服従」と「個的自我の滅却 annihilation」¹³⁾をルターたちは求めた。つまり、真の自由・独立にむかうのではなく、この自由から逃走して、神のもとに直接たたせて、これに盲従させることになったと、このようにフロムはいう。ひとの自主独立ではなく、反対に「神の手のなかでの無力な道具」となり「召使」になることを求め、むしろ、人から「自己確信と人間的尊厳の感情をうばった」¹⁴⁾のだと、ルターを批判的に捉えている。

ルターのいう「使命 Beruf」は、神から与えられる各人の世俗の「職業 Beruf」であった。フロムが神の無力な「道具」「召使」といっているのは、この神からの「使命」をさし、これを批判的に見ているのだと解してよいであろう。ルターが人の自信や尊厳の感情をうばったというのは、世俗の職業を下賤ではなく、聖職と同様に神聖なものを見なおした彼の使命論には、すこし厳しすぎる批判ではあろうが、価値・目的は、神にあったのだから、高所から判定するならば、そういう面をもっていたのはたしかであろう。

つまりは、プロテスタントが世俗の職業を「使命」ととらえたのは、使命のきずなによって、神という全一の支配者に一途につかえ、ひたすらにそのいいなりになり、「自由からの逃走」をし、これに盲従することを求めるものに他ならなかったということである。使命においては、これを命じる全体（とその支配者・命令者）に対して、しばしば盲従的になる。宗教においては、とくにそのことが顕著となる。知的反省を停止した信仰心は、盲従を徹底させる。その支配者が邪悪なばあい、どんな凶悪な犯罪・事件に手をかすことになるかは、オーム真理教のみならず過激な宗教において、しばしば問題となるところである。

フロムは、全体（神）のもとでの「道具」「召使」となることに批判的だから、全体の部分となる「使命」そのものを否定的に見ているのではないかと思われなくもないが、それは、自由を放棄してそうなることを否定しているのであって、部分になって生きることを否定しているわけではない。かれが求める理想は、自立し自由になって、全体の有効な部分となっ

て生きていくことである。「自由でありながらも孤独でなく、批判的であっても懐疑で一杯というのではなく、独立しつつも人類の不可欠の部分(integral part)として存在できること」¹⁵⁾を求めているのである。全体の有機的で有力な部分として生きる使命は、フロムでも、ひとのありかたとして、求められていると言ってよい。しかし、それがしばしば陥る全体への逃避・盲従、つまり「自由からの逃走」だけは避けなくては、せつかくの使命もだいなしになり、悪魔の手先にさえ墮す可能性のあることを指摘しているのだといってよいであろう。

4. 個人の積極的自由の道

フロムの『自由からの逃走』は、直接的には「使命」を論じたものではないが、そのことをも含んだ自由な存在としてのひとのあり方を論じていて、端的に使命の急所をつくものになっているように思われる。その主張は、主要には「人の社会史」について、その歩みを、人の個性化・自立化の過程として、自由獲得の道と見ていこうとするものだが、これは、個人の成長のあり方なのでもあった。フロムは、そういう社会史と「同じプロセス」を「個人の生涯 life history」にも見ることができるのだという¹⁶⁾。成長した個人は、社会的全体のなかにあって、自主的自立的に生きていくわけだが、よりかかれる全体があると、孤立に弱いひとは、幼児的方向へ退行して、この全体へと埋没してしまい、「自由からの逃走」をしがちとなる。使命を担う者でいえば、全体によりかかってしまい、自主的な判断を停止し、命じられるままに妄動して行くことになりやすいということになる。

使命を担う者は、帰属の全体に一体感をもち、これに尽くしていこうとする。その全体は、そこから見ると問題があっても、使命感をもつものには、他にかえがたいものであり、その与えられ命じられた使命を、崇高なものとして、これの達成には、しばしば生命すらもかけていこうとする。ここには、その全体への批判的な姿勢はないと言ってよい。その全体と距離をとって、自立した個人として批判的にこれに対処していこうという姿勢は、そう簡単にはとれないのが普通である。フロムのいう「自由からの逃走」状態がそこには生じやすい。そして、その自由の放棄・無批判的盲従によって、崇高な使命は、ときに犯罪的行為へ加担してしまうのである。悪いのは、全体の支配者・リーダーだといえ、そうなのだが、それにやすやすと乗せられてしまう方も、無防備で無反省で問題なのである。

自由を守り、自らに自己の行動の責任をとって、自主的に行為をなす姿勢をもっておれば、つまりは、フロムのいう、自立したものの「積極的な自由」をもっているならば、邪悪なものの犯罪に加担することなく、これをきっぱりと拒否できるはずなのである。使命をひきうけて、生命をもかけて献身していこうというような崇高な態度をもった者であれば、ばあいによると、邪悪な意図をくじくための勇敢な行為に出る可能性さえもつ。「自由からの逃走」がなければ、その犯罪的な全体には、与しなかったのであるし、みんながそうであれば、犯

罪集団そのものが成立しなかったはずなのである。ここでは、「自由からの逃走」は、ひとつの犯罪集団の全体を成立させた大きな原因の一つになっているのである。

フロムにおいて、「自由からの逃走」の道ではなく、もうひとつの、積極的な自由の道は、全体からの分離に耐え自立した者の、「愛と仕事」「連帯」の道であった。それは、使命に関して理想的な状況になる。使命を担った自立者は、愛をもって、みんなと連帯しつつ、創造的な活動をしていくが、その際、決して「自由からの逃走」はせず、盲従を拒否し、自立者として自主的に自由に判断し責任をとっていくわけである。

5. 使命にとっての全体

ところで、フロムのいう「自由からの逃走」をもって、使命の担い手が帰属の全体へ逃避・盲従していったからといって、ただちに犯罪に結びつくわけではない。穏健な宗教に帰依して、世のため他人のために生きようという方が、ふつうのことで、一部の過激な宗教が行なう犯罪は、むしろ、まれであろう。だが、ときには、というか邪悪な全体（の支配者）が出てきた場合には必ず、オーム教のように、そこでの盲従者は、犯罪に手を染めていく。使命感にあふれるものは、そういう全体のもとでは、百パーセント犯罪者に身を落としてしまう。使命にとってのこの全体について、すこし見ておこう。

使命感をもって、自己をそれに尽くそうという全体は、当人がそれに帰属感をもっている全体であって、全体ならなんでもよいというのではない。その全体が当人から見て、疎遠なものとか抑圧的に感じられていた場合、これに尽くして使命を担おうとは決して思わないであろう。使命にとっての全体とは、自分が犠牲になってもよい自分の全体、いわば「うち」と捉えられる全体になる。自分がそれに喜んで所属し、望んで帰一しているような全体である。この自分の（帰一する）全体のために生命をかけようというのであって、一般的な全体のために尽くそうというものではない（ただし、人類そのものを自分の愛する全体と見なす場合には、人類一般のために使命を感じることになる）。

自己をそのために犠牲にしてもよいと思わせるのは、その全体が自分をささえてくれ、自分を可能にしてくれているものだからであろう。それは、自分の存在の根拠がそのもとで与えられているような全体である。自己のよりどころとしての頼りになる全体である。そこにおいて、自分が守られているのであり、あるいは、安心でき、安らげるのである。その全体から自分に使命が命じられるとは、全体との結びつきの糸がこの全体の方から与えられたということであり、使命を担う者は、その糸を大切にし、自分の方からもしっかりと結びの糸を紡ぎだしていこうということになる。

帰一している全体には一体感情をもつ。その全体が苦しければ、自分もつらく、その全体の喜びは、自分の喜びとなる。それは、もうひとつの自分、大いなる自己ととらえられてい

るのだといえよう。自身は、その全体にとっては、極端なばあい、身体的全体に対する手足のようなものになるのである。手は、身体的全体と一体で、これの手段としてあり、これを離れて自存することは許されない。主体は、あくまでも全体にあり、この全体を真の自己とし、わがこととして、これのために尽くすのである。

あるいは、このように全体そのものとひとつというよりも、その各構成員がもう一人の自分と捉えられている場合もある。ここでは、この自分の献身は、そのもう一人の自分、もっとたくさんの自分のためにするものであり、つまりは、自分が自分につくすという形式をとる。わが祖国という全体のためにつくすのであり、かつ、その同胞一人一人を、もう一人の自分と感じて、そういう「自分」の幸せのためにと、すすんで犠牲になっていくのである。

使命を担うものからいうと、その全体は、もうひとつの自己であれば、なににもかえがたいものがあり、その全体には無上の価値を感じているのである。自分がそれのために使命を担い犠牲になるのは、いわば大いなる自己のために、あるいは、もう一人の、多くの自分の分身たちのために尽くしているのであって、決してあかの他人のためにそうしているのではない。使命を果たしていく自分は、生命を落とすようなことになるかもしれないが、そのことにおいて、全体にと生きていくのである。全体のために自身をつくし、そこへと自己を表現し、自己を実現しているのである。その犠牲・献身は、自己の達成・実現でもある。そういう場が、使命にとっての尊い全体になるのであろう。

6. セクト的全体

ところで、使命を命じる全体は、ふつうには、その担い手が所属している特定の全体になり、その特定のセクト的全体のために献身しようというのだから、使命は、別の全体との関わりからは、きわめてセクト的なものになる可能性をもつ。

その点、使命は、ボランティア精神とは対照的である。後者は、うちそとを問わず、むしろ、そとの者、疎遠なもののために役立とうというもので、国境をもたないコスモポリタンであり、博愛主義者になるといってよい。援助をもとめているところには、地のはてにでも駆けつけていこうというのが、ボランティア精神であろう。ときには使命感も、人類全体の立場から抱かれることがあるが、使命の多くは、自分の依って立つ特定の全体、たとえば帰属の国家のもとでの使命になる。それは、決してその外の別の全体（国家とか民族）のために尽くすものではない。対立し敵対的になっている全体同士ということになると、その先兵となるのが使命の担い手であり、そういう場合、他の成員に比して、かれは、きわめてセクト的なふるまいをすることになる。

使命を担うものは、全体の手段となり、自己自身をすすんで犠牲にするものとして、その精神は、端的に反エゴイズムであり、愛他的、利他的である。ところが、それは、特定の全

体のためのものであるから、そのそととかそれに対立するものから見ると、愛他的ではなくなる。自分の属する全体にもっぱら尽くすのであって、その外の全体には無関心か対立的であれば、外からいうと、セクト的であり、そのセクト（自分の全体）がよければいいという点では、使命の担い手は、むしろ「エゴイスト」になっているのである。

隣人愛にあふれたキリスト教にしても、来日した宣教師たちは、自分に使命をあたえた教団をよりどころにし、そのために献身したのであり、それをこえて、それに対立するものにまで尽くすものではなかった。伝道（使命）の担い手としてのかれらは、仏教教団に愛の精神をもってかかわるものではなかったであろう。隣人を、敵を愛せよとのモットーが気になる者は、仏教僧を人ではなく、サタンと捉え直したことであろう。自己（キリスト教）を主張し、これにしたがわない宗教は排斥したはずである。仏教の方からいうと、かれらのそういうあり方は、セクト主義そのものであったであろう。使命では、こういうセクト主義がふつうのあり方となる。そのよって立つ全体が特定の限定された全体にとどまるのがふつうだからである。

しかし、本質的には、使命の担い手そのものの精神はエゴイズムではない。ふつうの者が利己的に生きるところで、全体のために他の者のために献身し喜んで犠牲になろうとするのである。使命感をもった者は、崇高な自己犠牲の精神にみちあふれた情熱的な存在であり、少なくとも主観的には、無私的で純粋そのものである。問題は、全体の方にある。それがセクト的で偏狭な全体であることで、使命の担い手の純粋な献身がだいなしにされてしまうのである。

7. 有機的全体と枠組み的全体

同じ全体といっても、それとその部分との関係は、ものによってかなり異なってくる。身体的全体とその部分（手足）の関係と、ひとつの森とその木々の関係は、大きく異なる。前者では、全体なくしては、その部分がありえない有機的關係になっていて有機的全体をなし、後者では、部分はそれだけでも存立することが可能で、その全体は、単に諸部分が寄せ集められたのみの、希薄な集合的・枠組み的全体になる。セクト的になりやすいのが有機的全体のもとでの使命になることはいうまでもない。

その全体が動物のからだのようなものであれば、有機的になる以外ないのだが、ひとの集団では、同じ種類の全体であっても、これを構成していく各個人のありよう如何で、その全体が有機的なものになるかどうか違ってくることがある。同じ宗教でも、新興宗教のばあい、個人をつよく引きつけしぱりつけて、有機的な全体になることが多い。その全体に信者は深く帰一していて、他の全体とのかかわりでは、つよくセクト的になる。セクト的にふるまうことで他から拒否されると、ますますセクト的になり、かたくなにこれに結びついていく傾

向がある。ここでは教組が邪悪なばあい、信者は、とんでもない使命を実行してしまう。その点、既成宗教は、単なる集合的な全体により近く、わが国の町や村の神社は、多くは、町内会をまとめるだけのたんなる枠組み的全体でしかない。ここでは、リーダーがよからぬことを命令したときには、信者は、したがわないのみか、かれをリーダー役からひきずりおろすことにもなりかねない。誤った使命を持たないということでは、こういう宗教は、都合がよいわけだが、宗教そのものの充実という点では問題がある。つまり、ここでは、信者が盲従しないのは、信仰心がうすいからにすぎない。

新興宗教型というか、有機的全体では、使命を担うものからいうと、まず第一にあるものは全体であり、個人の犠牲を安易に求めるものになっていく。全体の命じる使命は、個人的には不合理と映るものも、それは個人の理解力をこえたものだからと、批判の対象にされにくくなる。個人は深く全体に帰依していて自己放棄の度合いが大きく、盲従しやすくなる。ここでは、自分の属する全体は、セクトとは捉えられないことが多い。自分たちの集団は、真の十全な全体と捉えられ、したがって、自らの全体をセクトにと格下げする他の類似のセクトの存在を許すことができず、ときには、これらと生死をかけた戦いをするようになる。

これに対して、既成宗教型の集合的・枠組み的全体の方は、各人の自由に寛大である。全体が希薄だから、各人が自立してということであったり、自立した個人が寄り集まっていくから、全体が逆に頼りないものになっているということであろう。全体は、自立した個人の単なる枠組みとして、希薄な存在であり、超越的でも絶対的な目的でもないということになる。絶対的ではないのだから、自分たちの全体が一つのセクトであることも受け入れることになる。自分は浄土真宗だが、となりは、臨済宗で、どちらもどっちだと冷静でありうる。もちろん、使命を命じる全体に対しては、各自は、その手段であり、犠牲になるべきものであるが、その度合いは、有機的全体の比ではない。期待されたり命じられたからといって、それをうのみにして盲従するようなことも当然少なくなる。

全体が有機的なものであれ、単なる枠組み的全体であれ、個人は、自立者として、自由を堅持すべきである。新興宗教は、しばしば有機的全体となって、個人をしばり、盲従を求めてくる。こういう全体のもとでは、とくに自立・自由がさげられる必要がある。教組はもちろん、全一の神とか仏であっても、各人は、これらに正面から立ち向かい、ぶつかり、ときには「仏を殺し」「神を殺し」というぐらいのいのちがけの姿勢をもって、自立者としてわたりあうことがなくてはならない。それは、使命に関してのみのことではなく、おそらくは信仰においてもそうあるべきであろう。

8. 誤りうる全体

全体は、個人にくらべて、一般的には、より善であり、より真実を体現していると思われ

がちである。たしかに、個々人の誤りは、全体のなかでは修正されていく可能性がある。しかし、全体そのものの判定・行動が真理だとか善だという保証は、どこにもない。個人間では正義が通用するが、国家間では、いまもって通用するのは力であって、弱小国の主張は、正義であっても、まず通用しない。歴史は、むしろ、(国家とか宗教の) 諸全体の誤謬と悪の展示会の感じがすることもあるぐらいである。

使命のよりどころとなる全体も、大いに誤ることのある全体である。セクト的全体であるとは、他のセクトからいうと、誤謬・悪からなりたった全体でしかないということである。その誤った全体のために率先して尽くす使命の担い手は、他の全体からいうと、ときには悪魔の手先になりさがっていることになる。

使命のよりどころとしての全体がかならずしも万全ではないことを、使命の担い手は、常々、注意しておかねばならない。ナチスの全体主義を前にしたアドルノは、「全体は、非真理だ Das Ganze ist das Unwahre」¹⁷⁾とさげんだが、使命では、おそらく常に、このことばを反復しておく必要がある。

個人間の争いでは殺人はまれだが、国家間の争いでは、しばしば戦争になって大量殺人を平然と行なう。しかし、だからといって国家のような全体をなくして無政府状態にしてしまうと、おそらく現世人類のもとでは、もっと野蛮でセクト的な大小の全体をばっこさせることになる。全体そのものを排除することは無理な話で、より誤りの少ない全体を求めることができるのみなのであろう。

手足の部分と身体的全体のようなものの場合、手足には全体を統括する機能はないから、頭脳が全体のために手足に命じることをそのまま受け入れていく以外ない。しかし、人の集団の全体の場合、その全体を統括する命令者は、その成員とまったく同一の能力をもったものになる。ちがうのは、命令する部分にいるか、される部分にいるかという位置のちがいのみである。ということは、指導者は、その構成員と同じく誤るものであり、構成員も、指導者と同じく命令する能力があるということである。使命を担う者は、自分が誤りうるし、ときには邪悪な考えにとらえられることを知っているのであれば、指導者も邪悪になるはずなのだとわきまえておかねばならない。それへの無批判な追随、盲従は、使命の担い手の怠慢にもなると知るべきであろう。

しかも、全体は、リーダーの意のままにもならない。彼らの意思からも独立した、制御のできない「ばけもの」にさえなる。多様な意見の妥協の産物が全体の指導原理となることもある。個人は、理性をもつが、全体は、その理性同士のつぶしあいの末、理性をもてないままになることしばしばであり、個人以上に誤り、無原則になるのが全体となる可能性もある。

9. 盲従への歯止め

使命を担うものは、所属の全体につよく一体化していて、それへの盲従を結果しやすい。しかし、その全体は、誤るし、セクト的でもある。使命を担うものは、そのことを、したがって自身の使命の是非を、常々反省していくことが必要になる。

その点で、フロムの「自由からの逃走」論は、「使命」批判にラディカルである。使命が悪の手先に陥らないようにするには、自立した個人の自主的な判断が大切であり、「自由からの逃走」、つまり、使命を命じる全体（の支配者）への逃避・盲従は、何としても避けられなくてはならないというわけである。全体がたんなる枠組み的な全体にとどまっているばあい、有機的全体よりは、各自は、自主的に自由にふるまいやすい。しかし、それでも、自立精神をしっかりとっていないと、結局は、みんなに流されてしまう。有機的全体は、個人の自立を妨害してくるから、常に各自は自立精神を自覚して、これを鼓舞しておくのでなくてはならない。全体に対するとき、各人は、自由を堅持し、自主的に判断し自立的に行為していくという、フロムの「積極的自由」をつちかっっていくことが求められるのである。

このことに関しては、先にもふれたが、各人が、カントのいう「元首 Oberhaupt」¹⁸⁾やマルクスのいう「全体的個人 totale Individuen」¹⁹⁾になるべきだということが反芻されてよいであろう。全体からの使命の命令も、単に臣民として服従するだけではなく、同時に「元首」として自らにその是非を判断していく姿勢が必要なのである。あるいは、各人、「全体的個人」として、多様多彩なことがらに目をむけ、より広い全体から、冷静に理性的に判断し、かつ、かけがえのない実存・個人として存在するようにつとめておく必要があるということである。

個人のがわでは、そういう自立・自由の堅持が求められるが、他方で、全体自体のがわでも、その組織形態に「自由からの逃走」になりにくいものを求める必要がある。これについては、フロムは、「個人の十全な発展」のための諸条件を創造していくシステムである「デモクラシー」をつくりだしていくべきだと主張している²⁰⁾。民主的組織は、盲従をもとめる専制的組織とちがい、各人がカントのいうように、臣民であるとともに元首なのであり、全体の方針にもみんなが自由に発言していくことができる組織であって、全体の暴走をチェックすることが可能になる。情報の独占もやめてみんなに公開し、各人が各様に全体を思慮し、自発的に全体へと関与していく民主主義の組織は、自立性をそだてる教育的組織ともなる。

しかし、そういう組織を生かすのも殺すのも、結局は、自由な個人しだいであるから、積極的自由のもとでの自立した各人の、しっかりした判断が、主体性が、やはり何よりも大切なことになる。その点で、アドルノの「全体は、非真理だ」ということばは、全体に献身しようという使命感をもつ者の、よくよく噛みしめておくべきことばになる。使命のばあい、これを命じる全体は、通常、真の全体ではなく、ひとつの有限な全体、他から見ると悪と誤

謬から成り立ったセクトになっているのである。セクトの悪行に盲従している可能性のあることを、使命を担っている者は、くりかえして反省すべきなのである。

使命の担い手は、自分の帰属する全体と一体で、これをもう一つの自分と見なして「ひいき」している。ひいきするから献身しようということになるのではあるが、いったんは、ひいきをやめ、もう一つの自分とみなすことを停止し、これをつきはなして、豊かな想像力を駆使し多方面から反省して、自他を冷静に捉え直していくことが求められる。自分に使命を与えているこの全体は、「非真理」なのだとは一度は疑ってみる必要がある。自分たちのリーダーも、たまたまうえに祭り上げられているから命令しているだけであり、人間的弱さにおいて、各メンバーにけっして負けない存在であることを忘れないようにしなければならない。

全体が真でも善でもないのならば、それを無反省に至上の目的にすることは、愚かしい態度となる。かけがえのない、この実存・個人をもっと大切にすべきである。使命は、全体のために個人を手段とし犠牲とすることをいとわないが、全体は、必ずしも個人を大切にはしない。個人主義・ヒューマニズム・実存主義を、「全体」のまえに常々対置しておくことが必要である。この点からいうと、自由な個人と人間愛を根本におくボランティア精神は、卓越している。この「ボランティア精神」をふまえつつ、自身の全実存をかけられる「使命」を自覚していくことが、社会的存在としてのひとの一つの理想になるといえよう。

註

1) Erich Fromm; *Escape from Freedom*. New York. 1964(1st printing, 1941). p. 238

2) *ibid.* p. 35f.

3) *ibid.* p. 41

4) *ibid.* p. 254

5) *ibid.* p. 103

6) *ibid.* p. 35

7) *ibid.* p. 36

8) *ibid.* p. 257

9) *ibid.* p. 37, 141

10) *ibid.* p. 142

11) *ibid.* p. 134

12) *ibid.* p. 108

13) *ibid.* p. 81

14) *ibid.* p. 83, 111

15) *ibid.* p. 257

16) *ibid.* p. 24f.

17) *Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften*. Bd. 4. Suhrkamp Verlag. S. 55

18) *Immanuel Kants Werke*. hrsg. von E. Cassirer. Bd. 4. S. 292

19) *K. Marx F. Engels Werke*. Bd. 3. Dietz Verlag. S. 68

20) Erich Fromm: *ibid.* p. 274

(初出論文名 「使命の純粹さと誤ったセクト的全体—E. フロム『自由からの逃走』を手がかりにして—」 『広島大学文学部紀要』第56巻 平成8年12月)